

爲る。

俗脱。鍋蓋。

平たき顔のものないう。鍋蓋で鼠を押へたやう。

直木に曲がる枝。直なる親に不正なる子ある如し。直すは一時見るは未代。

何事にて一時の勞を省まず直し置けば、永久の親を買ふべしとなり。

生壁を算盤でたゝいたやう。

生木に針を打つ。

若き者を苛虐するなど無情の所業ないう。

生木の燃えたちしと、百姓の起ちしほど恐しき者はなし。

百姓一揆の恐るべきないう。

生木を割くやう。

男女互に相戀慕せるものを強いて引き別れさせないふ。幸もおもひやりのなき無情の所業ぞとの義。なまざとほりほりにおつる。

懶惰者の節句働。懶惰なる者平常人の働くべき時に働かず、節句など人の一般に休む日など却て働くことあり之ないう。

なますは酢で持つ男は氣で持つ。

なますは酢の長きが好く、男は氣質の美きが、長しとなり。

生兵法大疵の基。

何事にて未熟にては大失敗を求むる基となるとの義。生とは未熟ないう、兵法に精達せずしては、却て大疵を求むることあり。「本朝俚諺」博物志長房得符靈公、以是制服百鬼、其後鬼竊其符、因以殺長房、

生醉本性忘れず。

上月本性忘れず(シの部)の條を見るべし。鉛の刀で人を切つたといふ。

爲し得べからざることを爲し得たるやうにいふ喻。訛は國の手形。

言葉は國によりて其訛りを異にす、言葉の訛は、能く其何の國たることをあらはすものなれば、うくいふ。

南無阿彌陀佛金ほしや死んでも命のあるやうに。

強慾ないう。南柯の一夢。

人間の一生は果敢なき者なりとの義。昔淳于芬といふ人、酔ひて夢に、大槐安國王封じて南柯太守となす、居ること二十歳にして、夢醒むれば、槐の木の下に眠れるなり。此故事より出づ。邯鄲、一炊の夢(カの部)と同義。

難行苦行苦の行。

山伏のことないう。山伏は山居して難行苦行するを以て樂とす昔は痴に通はず。難行苦行するは痴漢の行と

南無三寶。

何事によらず仕損ぜし時南無三寶といふ、是懺悔の言なり、三寶の徳として能く諸罪を滅すとなり。爾に出づるものは爾に反る。

自分より出でしことは結局自分に報い來るとの義。曾子の語なり。「孟子」「曾子曰。戒之戒之。出平爾者。反平爾也。」

何でも思ふやうに行きや禿へ毛が生ゆる。

何事を爲しても萬事すべて意の如く成るものならば、禿頭に髮毛を生やすこと出來得べきが、人世不如意勝なれば、思ふ通りに成ること難しとなり。

南都の半佛雲狐、雲狐之半佛東福。

大佛をいひし諺、南都の大佛の半分なるが雲狐、雲狐の佛の半分なるが東福寺の佛といふなり。雲狐とは鎌倉深澤なり。「梅花無靈藏」萬里居士鎌倉に遊び深澤へ趣く條に「見長谷觀音之古道場。相去數百



步而兩山間逢銅大佛。佛長七八丈。腹中空洞容數百人。背後有穴脫鞋入腹。(中略)兄在南都。弟東福。可憐佛亦去年貧。寶殿塵蝕無堂宇。腹瘦穠容數百人。南風競はず。

其の勢振はざる義。「左傳」襄公十八年「晉人聞有楚師。師曠曰不害。晉驟歇北風。又歇南風。南風不競多死聲。楚必無功。」「書言故事」「衰弱不勝。南風不競。」我國にて南朝の衰微せるに云ふ「日本外史」南風不競。俱傷共亡。

南部の置つぎ津輕の手長。

酒のつき方をいふ。

難無くて七癖。

何の非難すべき點もなきよき人と見るにも、何か缺點或は癖のある者なりとの義。

蛞蝓の廻國するやう。

ねるくさすること。遅緩なる喩。

蛞蝓を呑むと聲が美くなる。

俗説。

蛞蝓を乾固めると刀の目釘になる。

俗説。

ならぬ中が樂。

物事未十分成就せざる中は樂ありとの義。

ならぬ中が花。

前の謎と同義。木に實のならぬうちは花といふに通はせたるなり。

ならぬ堪忍するが堪忍。

忍ぶべからざるを、忍ぶが堪忍ぞといふ義。「養草」堪忍のなる堪忍は誰もするならぬ堪忍するが堪忍。

習はぬ經は讀めぬ。

習はざることは知る能はず、習はざることは爲す能はずとの義。

習性となる。

人の天性氣質も、習慣の如何によりて、善とも惡ともなるをいふ。「尙書」太甲上篇「伊尹曰。茲乃不義。習與性成。」

習唯識俱舍八年。

習はざることは知る能はず、習はざることは爲す能はずとの義。

佛學の難きをいふ。

習ふより慣れよ。

學び知るよりは、經驗にて知るが優るとの義。「唐語彙要」凡事學不如慣。

形に似せてへそを巻く。

其企つる所身分相應なりとの義。

なり上りの出來出頭。

艱苦を逃れしと思へども、依然として他の艱苦身にあるをいふ。癩病上りの出來出頭にて、出來出頭とは身の關節悉く不隨となる病なり。

態にもふりにも構はぬ。

服装などに意を介せざるをいふ。

鳴る雷。

自業自得といふほどの意にて自分の所業より墮落に陥るとの義。一休和尚の狂歌におのがうつたいこのばちやあたりけんづでんどうともおちてなるかみ。鳴子を引く。

「吉野郡女楠」具足震ひのがた〜鳴子を引くに

なら—なる

異ならず

成るはいやなり思ふはならず。

欲する所は得ず、得る所は欲せずとの義。「通鑑」作者不居、居者不作。

鳴る腹に祟なし。

腹が鳴るのは故障なしとの義。

鳴る腹は下る。

腹が鼓鳴するときは下痢するものととの義。

なるほどちぎる秋茄子。

成程といふ地口なり。

成る者は鼻から。

物の成るは一定の順序あるをいふ。人は鼻先に成る(口)の部(参照すべし)。

なる物は花から遠ふ。

よき結果を得る者は其本来の性質もよく、好結果を得ざるものとは自ら異なる所ありとの義。

馴て舞。

「和漢故事要言」習ふに非されども、自然と目に馴れ



心に染みて舞ふ事を悟るといふ心にて、何事によらず人の心も移り易き物なれば、其馴るゝ所を慎めといふ心なり。嶺表異録に云、蠻王漢の使を百花樓に向へ入れて、舞象の曲を散く、樂を起す時、人象を引き庭に入れけるに、拍子に隨ひて、蹄を揚げ、頭を動かして、尾を振つて、舞ふに、皆音樂の節奏に合へりとあり。誠に音類だも馴れぬれば此の如し、况んや人として、馴るゝ所に和せざらんや宜哉孟母の三たび居を遷し、事。」

名を取るより徳を取れ。

進んで名を取らんより退いて徳をとれとの義。  
「東萊博義」其の名を竊むは一時を欺かざるに非ず、しかも他日人其の似たるについて其の眞を求めば、則ち情見え實現はる。」

に

似合くの釜のふた。

雙方相似寄れるをいふ。夫婦の相似たる喩。

似合はぬ僧の腕立すな。

不似合なることを爲すなかれとの義。僧は忍辱を旨とし腕力等を用ふべきにあらず故にいふ。  
沸湯を飲ませる。  
人を死地に陥る義なり。(人を苦しむることをいふ)

苦い顔をする。

不嫌機なる顔容をなすをいふ。

二階から紙帳。

吊あがりたる喩。

二階から尻をわふるやう。

一向其効無しとの義。又迂遠なる喩。

二階から目薬。

二階から尻をあふるに同じ。

二階に上りて犬に吠えらるゝやう。

安然なる事。親舟に乗つて犬に吠えらるゝに同じ。(オの部) 参照。

逃した魚は大きい。

逃した魚は大きい。

取逃したる者の好かりしと思ふが、人情の常なりとの義。  
逃したものに小さいものない。

前に同じ。

二月一月は小糠三合で暮す。

二月は遊げて走るといひて、過ぎ去る事の早きより云ふ。二月一月は米の費ること少きをいふ。

二月社日に雨降れば菓實少し。

俗説

二月虹を西に見れば五穀の價高し。

二月中に虹が西方に見はるゝときは、五穀凶作なりといふ義。

二月の白畑三月降麥。

二月早し、三月雨降るは、麥によしとの義。

二月の月蝕は粟の價安し。

二月月蝕あるときは粟よく出来るといふことなり。

二月は遁げて走る。

二月の月は知らぬ間に過ぎ去るとなり。

苦蟲を食ひ潰したやう。

苦い顔をするをいふ、不嫌嫌の容をいふ。

面炮は濁淫の兆。

俗説

憎いかなしい嬉しの三つは一生忘れず。

憎いと感じたこと、悲しいと感じたこと、嬉しいと感じたこと、此三つは感動すること強くして心意に深く印象を刻み込むもの故一生忘却することなし。

憎い鷹にも餌を飼へ。

怨に報ずるに徳を以てすべしとの意にて、憎く感ずる所の人に對しても好意を以て接すべしといふ義なり。

憎いは可愛の裏。

愛情の裏には必ず憎悪ありとの義。

憎い者は生けて見よ。

たとへ悪む所の人なりとも、怨を以て報いず、先須らく堪忍すべしとの義。「諺草」「菅原の御歌に。いのちがな、いきの松原いきてなを心づくしの人のほて見む」憎々の嫁の腹から可愛の子が出る。



姑は嫁を憎むと雖ども、其腹より生れたる孫は非常に可愛がるとなり。

二九の十六。

胸算の外れたる喩。九々の呼聲二九は十八なり、そを十六と呼ぶは算外れなり。

憎まるゝ所には居られても煙い處には居られぬ。

憎まるゝは猶忍ぶべけれども、煙に煽さるゝ處は堪へがたしとなり。煙い所は忌憚する所ある人の前をいふ。

又くすぶる所をいふ、苛めらるゝ所をいふ。

憎まれ子頭堅し。

世人に憎まるゝ位者の氣象のしつかりしたる所あるをいふ。

憎まれ子世に出づる。

人に愛せられずして逆境に立つ者が、却て立身出世することあるをいふ。「吾吟我集」憎まれ子世に出づるてふたぐひかな、載より外に宵つ若竹。」

憎まれ子世に憚る。

父母にも憎まるゝ位者は、世人より憎悪を受けて業

を保ちがたしとなり。「陸草」五代史、諺云、偏愛子、不保業。是今の諺と言異にして意同じ。」

逃ぐるが一手。

應病者の虎の巻なり。「唐語纂要」三十六計走爲上計。是は將士が敵に遭ひて直に走るを嘲りたる詞にして轉じて事に臨み直に手を引く者を嘲りいふ。逃るが奥の手ともいふ。

逃ぐるが奥の手。

逃ぐるが一手に同じ。

逃ぐる目を見る平家。

園芸の語。平家は源氏の爲に窮迫せられて逃ぐる目を見たるもの故地口としたるなり。

逃ぐる者道を擇ばず。

逃げ去るときは道の何如を問はずとの義なり。

逃げた鱈は大きく見ゆる。

逃げた鱈は大きく見ゆる。

錦の裏はくづばかり。

表面頗る立派なれども、裏面のきたなきをいふ。

錦の袋に糠味噌を包みたるやう。

其外面を立派に飾れども、内容實質の美ならざる喩。錦の袋に馬糞を包みたるやう。

「錦の袋に糠味噌を包みたるやう」といふに同じ。

錦を衣て歸る。

出世して故郷へ歸ること。故郷には錦をかざら(コノ部)参照。

錦を衣て夜行するやう。

見え榮えせずとの義。「史記」項羽曰富貴而不歸故郷。如若錦夜行。誰知之者。

西の國で百萬石も領つて居るやうに言ふ。

己の資産を誇大にいふ喩。

二十一波錢で腰巻を買ふと下の病を煩はぬ。

俗説

二十一波錢を入りに口に打てば齒痛が治る。

俗説入口は月口即ち道入り口のこと。

二十五の菩薩もそれぐの役々。

にしにそにた

親音、勢至、藥王、藥上、轉賢、法自在、獅子吼、陀羅尼、空藏、德藏、金剛、光明王、山海惠、嚴王、珠寶、月光王、日照王、三昧王、定自在王、大自在王、自爲王、大威德、無邊身、を二十五菩薩といふ。皆司る處異なり。衆多の人各自に役を有すとの義。

二十三夜待を年中すれば願望かなふ。

俗説

二四不同二六對。

詩の平仄排列法を教へたる諺。二字目が平字なれば四字目が仄字、六字目がまた平字、二字目が仄字なれば、四字目が平字、六字目がまた仄字なりと云ふこと。

西も東も分らぬ。

不知案内のこと、辨知せざること。

二束三文

頗る價の廉なること。

二足草鞋は履けぬ。

人にして二業を兼ねること能はずとの義。

煮たか焼たか。



相似たるをいふ。格別の相異なしとの意。  
似たもの鴉からす

相似寄りたるものといふ義。鴉と鴉と相似ておなじやうなればなり。堀部安兵衛、竹林唯七、大高源吾、の三人を赤福の三羽鴉といふは相似寄りたる所あればなり。「和漢故事要言」是は人としては必先學問を勵まし物の理を辨へ知るべき事なるを十人に八九は多く愚昧にて鴉の多種ある事をさへ知りたる者なしと云心也。本草綱目四十九林禽類部に云時珍が云鳥有四種。小而純黒。小鸛反哺者。慈鳥也。似慈鳥而大嘴腹下自不反哺者。雅鳥而大白項者。燕鳥也。似雅鳥而小赤。鸛穴居者。山鳥也」とあり。

似た者夫婦。  
夫婦の氣質は能く相似寄るものなり故にいふ。  
にたやま紬つむぎ

似て非なる者に言ふ。「骨董集」そるり狂歌咄四の巻に丹田山紬を菊安染にしたるをかしとあれば、この丹田山紬がさまは、なべての紬に似て、性のおとりたるなり。

似たりや似たりかまづばた杜若つばきいづれあやめと引ひきぞわづらふ。

次の跡を見るべし。  
似たりや〜花菖蒲はなしょうぶ。

相似寄りたるをいふ杜若と花菖蒲とは能く相似たるものなればかくいふなり。

似たり寄りたり。

能く類似せること。

似たるを友とす。  
君子は君子に交り、小人は小人に交り、品性の相似寄りたるもの各友たりとの義。

日蓮宗は天台宗の蟲蝕むじくひ、一向宗は浄土宗の蟲蝕むじくひ、山伏は眞言宗の蟲蝕むじくひ。

日蓮宗は天台より出て一向宗は浄土より出て醍醐派は眞言宗より出てたるなり。故に云ふ。

日光観にっこうくわんないうちは結構けつこうといはれぬ。  
下野の日光は、東照公の廟地にして、其結構壯麗を極

め、金碧煥爛影鏡の精緻な極めたる實に目を驚かすばかりなり、故に此謬あり。日光といふより結構と押韻したるなり。  
日計ひつげい足らず月計げつげい餘りあり。

得る所少くして一日に計れば足らざれども、一ヶ月に積もれば、多く得て直に失ふより、遙に其得る所多くして、餘り有りとの義なり。「莊子」日計之不足。月計之有餘。

につちもさつちも動うごけぬ。  
處置のつけやうなきをいふ。そるばんのよみ聲二進三進をかけたるしやれなり。  
表あらわても焼やいても食くへぬ。

情を以てしても理を以てしても容易に制すべからざる者をいふ。尋常一様ならざる、剛情のものをいふ。  
二度あることは二度。  
俗説に何事にも二度までありしことは三度ついで

ありといふ。  
二度の神かみは正直しやうじき。  
世人事を占問ひ、一度にして未だ疑を除かざれば、再

度之を成して、二度の神は正直とて、事を決定す。往昔人皇五十四代聖武天皇奈良に都し玉ひ、天平年中何方ともなく、聖朝安穩天皇長地久と唱ふる聲、天聽に入り、其聲を尋れ求めさせたまふに、深山の大木の上に、小童是良弁僧都なりと唱ふ、是奇異の事なりとて風聞に召し、其由を勸問あるに、良弁何卒大伽藍を建立し佛法弘通の大願ありと勸答す。又或夜天皇御感夢のこゝとあり、良弁の前生は支那國の比丘なり、弘法の爲天竺に赴き玉ふに、流沙川に至り越えんとすれば、貧なくして渡ることを得ず、然るに人の渡守之を憐み貸なくして之を渡す、此時比丘誓て曰、汝未來世に十善萬乘の王位に至るべし、我其國に生れ、大善根をなさしめ、終に佛果に至らしめんとて、其時の渡守は即聖武なりと夢見たまひ、彌良弁を歸敬し玉ひ、伽藍建立の發願ありしかども、神慮如何あらんと、天平十二(辛巳)年、行基大僧正を以て伊勢大神宮の神慮を伺ひ玉ふ。其言に夫我國は神國也、神事專祭禮の儀を先とす、但佛菩薩本有の光を和げ玉ふならば、我大願を納受したまへとて佛舍利一粒を奉納し玉ふ。行基勸を奉て勢州に至り、内宮南大門大杉の元にて七日七夜の問法樂し、



佛像伽藍建立の事を祈り、神慮を伺ひ給ふに、滿七日の夜、大神宮の臨宣に「實相眞如之日輪破ニ生死長夜時ニ本有ニ常往之月輪拂ニ無明煩惱之雲ニ吾達ニ離レ過本願、如ニ闇夜得レ燈珠ヲ雖レ受寶珠。若ニ波レ海得レ船依其各願將理飯高郡」と告玉へり。即行基菩薩涙袖を潤ほし都に還り、神勅の旨奏聞す。帝愍感まじく、誠に本地の事顯然として神慮に應ぜしと敬感不淺、彌建立の思召一決したまふ。併行基は佛者の事なれば、之を信ぜざる人もや有らんかと、此疑除かん爲にとて、重て同年十一月三日左大臣正三位橘の朝臣を勅使として、佛像建立神慮に應ずるか否かを問ひ奉る、然るに勅使歸参の夜同十五日の夜天皇御夢想の事あり、吾朝神國也。神明可ニ奉崇。日輪即太日如来也。本地處舍那佛也、衆生此理を悟り可レ歸ニ依正佛ニ告玉ひて佛正體を顯現し、光を放ち示し玉ふ。天皇兩度の神勅同意なれば倍々歡信し玉ひ、即天平十五年十月十五日江州信樂の里にて舍那佛の銅像を鑄奉るの事始あり、如此二度の神勅一致なり、故に二度の神正直といふならむ。

**二度喫驚**  
一度喫驚せる事ある上に又重れて喫驚するにいふ。聞

いて喫驚、見て喫驚。といふが如し。  
**二兎を逐ふ者は一兎を得ず。**  
同時に二の事を得んと志すものは遂に何れも得ること能はずとの義。西洋の諺より出づ。  
**二の足を踏む。**  
物事致て進み爲さず躊躇すること。  
**二の舞を踏む。**  
他人の失敗したる轍を踏むこと。二の舞といふは能に安座とておもしろきとあり其次に舞ふをいふなり、而して二の舞の面は伶人の舞の面に色赤くして恐ろしき面あるをいふ。  
**二の舞をやる。**  
二の舞を踏むに同じ。  
**二の舞を踏むに同じ。**  
二の舞を踏むに同じ。  
**二の矢がつゝかぬ。**  
再度の資力をつゝくること能はざるをいふ。矢は二本を一と手といひ、一の矢をハヤといひ、二の矢を乙といふ。一の矢にてあやまたば、すぐ二の矢は出すべきものなり。

**二の矢をつぐ。**

初めに資力を出し、後又再度資力を投ずる喻、前の諺参照すべし。

**二の矢をつがれぬ。**

二言といふこと能はざる場合にいふ。

**俄盲人の杖失ひのやう。**

憑依する所を失ふ喻。

**二八月は船頭のあぐみ時。**

陰曆二月八月は強風起る季節なれば、航海しがたし、故に船頭のあぐみ時といふ。

**二八月の雷には隣に行くな。**

二月と八月は天候の暴る、季節にして雷鳴すれば能く落つるものなり故にいふ。

**雞寒うして木に上り、鴨寒うして水に入る。**

時に従ひ其宜しきに處するを謂ふ。鳥の如きすら各其天性に應じて身を處置することを知る、人も亦天性に従ひ、各處世の道を講ずべしとなり。「諺草」老學菴筆

詔、淮南詠曰。雞寒上樹。鴨寒下水。驗之皆不。然有二。一曰。雞寒上距。鴨寒下嘴。上距謂足縮。下嘴謂其味。於翼間也。

**雞を割くに焉ぞ牛刀を用ゐん。**  
小事を理するに大なる力を要せずとの喻。孔子が子遊に戯れし言より出づ。「論語」子之武城。聞弦歌之聲。夫子莞爾而笑曰。割雞焉用牛刀。」

**雞の卵をあたゝむるやう。**  
毎日く寢床を離れずといふことか。

**雞は徒跣。**  
極めて明白なる事をいふ。

**雞を割くに牛刀を用ふるやう。**  
大器を小用する喻。「論語」陽貨篇「子之武城。聞弦歌之聲。夫子莞爾而笑曰。割雞焉用牛刀。」

**新瀉にては杉と男はたゝぬ。**  
新瀉にては杉育たず又女の勢力の甚しき地故、男はたたぬとなり。

**新瀉は八百八後家。**



新編は寡婦多しとの義。

二歩は唯取。

將基の話。

にべない返事。

愛相のない飾りのない返事をいふ。にべは魚膠にて物につくものなり。にべないといふはつきどころなきといふ事。

にべもしやりくもなし。

しやりくとはせりの詭言なり、せりは鐵砲の用具。にべは弓の用具。にべもしやりくもないとは用具なしのことにて飾りなき喻。

日本の武士は名を惜む。

虎は死して皮を留め、人は死して名を残す。(トの部)に出づ。又義經記に土佐坊昌俊が義經に向ひて云ひける言葉に、種々は血を惜み犀角を惜み日本の武士は名を惜しむとあり。

二本棒。

封建時代に百姓町人が、武士を冷罵したる語。刀を二

本腰にさしたるを以てなり、今は痴呆の異名なり。

二枚舌をつかふ。

舌を二枚につかふ(シの部)の條に出づ。

人魚を衝く。

要らぬ世話をやくこと。

人間盛りには神祟なし。

不義の徒も一時は盛榮を極むることある故にいふ。「史記」李斯傳「斷而敢行鬼神避之。後是成功。」

人間の八苦。

生。老。病。死。愛別。怨憎會。求不得。五陰盛。を人間の八苦といふ。天人の五衰人間の八苦とつけけてもいふ。人間は身が入れば仰き菩薩は身が入れば俯き。菩薩身入つて俯き人間身入つて仰ぐ(ホの部)の條を見らるべし。

人間萬事金の世の中。

金錢あれば何事も辨じ得べしとの義。即ち人世は唯金

錢次第との意。一休和尚の狂歌に「道いそぎ心矢ばせとはやれども錢がなきゆゑわたられぬ涙」

人間萬事塞翁の馬。

塞翁が馬(サの部)の條に出づ。参照すべし。

人間物をしらぬ。

恩讎を忘れ禮義を知らぬ人を罵倒していふなり。禽獸の如きものにては猶能く恩を記し禮儀を知るものあるに、萬物の靈長ともいはるゝ人間が、却つて之れに劣ることあるをいふ。

人間纒五十年。

人の一生は、至て短きものにて、大略五十年間を以て一期とすとの義。「法苑珠林」天壽人間。如五十歲。」

人三化七。

人間三分、化物七分といふことにて、容貌の醜惡なるを形容す。

胡蘿蔔の白あへ。

色赤黒き顔に白粉を塗りて所々剥げちらかしたるをいふ。

胡蘿蔔の好きなき者は多淫。

俗説(女に云ふ)

人蔘を呑んで首を縊る。

人蔘は價の貴き良藥なり、之を服するは病を癒やすに在り。しかも其役用の爲に負債を爲し、遂には自縊れ死するやうの結果に到ることありとの意にて、物事折角費用をかけて經營したれども其効なくして却て損失を招くが如きをいふ。「古朽木」折角に物入をなされて評判の悪い時は人蔘のんで首といふ揚でござりませう。」

人面獸心。

形は人間なれども心は禽獸に等しとの義。「漢書」匈奴傳「夷狄人貪而好利。被髮左衽人面獸心。」

人を見て使へ。

能く人の器量を見て之を用ふべしとの義「論語」「子曰君子易事而難說也。說之不以其道不說也。及其使人也器之。」

人を見て法を説け。

人に隨て説く所一様なるべからずとの義。人に教へ或



は脱く所あらんとするには、先其人の氣質個性等を看破して各、それに應じたる法を爲すべしとなり。「法華經」方便品「舍利弗當知。諸佛法如是。以萬億方便隨宜而説法。」「景德傳燈錄」弘辯禪師傳「如來出世爲天人師善知識。隨根器而説法。」

女房と米の飯はあかぬ。  
女房と米の飯とは常に飽くことなしとて、之れを讚美せるなり。

女房と壺は新しいがよい。  
新に壺を迎へし當座は好い氣持のするものなりとの義。壺も新しきがよきなり。

女房と鍋釜は古いほどがよい。  
妻は連れ添ふこと久しいほど、所帯の爲によしとの義。鍋釜も之れを使用するに古きほど新らしきよりはよしとなり。

女房と晝の日は目に見えぬ所に光あり。  
平生左袒感ぜざれど、一旦無くなれば、非常に不便なるものなりといふほどの意にてなかく貴重なる者なりとの義。

女房の持だちと草鞋の穿だちとは足が軽い。  
妻を迎へし當時は他所に行きても長居せずとの義。

女房の悪いは三年の凶作。  
妻の悪しきは三年凶作積きたる程に凶なるものなりとの義。悪妻は六十年の不作(アの部)に同じ。

女房は貸すとも榎木貸すな。  
減らぬ物は貸すとも減るものは貸すなどの義。榎木は一たび使用すれば從て減るものなればかくいふなり。

女房は流し下から。  
妻を娶るには身分家柄など自家より卑きものをよしとするの義。玄關より堂々入り來らず、流し下より入り來るほどのものを妻とすべしとの意。流し下とは勝手口のことなり。

女房は掃溜から。  
前と同じ。

女房は質に入れても朝酒やめられぬ。  
朝酒は田を賣つて飲めと云ふに同じ。

女房にはれて御家繁昌。  
妻を愛するときは、和樂して其家繁昌すとの義。

女房は家の寶。  
妻は家の寶の如く、大切なるものなりとの義。

女房は家の道具。  
妻は家の必要上缺くべからざるものなりとの義。

女房百日馬二十日。  
女房は百日にして珍しからず、馬は二十日にして飽くとの義。

菲にんにく握り尻。  
臭きものを集めていふ。

睨まれて死ぬ者なし。  
睨まるゝとは人より憤懣を受くるか或は怨恨を買ふか

仁王尻を食へ。  
ないふ。怨を買ひ怨を受くとも恐るゝに足らずとの義。筋骨逞しき偉大なる體格をいふ。

ぬ

抜かぬ太刀の高名。  
未だ其手腕を揮はざるに名を得ること。己聊かも骨折らざして名を得ること。

糠に釘。  
豆腐に鏝(トの部)に同じ参照すべし。

糠ばたらみ。  
徒勞に歸すること。

糠よろこび。  
雀の糠よろこび(スの部)の條に出づ。

糠を舐つて糟に及ぼす。  
次の諺に同じ。

糠を舐つて米に及ぼす。  
糠を舐り盡せば米に及んで米を食ふといふことにて漸次侵蝕する義。「史記」吳王濞傳「舐糠及米」



抜がけの功名

軍中に他人を出し抜き獨敵軍に向ひて功を博すること  
をいふ。之より轉じてすべて人を出し抜き己一人先に  
功名利益を占むることをいふ。

主ある花を折るな

人の妻と定まりし女に情を通ずるなかれとの義。主あ  
る花とは人の妻若しくは人の妻と定まりし女をさす。

盗賊の取残しはあれど、火の取り残しはな

盗難に遭ひても、大部分の品物は残るが。火災に遭ひ  
ては残る所なく悉皆灰燼となるとの義。

盗人猛々し

己の悪事を擱きて、却て人をとがめだてするをいふ。

盗人が盗人に盗まる

非道を以て人の物を掠奪するほどの者が、却て他の非  
道なる者の爲に掠奪せらるゝをいふ。「梵網經」「四分  
律云時有比丘他盜取物、而奪被盜者物。」

盗人捕へて細

時機後れて其間に合はざる喻。

盗人に追銭

物を損しての上に又物を費すをいふ。

盗人に鎗

己に害を加ふる者に便益を與ふること、即ち自ら危害  
を招くこと。「戦國策」「范雎說秦王」曰。此所謂、藉  
寇兵。而廣盜食者也。

盗人に金の番

掠奪せらるゝ虞あるものに、物の保管を托するが如き  
をいふ。「釋津文集」察勢論「兼金百鎰、借盜而監守。  
雖未亡金、其隣人固以疑矣。」

盗人にも三分の理あり

何如なる事を爲すにも相應の理由ありとの義。盜を爲  
すにも行善の爲とか或は孝養の爲とか種々の事情を述  
べて其罪を減せられんとする理由となすとなり。

盗人の上まへを取る

非常にこすい者をいふ。盜人が盜人に盜まるゝの條及

上米を取る(ワ)の部)の條を見るべし。

盗人の暇はあれども、守り手の暇が無い

萬事に心を配り居るとも、人に窺はるゝ者は早晚寸隙  
の機に乗せらるゝことを免れず、即ち之を守るに難き  
ものなりとの義。

盗人の晝寝も的がある

凡そ何事によらず其之を爲すは別に心に期する所あり  
ての爲なりとの義。盜賊の晝間寝て居るは夜に入りて  
悪事を働かむが爲なり。

盗人の番には盗人を使へ

盗人は盜人の秘訣を知るものなれば、盜を防ぐは盜人  
の經驗あるのに過ぐるなしと云ふ義。

盗人を捕へて見れば我子なり

物を盜まれしとき他人の所業ならんとて捕へ見れば意  
外にも我子の所爲なりとの義。

盗する子は憎からず緇かくる人が恨めし

人は子の愛に溺れ易きものにて我子が悪事の爲に處分  
せらるゝに臨みて、其子の悪をにくまで、却て處分  
する人を恨むとの義。

盗まるゝ者に油断はあれど、盗む者に油断が無い

盜まるゝ者には常に不注意油断のあるは免るべからず  
と雖ども、盜む者はなかく用意周到なりとの義。

布は緯から、男は女から

緯び易きをいふ。布は緯糸先づ弱り、男子は色情の爲  
先づ心を亂す。

塗物へ鏡を映すと幼貌が失せぬ

塗物の器を大切に取扱はせん爲めにかくいふ、塗物へ  
鏡を映すとは之れを鹿末に扱ひて玩弄するやうの舉動  
なり(是れ即ち幼兒の所爲なり)

濡衣をかぶる

疑を受くること。

塗物を鏡に見ると徳利子を生む

塗物へ鏡を映すと幼貌が失せぬに同じ。

濡衣を干す

冤を雪きたるをいふ。



勞少くして獲ることの大なる喩。苦もなく取り得らるるをいふ。濡手で粟のつかみ取。濡手で粟をつかむやうともいふ。

濡れぬ先こそ露をも厭へ。

未だ其身に汚點あらざる中は能く戒慎自省を加へたれども、一旦過ちたる上は、既に其非を遂げて憚らざるに至るをいふ。

濡れぬ先の傘

ころげぬ先の杖に同じ。「詩經」幽風鴉鷄篇「迨天之未陰雨。徹彼桑土。綯之經履。」

濡鼠の如し。

全身の衣袂悉く濡潤せる形容。

ね

寢起に仕る。

容易に爲し得との義なり。「平常盤」「雜兵の首四つ五つは寢起になりとも仕らんと申さば母も悦びて」

願うてもない事。

望外の幸といふ事。

願つたり叶つたり。

志願したる通りかなひたること。

直切りての高買。

あまり出し惜みをすれば却つて損をするとの義。品物を買ふに直切りて安く買はむとすれば、却つて粗悪なる品物を賣り付けられて、結局高いものを買ふことになるなり。

猫が顔を洗ふと雨が降る。

俗説

猫が干鮭食はへたやう。

顔のしきみたる形容。

猫が胡桃をまはすやうに。

あちらへねらり、こちらへねらりとの義。

猫が肥ゆれば鯉節が減る。(或は瘦る)

一方が利すれば他方が損をする喩。猫は鯉節を好む、之を食すれば肥ゆ、されど鯉節はへるなり。

猫が鼠を捕るやうなもの。

容易なる事。鷹が雀を捕るやうなものだと同義。「左傳」文公十八「見無禮於其君者誅之、如鷹鷂之逐鳥雀也。」

猫舌。

熱いものを食する能はざる人をいふ。猫は熱いものを厭ふ。

猫辭退。

猫の魚辭退に同じ。就きて見るべし。

猫と庄屋に取らぬが無い。

猫に魚を取らざるもの無きが如く、往時徳川時代の庄屋に賄賂を取らざりしもの殆どなかりし故に此諺あり。

猫撫聲。

心中に陰險を含むとも物言ふにやさしくて媚ぶるが如きないふ。

猫に逢つた鼠のやう。

たかに逢つた雀(タの部)参照。

猫に石佛

何の感覺なきをいふ。猫が石佛を見ても貴いとも何とも感ずることなし。

猫に鯉節。

奪ひ取らるゝ虞ありとの義。犬の前のかし米に同じ。

猫に傘。

猫に紙袋を冠せたりやう。

却行する喩。猫に紙袋を冠するときは、あとをさりするものなり。

猫に小判。

無學無識の徒の書物或は其他のものに於ける、見るといへども、用を爲さずして効無きことを、猫に小判を見せても其用を知らざるに喩ふ。

猫に天木蓼のやう。

嗜好する所、欲する所のものを供する喩。猫はまたたびを好むものなり。

猫の魚辭退

其本心之を欲するに拘らず、外面之を辭退する喩。



猫の子を貰つたやう。

支度なき婿嫁を迎へしをいふ。

猫の尻尾のやう。

無益なる喩。猫の尾ともいふ。

猫の尻へさい槌のやう。

水風呂桶で牛蒡を洗ふといふと反對の意なり。

猫の鼠取らず。

爲すべきことを爲さざるをいふ。己れが能とする所の

本分を盡さざるをいふ。

猫の手もかりたい。

非常に忙しきときをいふ。

猫の鼻と、女の唇は大暑三日の外は冷たい。

猫の鼻と女の唇とは常に冷なり(温氣なし)との義。

猫の鼻と傾城の心は寒い。

猫の鼻は常に寒く傾城の心は常に情冷なりとの義。

猫の額にあるものを鼠がねらふ。

大膽不敵にして身の分を顧みざるをいふ。到底力足ら

ずして功なしとの義。「源平盛衰記」頼朝義兵をむこ

し、安達九郎盛長を使として勢を催さる。盛長須藤

口三郎同四郎が方に相ふれけるに、三郎弟に向ひて佐

殿の當時の寸法を以て平家の世をとらんとしたまふこ

と、富士の峰とたけくらべ、猫の額にあるものをねら

みのうがふたとへにやと嘲りける。」

猫の額の飯粒ねらふ鼠あり。

猫の額のものを鼠がねらふに同じ。

猫の晝寝に油断するな。

魚杯をとらるゝを以て警戒を怠るなどの義。

猫の留守は鼠の代。

猫は鼠を捕へて食ふものなれば猫の不在の時は鼠の世

の中なりとの義。勢力の大なるものが居らざるときは

小勢力の者の自由に爲し得らるゝをいふ。

猫の額のやう。

狭いといふ形容。猫の額は狭きものなれば狭少なる喩

とするなり。

猫は三年の恩を三日に忘る。

俗説。

猫ばいにする。

隠すといふ謎なり。物事の跡を隠して胡覚化するをい

ふ。

猫は髭があるので鬮が見ゆる。

俗説。

猫もしやくしも。

おしなべて誰も彼もといふ義。一休和尚の狂歌に「生

れては死ぬるものなりおしなべて釋迦も達磨も猫もし

やくしも。」

猫も茶をのむ。

生意氣なるをいふ。猫とは取るにも足らぬ幼童と、卑

しきものをつないふ。

猫よりは優し。

小兒の如き役にたゝぬものにも、時に多少の用を辨

ずることあるをいふ。

猫を逐ふより魚を除けよ。

其末の事に類はんよりは、根本の計を爲すべしとの義。

魚を貯へ置けば猫は追うても、猫覗ひ来るが魚を取

り除けば猫は遂に来らず。

猫をかぶる。

表面婉柔を装ふこと假面をかぶると同義。(カの部)

猫を殺すと七代たゝる。

俗説。

鼠が鬮を引くやう。

事を少しづつなして而も功なき事未詳。

鼠が猫の物をねらふ。

猫の額の物を鼠がねらふの條に出づ。

鼠が疊の芥をほぢくると引越がある。

鼠が疊のこみをほぢくるとは轉宅する前兆なりとの俗

説。又鼠夜に疊の間の埃をほりあげれば吉慶あるしる

しなりともいふ。

鼠取る猫爪をかくす。

能ある者の邊に己の長を表はさず、却て隠蔽するをい

ふ。鼠を捕ふる猫は其爪を藏して常に之れを露はさぬ

ものなり。支那の古諺に「將飛者翼伏、將噬者爪縮。」



「釋林類聚」看經門曰。「寶錄云。吠人師子。不露爪牙。」  
鼠取る猫はニヤンとも言はぬ。

能ある者其長を語らざる喻。鳴く猫は鼠をとらず鼠を捕ふる猫は啼かざるものなり。猫の啼き聲はニヤンなり何ともニヤンとも通はせたる洒落なり。  
鼠に引かれさう。

獨居して淋しきこと。  
鼠は鼠を聲に取る。

自分の小なるもの各其相似寄りたる配偶を爲すことな  
鼠も小六十。

短矮の人も年齒ほどの事あるをいふ。鼠は小動物なり故に短矮なるもの一喻をなす。  
寝た間が極樂。

起きて居る間は種々身心を勞することあれども、寝た間は身心を休養するものなり故にいふ。「新著聞集」元祿頃都の罪人の歌として「ぬるまのみ人にかはらぬ身なれども浮世に返す曉の鐘」ぬるまは寝る間なり。

妬は其身の仇なさけ。

嫉妬は其身の仇となるとの義。  
熱しても悪木の影に憩はず。

渴すといふ盗泉の水を飲まず(カ)の條に出づ參照すべし。

寝つ兒垂れつこ。

嬰兒はよく寝よく尿するものなり故にいふ。  
捻ぢ上戸。

飲酒したる後にしつこく管巻くものないふ。又酒を飲み盡すことを呑みて色々の辯舌を吐きて長坐し久しく宴することを悦ぶ者ないふ。

寝て吐く唾。

仰向けの唾(ア)の部に同じ。  
寝てもさめても忘れられぬ。

片時の間も忘るゝ能はざることを。  
寝て居て轉んだ例なし。

何事も爲さずして失敗することなしとの喻。  
寝て居て牡丹餅食へぬ。

起て働かざれば幸福を得る能はずとの義。ゲンテ曰く「布團の上に坐し、衣具の下に臥して、名譽の路に達しがたし」と趣意相同じ。

寝て居て餅食へば目へ粉が這入る。

何事にも多少の不十分は忍ばざるべからず。世の中は到底十分といふことを望み難しとの義。

熱病に罹つたら薬人形を四辻に棄てよ。

禁厭に關する俗説。  
鼠六匹。

夢中(むちう)といふ謎なり。鼠はちうと鳴く故に六匹うは六匹の鼠といふことなり。

鼠は大黒天の召使。

俗説。  
鼠に翼が生えて蝙蝠になる。

卑賤の者の地位を高めたる喻。  
寝所へ杖。

夕食を早く食ひて、其脊に空腹なることをいふ。身に力なくして寝所に入るに杖の力をからざるべからずと

洒落れていふなり。  
寝鳥の翼。

寝鳥を取るは重罪。

其不意を襲ふの非なることをいふ。  
寝鳥をさすやう。

力を勞せずして容易く得らるゝ喻。又無情殘忍なることをいふ。「吉野郡女捕」これより義貞が首捨切らんは寝鳥をさすよりいとやすし。

子に臥し寅に起く。

夜は遅く寝れ朝は早く起くるないふ。勤勞する義。  
子の日爪さらす。

俗説。

粘りても餅屋の婚は功者。

熟練せることは巧に器用に爲すとの義。  
根掘葉掘問ふ。

事を緻密に問ひ質すこと。  
寝耳に水。



事の不意火急なること。夜間寢床に在りて洪水俄に至るを聞くが如きは實に不意の事なり故に喩ふ。寢耳に小判。

不意に思ひがけなき嬉しきことある喩。寢耳に水の條参照すべし。念には念を入れよ。

注意したる上にも猶注意を加へて、毫も手落抜目のなきやうに細密鄭重なる上にも猶細密鄭重なるべしとの義。

念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊。

日蓮宗の四個の格言なり。念佛を唱ふれば無間地獄へ落ち、禪宗の信徒は天魔となり、眞言を信すれば國を亡ぼし、律宗を信すれば國賊なりとの意。

念力岩をも透す。一心をこめて事に臨めば何事にも貫徹すといふ義。「韓詩外傳」楚熊渠子夜行、見寢石、以爲伏虎射之。没金飲羽。視之石也。因復射石。矢摧無迹。「漢書」李廣守北平。出獵。見草中石。以爲虎射之。中沒鏃。視之石也。明日復射之。石不能入矣。是皆至

誠心の一念力を以て岩を透せしなり劉向曰「誠之至也。金石爲之開。況人乎。」程子曰「陽氣發所金石亦透。精神一到何事不成」

眠は賢人王を見て来る。

寢たる間の樂は天子の御果報を身に得たる樂なる者との義。

眠るも奉公。

寢るも奉公に出づ。

寢る兒は寢樂。

寢るものは寢るだけの樂を受くとの義。

寢る兒は肥ゆる。

俗説。

寢るほど樂は無。

寢るほど樂しきものはなしとの義。寢るほど樂は無いものを起きて働く馬鹿がある」ともいふ。

寢る間が極樂。

寢た間が極樂に同じ。

寢るも奉公。

能める鷹は爪を藏す。

義は能める犬は爪かくすに同じ。「六韜」鷲鳥將擊車飛飲翼。猛獸將搏。弭耳俯伏。聖人將動。必有怒色」

能化づく。

賤しきもの、隠せぬ態にて馳せ回るをいふ。能化とは佛家の師の坊をいひ、弟子を所化といふなり。弟子坊主が師の坊を氣取るといふほどの意。

能書筆を擇ばず。

技能の巧妙なる者は其使用する器具を擇ばずして能く其技術を見はすとの義。書を能くする者筆を擇ばずして巧に書く故にいふ。「後山談叢」善書不擇紙筆。妙在二心手。」

能なき犬の高吠。

言論美にして實力技術の無き者を嘲りていふ。「莊子」狗不以善吠爲善。人不以善言爲賢。能なし犬の高吠ともいふ。

農民の息が天に上る。

奉公人は主家の仕事を爲す中にも能く居眠りをするものなれば、眠るも奉公といひ、又朝晏起の口實に寢るも奉公といふ。根を絶ち葉を枯らす。

其根本より末に至るまで、悉く之れを滅絶するをいふ。「國語」晋語「去其枝葉、絶其根本。」

根を深くし藩を固くす。

物事其根本を深く培養することはいふ。即ち基礎を固くする喩なり。蓋し植物の根は土中に在りて營養分を吸収する本なれば、之れを深く土中に下せば、枝葉は自ら繁茂するものなり。又其藩(花の枝に付く所即ち夢のこと)を固くすれば、花實は自ら榮ゆとなり。

「老子」重積、德則無不克。無不克則莫知其極。莫知其極。可。以有國。有國之母。可。以長久。是謂深根固柢。長生久視之道。

「山谷詩集」瓊芝軒詩「深根固藩活人命」

能める犬は爪かくす。智能の士深く融して街はざる喩。鼠取る猫爪かくす(ネの部)の條及次の條参照。



「蘇草」人事下にたがへば、天壤上にあらばる」と、古語にいふが如し萬葉集の歌に大野山きり立わたるわがなげく、おきその風にきり立わたる。是民のいき天に上るなり、蚤の息が天に上ると云は誤也。農民の息が天に上るとは、たとへば幾舞の御代には一夫も其所を得ざる事を憂給ふ故、萬民感化して父母のごとく仰ぎ奉るにより、おのづから祥瑞多く、雨塊をやぶらず、風枝をならさぬ太平の世なりし也。桀紂が時には下なしへたげ、なやまず故、農民憂ひ苦んで共に亡ん事を願ふ其氣天に通じて天下に凶災多く、終には滅亡に及べり。代々かやうの喩少からず。是農民の息天に上るにあらずや、史記饑食其曰。王者以民人爲天。是も俗諺の意に通ぜり」

暖簾と脛おし。  
力を用ふるほどのかひ無き喩。

暖簾能く品物をはかす。  
品物をよく賣れるは、其の家名によりてなりとの義。  
のがるゝにもものなし。  
逃るゝに途なき事。除引ならぬをいふ。

軒の熟柿が點頭くばかりウンダ者が潰れたとも。  
返答せぬものを罵りていふ。

のけて通せ酒の酔。  
酔狂者にかまわぬがよしとなり。「尙書」「酒子酒勿

残り物に福がある。  
あまり物に福ある(アの部)参照

熨斗をつける。  
進上すること。進上物には必ず熨斗をつくるを以て云ふ。

覗き八文。  
覗の輪は八文が昔の相場。

取手につがぬ手なし。  
圍碁の語。

望めども望まれず。  
希望多しとて成就せざるをいふ。「榮花物語」望めど望まれず、逃れど逃れられず云々

後の親が親何の胤にても。  
「鹿鳴集」咽過ぎて暑さ忘る、清水かな「日蓮録外書」

繼父繼母を眞の親と思へとの義。

延引させぬ釘錠。  
動きのつかぬやうにせらるゝ事。

咽喉が乾く。  
此諺二義あり一は他を羨むことないふ。「藝文類聚」晉の束皙が餅賦に「擊器者既唇、立侍者乾咽。」とありこれ餅のうまさうなる爲に、唇を舐り、咽を乾くといへる意に出づ。一は身分不相應なる美服を着たる者を嘲りていふ。これは他に行きて、同席の人よりも目につくを以て、茶の給仕する者も他の人よりも多く運ぶとして、咽が乾く故茶を飲みたさに美服するかと嘲りたるより出づといふ。「還魂紙料」身に應ぜざる美服を着たる者を嘲りて、喉が渴くであらうといふ諺、今も老人は常にいふことなれども、其原は服の事にはあらず。醒睡笑に云、小性給仕をするに金作の脇差さしたる人へばかり茶をしげく運び、ほかのものへは目をかけず、末座の人々彼が心を推し、我脇差を二三寸を抜き、そなた若衆、この廻にもチト茶を呑ませあれといふた云々。案ずるに此諺當時よりありしものにて

遂に美服のことにつりしなるべし。  
咽喉が鳴る。

野となれ山となれ。  
飲食を欲すること切なるをいふ。

如何になり行くも聞せずとの義。  
咽喉下過ぐれば熱さ忘るゝ。

「鹿鳴集」咽過ぎて暑さ忘る、清水かな「日蓮録外書」

「喉過ぐれば暑さを忘れ、病癒ゆれば醫師忘る」

咽喉をしめて息をする。  
始は一時苦しみて、後に易きをいふ。

野に捨てられた死人も同様。  
世に委棄せられて、顧みられざること。

野に臥し山に寝ぬ。  
流離問關備に艱難辛苦を嘗むること。家に居て安臥する能はざる義。

野に臥し山を家とす。  
野に臥し山に寝ぬに同じ。



野にも山にも子をば産め。

子こを多く産むべしとの義。

野の宮高砂で居る。  
枕を高くして安臥するをいふ。

飲まねば薬も功能無し。

之を用ゐざれば、其功を見ずとの義。薬は病に利ありと雖ども服用せざれば其功能なし。

飲食には他人集り愛喜には親族聚る。

親は泣より他人は食より(シ)の部の條に出づ。

鑿といは槌。

氣轉の早きこと。鑿は槌を待つて其用を爲すものなり。故に鑿を持ち來れといは、鑿のみならず、槌をも持來らするは氣轉の利きたる所爲なり。

鑿取眼のみにとるまなこ

物色嚴重なること。蚤を取る時には眼光を鋭くするもの故のがくいふなり。又目を丸くするをいふ。

鑿先三寸の運。  
大工を職業とする者の運命は鑿の上のに在りとの義。

蚤にも食はさぬ。

大切の身體。

蚤の頭を斧で割るやうな氣。

器字狭少にして小事に齷齪たる者を嘲りていふ。

蚤の息が天に上る。

農民の息が天に上るの條を見るべし。

蚤の罌丸のやう。

至つて小さき物の喩。蚤は小さき蟲なり其蟲の罌丸といへば實に至小なり。

蚤の糞を斧で割るやうな氣。

蚤の頭を斧で割るやうの條に出づ。

蚤の四月蚊の五月、六月蟬の泣別れ。あと

來る月は盆の月、踊ると舞はうと其方任せ

好いた男と踊らんせ。

蚤は四月に多く蚊は五月に多く蟬は六月に多く、七月

は盆踊ある月なりとなり。

蚤の五月蚊の六月。

蚤は五月に多く蚊は六月に多しとなり。

蚤の夫婦のやう。

小さき男に大なる女の配合せる夫婦。

蚤の目に蚊の塵。

至小至細なる喩。蚤も蚊も小さき蟲なり。其小蟲の目塵といへば更に至小至細なり。

蚤の夜詰蟬の朝起。

夏時夜に入れば、蚤に噛まれ、夜明ければ蟬たかりてうるさしとなり。

飲みもさらず噛みもさらず。

「和漢故事要言」愚鈍暗昧の人は、常にいひ聞かず事をも、一往や二往にては、疾と合點すること能はず。心に呑込なきが故に、兎角の應諾をも得せぬやうの事をいふ。

蚤を火に投じバチリと音すれば天氣、音せざれば雨。

俗説

飲んだり吐きたしたりする。

一旦承諾したることを断り、断りしことを復承諾する

が如く、其言ふ所甚確かならざるをいふ。

呑んで吐き出したやう。

色の白くぬんめりした頭をいふ。

飲むに減らず吸ふに減る。

目に見えたる費用よりは目に見えぬ費用の描むをいふ。

野らの節句働。

能なしの節句働ともいふ。

呪咀ふことも口からのらふ。

吉凶の判断など人が吉といへば自然吉となり、凶といへば自然凶となるが如き類、皆人の口にて定めらるゝをいふ。「和漢故事要言」吳志に云、丁固ある夜の夢に、

香腹の上に松生たりとみけるを、或人占ひて、云、松の字は、十八公と書く、君十八年を経て公の位に封ぜられんといへり。果して公となりけるとなり。西陽雜俎に云、孫董と云者夢を占ふに善し、或人戸前に松生じたりと見て、是を問ふ、孫董が云、松は人の塚の間に植うる者也、汝死すべしといひしかば、いひしに違はず、やがて死せしとあり。是松をゆめあはせする事は、



一にて中る所死生を異にしたり、皆人の口より極めたるの證なり。」  
糊賣婆の糊こぼしたやう。

アツく獨言する形容。糊賣婆が糊をこぼしたときに  
はアツくと獨言するなり。  
乗りかゝつた船。

事を創めしからは勢中止しがたしとの義。「論語」「欲  
罷不能既竭吾才」の意なり。  
糊氣がはなれた。

空腹になりしこと。  
絹粥序に帽子洗ふ。

「敵に馬練」のり序に帽子洗ふ聖人の門流とあり。  
のるかそるか。

伸るか反るかいつれにかなるべしといふほどの意にて  
爲し得らるゝか破るゝか二つに一つの事端を執行する  
際にいふ。土佐山内家の一士人偶々茶坊主にならんと  
す坊主とならば正月十一日の馬の取初に出づること  
能はず取るか刺るかにつきて思考を凝せり此より出で  
たる詞なりといふ説もあり。

仰るか反るか吠の針。

成効するか失敗するかにかつて見んと心。

は

飛蟻出る時は風雨の徴

敗軍の將は兵を談せず。

事に失敗したる後は、其事に關しては沈黙を守り、復  
た彼は自家の意見を主張せずとなり。

「史記」淮陰侯傳「廣武君辭謝曰、臣聞敗軍之將、不可  
以言勇、亡國之丈夫、不可以圖存、」

吐いた唾飲めぬ。

一旦口に出したることは取り返しならぬとの義。  
一ひ唾すれば之を飲むこと能はざるが如し。

盃中の蛇影。

疑心暗鬼を生ず(キの部)と義同じ。晋の樂廣河南尹に  
遷され客を招く、その人一ひ來りし後、再び來らず、

誇大の言をなすこと。口頭ばかりにて實際にあり得べ  
からざる喩。

唾壺と金持はたまるほど穢い。

世の守錢奴の、金たまるに従ひ、益慳吝になるを譏り  
ていふ。

唾壺へのせた龜の子のやう。

爲す所ある能はざる喩。唾壺へ龜の子をのすとときは唯  
手足をもがくばかりにて奈何ともする能はざるなり。

蠅を打つより易し。

いと容易きこと。

箒が折れると縁喜がわるい。

俗説。  
箒で掃くほど。

箒で打たれると三年生きない。

俗説。  
箒を倒に立てると客が歸る。

俗説。

廣怪みて故を問ふ、答へて曰く、前に酒を賜ふとき、  
盃中に蛇影を見爲に疾を得たりと。廣の思へらく、こ  
れ罈前にありし弓の影の映せしのみと。其客を延き、  
弓を前に置き、酒を飲ましめ、問ひて曰く、見る所あ  
るか。客曰、始の如しと。即ち示すに弓を以てす、  
客の疾即ち癒ゆ。此故事より出づ。

蠅取蜘蛛も一生、袋蜘蛛も一生。

はも、一期えびも一期に同じ。

唯に科なし。

人の言に抗せずして、之に従順なれば、自然禍を受く  
ることなしとの義。

はいなら飛ばんせ。

唯と返事したる者を嘲りて云ふ。

海螺の尻のやう。

曲つて居るとなり。ばいの尻は曲れるもの故にいふ。

灰の中をゐるくやう。

ほこりの多き道路を歩するをいふ。

唾壺から蛇の出るやうなことをいふ。



箒を跨ぐれば難産する。

俗説。疱瘡は容貌定め麻疹は命定。

天然痘にかゝれば、痘痕を生じて、其容貌をみにくくらしめ、麻疹にかゝれば、命を失ふに至る、故にいふ。坊さん頭になつくわ瓜。

乗るか乗らぬか、やつて見よとの義。傍若無人。

人に氣を置かざる體。「史記」刺客傳、高漸離擊筑。荆軻和尙而歌於市中。相樂也。已而相泣傍若無人者也。

坊主頭を這ふ風。

身のかくればなき嘘。坊主頭は毛が短くて風の隠れ所なきなり。

坊主かんくかねたゝみ。

僧侶のなす業をいふ。たゞ矢鏢に鐘をたゞくが能にて他に取る所なしと罵倒したるなり。

坊主だませば七代たゝる。

俗説。坊主と炭團の起つたのは手が付けられぬ。

往時僧侶は常刑を以て罰せられず、脱衣追放などを以て重き仕置としたる時の謔なり。僧の怒りたると、炭團に火の起りたると、共に始末にをへぬものなりとの義なり。

坊主憎けりや袈裟まで憎し。

其人を憎惡するによりて其人の物まで憎しとなり。「六韜」武王登夏臺以臨兆民。周公旦曰臣聞之。愛其人及其屋上烏。憎其人者憎其除胥。」

坊主の公事なくみ。

不似合の事をなす嘘。坊主は忍辱を旨とすべきに、さはなくして訴訟を事とし、他と争論をなすが如きは、不似合なる事といふべし。

坊主の櫛貯。

無用の事をなす嘘。(坊主が櫛を貯ふるは無用の物を貯ふるなり)

坊主の不信心。

醫者の不養生と同じ。

坊主鉢巻。

物事の締りなきことをいふ謎。坊主頭に鉢巻は一向締りがなし故にいふ。

坊主鉢巻耳で持つ。

聞いて知る者を云ふ謎。(耳に依頼する義)坊主頭のもの、鉢巻は耳にて支へらるゝなり。

坊主持。

同行者が、途中に各自の荷物を一纏めにして、代る代る持つこととし、坊主に出逢ふ毎に、交代することはいふ。これは僧は慈悲を旨とする者なれば、僧に逢へば苦患を免るといふ趣意に出でしなるべし。

坊主讀。

讀書するに其意義を玩味することなく、徒に誦讀することを坊主の機械的に誦經するに喩へていふ。

亡八。

娼妓買ないふ「幼學須知」入花柳之地。其心已忘孝悌忠信禮義廉耻八字。

炮烙千につち一つ。

是謔に二義あり、一は炮烙千に土一つといひて千編一律の義にいふ。炮烙は土にて作るものなれば、數幾多あれども、皆一の土より成るといふを以て喩ふ。一は炮烙千に土一つといひて、折角氣根を盡して種々人の爲に、世話をしながら、一言の合はざるを一寸しする行違より、却て不和と成りはつるやうのことあるないふ。炮烙數多あれども、種一の爲に雜作もなく打ち毀さるゝに喩ふ。「吾吟我集」「これぞこの炮烙千につち一つ月におさるゝ星の光は」

馬鹿と相場には勝てぬ。

阿房にてがふ性根なしと同意。

馬鹿と鉄は使ひやう。

これを使役する人の方寸にありとの意。

馬鹿な親、子に叱られて吹聴し。

馬鹿な親は子に叱られて其子の優れる事を人に言ひふらすと云ふ事なり。

馬鹿につける薬がない。

癡漢を醫する法なしとの義「東坡詩集」「人瘦尙可肥、俗士不可醫。」







年玉とかくとき玉は賜の假字なるに、やがて音に讀みてネンギヨクタマハリテヨロコボシといふ。畢竟はくらんの薬ははくらん病が買ふといふ諺に似たり。

化物の正體見たり枯尾花。  
化物なりと臆病者の言ふものも其實は枯尾花なりとの義。物の真相を看破したるをいふ。

箱入娘に蟲がつく。

箱入娘の不品行をしだしたるをいふ。

箱入娘。

深窓の下に養はるゝ處女。

箱根から東に化物は無い。

往時江戸の繁盛なる頃いひ初めたる諺にして、函嶺以東は、打ち開けたれば、妖怪なしとの義。

箱根八里は馬でも越す。

箱根八里は天下の險なりと稱せられたり。往時こゝを越ゆるに、馬に乗りたるより、困難なる事も、すれば出来るとの義に用ひたるなり。里諺に「箱根八里は馬でも越す、越すに越されぬ大井川」とあり。

はこを背負ふ。

困難なる事を負はせられたる事。鳥のはこにかゝりたるをいふ。  
箱を開くと夢見るは我が思を人に悟らるゝしるし。

「帝國文學」四卷四「萬葉四」晋念平、人爾令知哉玉匣開阿氣津跡夢西所見、初二の句は晋が君を思ふ心を君が人に知らしめ給へばにやなりと先聖の說なり」  
剪刀と奉公人は使ひやう。

剪刀は使ひやうによりて能く截れ、奉公人は使ひやうによりて、能く動くとなり。

箸が折れると縁喜が悪い。

俗説。

箸下に置くと内を出づ。

俗説。

箸ではさみ合ふと中悪しくなる。

俗説。

はしではさみあふものでなし。

骨上げの時ばはしてはさみあふなり故にいふ。  
箸で飯茶碗をたゝくと餓鬼が来る。

俗説。

箸と資産は太いのが善い。

箸の折るゝを思むより言へるなり。

馬耳東風。

馬の耳に風(ウの部)の條に出づ。「東坡集」世間馬耳射東風。注李自詩云世人聞此皆掉頭。有如東風射馬耳。

箸取つて哺めるやう。

世話をす事。

橋無き小川は渡られず。

方便なくしては目的を達する能はずとの義。

箸にあたり棒にあたる。

慣患する所あるとき即ち氣に入らぬことあるときになにかにつけてあたり散らすことをいふ。

箸にも棒にもかゝらぬ。

取り所なきものをいふ。如何とも爲様なきものをいふ。

箸の揚げ卸しにもさふ。

常に口にする事。

橋の下の菖蒲。

何の用にもたゝぬをいふ。「野植」橋の下の菖蒲はかれどもかられず、折れども折られず、伊東殿土肥殿土肥がむすめ梶原源八介殿のけ太郎殿、是古き童謡なり羅山子はいはく是は蒲の御曹子の御連枝ながら、よわきにも、つよきにも、何の用に立たぬを、菖蒲によせてしるせるなり」橋の下の菖蒲は誰が植ゑた菖蒲云々と狂言に數多あり。

箸の倒れたにも驚く。

氣の小く怯懦なるをいふ。

箸の倒れたのも可笑しい。

少しの事をも可笑がるをいふ。

始われれば終あり。

「性類集」有始有終是世之常理。生者必滅即人之定則。

始から長老は無い。

人は修養の後漸く上達するものにして始より人に勝れ



たるものはあらずとなり。小僧より漸次に上達して長老となるなり。

始から長老にはなれぬ。

段階を経ずして一足飛に上達すること能はずとなり。

始輝き奈良刀

虚勢をはりしこと始は立派に見えて後には其實價なきことを表はすに至る喩。初めは學者振りに人もしか信じたるが後に至りて其無學なるを知り之を信ぜざる類をいふ「和漢故事要言」平家物語一云平貞盛武威あるを信みて公卿達相議して聞討にせんと構ゆる由を聞きて其夜は木太刀を帯して昇殿せられける後日に露見の上木太刀と云事を知ることあり此事より言ひ初めて終に世話となれり

始チヨロ〜中ガン〜(パツパともいふ) 赤子なくとも蓋とるな。 飯を炊く時の心得を擧げたるなり。 始に持つた女房は一番よ。 もと木にまさるうら木なしと同じ。

始の勝は莖勝。

勝負を争ふ時最初に勝つは眞の勝にあらずとの義。

始のさゝやゝ後のどよめき。

始靜肅にして後喧嘩なるに至るをいふ。始め秘密に付して耳語したることか後に大騒動を醸すに至る類をいふ。

始の情は今の仇。

初の好意今は却つて身の仇なりといふ。

始は處女の如く後には脱兎の如し。

「孫子」九地篇、始如處女、敵人開戸、後如脱兎、敵不

走り馬が糞をたれるやう。

調子外れのことをいふ喩。三枝と歌と調子の合はぬな

走る馬にも鞭。

敏才伶俐にして勉強する者にも猶警戒を加へて怠らしめざる喩。「尉繚子」武議篇「良馬有鞭。遠道可致。賢士有合。夫道可明。」脱苑「脱苑篇」騏驎日馳千里。鞭

箠不去其背。 箠を手渡にすると中惡くなる。

俗説。 箸折鏡の兄弟。

唯二人ある兄弟にて能く顔かたちの似たるをいふ。往昔の箸の製作は今の如く精しからず木にもあれ萩にもあれ折りて用ぬしものなりされど長短なく對に折り二本に限るもの故に唯兄弟二人なるを箸折といふ其面の鏡にうつりしがよく似たるを箸折鏡の兄弟といふ「神酒徳利のやうといふ。

箸折るれば親に離れ、櫛の齒かくれば子に別る。

俗説。

逆の糸にて大石を釣る。

成効の見込なきことをいふ。又危険なりといふほどの意を含む。

逆の實の飛び出たやう。

元氣の盛なることを形容す蓮の實の飛び出すは頗る深きものなれば喩とす。

逆は濁に染まず。

はし—はす—はた—はだか

廉潔端正にして醜汚に穢されざる喩。泥中の君子(テの部)参照。

蓮葉もの。

女子のお噂なるを卑めて言ふ語にして、蓮葉女より出でたるなり。昔離波の浦などには蓮葉女といふ者を拵へ置き、客の爲にしたり、即遊女の類なり。其角が句兄弟に「どろほうの中を出るや蓮葉もの」支札其角云ふはすはもの蓮葉笠をかつぎたる姿の見苦く目立たるより云へるか古来より蓮の字を書けり。

旗色を見る。

軍に勝敗の模様を窺ひ、勝色ある方に、味方せんとするより出でし語にして、先物事の形勢を觀望すること

裸で道中は出来ぬ。

裸とは無一物を指す、無一物にては世を經ること能はずとの義。

裸體で物を遺す例なし。

本来無一物なれば遺失することなしとの義。

裸百貫男一匹。



男子は無一物なりとも、百貫の價はあり(即ち貴し)との義。  
島水練。

机の上の議論のみにて實地に當らざる喻。たいかの上の水練に同じ。

島に蛤を求むるやう。

木に縁りて魚を求むに同じ。

はたごやの女房に狐馮いたやう。

忙しく狂奔する形容。

徒跣で道中は出来ぬ。

徒跣で道中は成るものかといふ。裸で道中は出来ぬの條参照すべし。

徒跣で逃げ出す。

三舎を避けると同じ。遠く相及ばずといふ喻。

廿坊主は牛のふぐり。

落ちさうで落ちぬ物は、廿坊主に牛のふぐり、落ちさうもなうて落ちるは、四十坊主に鹿の角(オの部)に出づ。

肌はだの物ものの善惡よしあしで。

肌につける物の善惡にて其人の價値も善くなり惡しくなるとの意ならんか、詳ならず。

旗本八萬騎。

徳川幕府時代に於ける大將軍の麾下兵をいふ。(八萬騎は其數の大約なり)

肌を合はす。

輿こしに志を合せて事を計ること。

肌を脱いでかゝる。

奮勉して事に取りかゝるをいふ。

八月社日に雨降れば來年らいねんに至りて五穀ごこくゆたかに熟る。

俗説。八月くわつに甲寅かいうん日び巳み日びあらば其日そのひに必ず風吹く。

八月くわつのあばれ蚊か。

俗説。八月くわつに蚊最かもはげし。

八月くわつの風かぜ。

八月に風吹けば蓂蓂ひひあるといふことにて傍暴ぼうぼうるといふ謎となす。傍そば(そは)と蓂蓂ひひ(そは)とを通はせたるなり。

八十てんじゅうの手習てならひ。

年老いて學ぶは、時に時機過ぎて其効無しとの義。又年老いても、學ぶべきことは學べとの義に用ふ。

八十てんじゅうの三歳兒さいじ。

年老いて再び幼兒の如くに、智慮の後戻りすることなす。いふ。「漢書」文帝記「七十翁婦戯如三小兒。」

耻はぢと天窓あたまはかき次第しだい。

「菅原手習鑑」あたまかく子は耻をかくし

八十八夜やちじゅうはちやの別れ霜しも。

節分より八十八日目に至る間には霜降るが、夫れより以後霜降ることとやむものなり。故にかくいふ。

蜂はちに上下じやうげの禮らいあり。

蜂はちに三枝の禮ありと同じ。蜜蜂に女王、黒蜂、労働蜂の三種の階級ありて労働蜂は労働して能く他の二種を

養やうふなり。  
耻はぢの上うへの損そん。

既に耻づかしき思ありし上に損失のあるをいふ。

耻はぢの上塗うへぬりをする。

耻はぢの上に、又耻はぢを加ふること、泥工の壁を塗るに、一度下塗を済ましたる上、更に又上塗する故にいふ。

蜂はちの巢すに礫つぶてをうつたやう。

大に喚こゑぎ出す形容。蜂の巢すに小石などを投げ込めば蜂が巢すの外に出で、喚こゑぎ出すなり。

蜂はちの巢すの毀こはれたやう。

人の東西に奔り、南北に馳せ、或は中央に集るなど非常の騷擾さわうをなすをいふ。蜂は巢すを毀こはたるに及んで、非常に騷擾さわうを始はじむるものなれば、かくいふなり。

鉢坊主はちぼうずの報謝ほうしゃ米。

多きことをいふ。

撥はらや三味線みせん、桴ぶちや太鼓たいこ。

罰ばちあたるといふに應ずる捨壺すて詞ことばなり。撥はらと桴ぶちと音相おんあひ通ずるを以て撥はらは三絃さんげんに當り桴ぶちは太鼓たいこに當るものと



冷嘲するなり。  
耻を言はねば理が聞えぬ。

「小野道風青柳視」達て御所望候を辭退して、此道風耻を申されば、理が聞えず、と幼少なる砌より筆持つ事が大嫌ひ」  
耻をかく。

耻辱を蒙ること。

耻を耻と思はぬものは耻かきたる例なし。

耻づることを知らざるものは、恬然として平氣なり。  
耻を感じることなしとの義。

耻を思は、命を捨てよ情を思は、耻を捨てよ。

耻辱を重んずる者は命を捨てざるべからざることあり。又愛情の爲には外聞耻辱を顧みるに違あらざることあり。故にかくいふ。

耻を知る者は耻かゝず。

「孟子」無耻之耻真無耻。」

八卦八段嘘九段。

八卦は大抵うそなりとの義。

八せん八日間日四日。

八尊日は、壬子の日に始り、癸亥の日に終る、十二日の間なり。此間八日間は家屋の建築などを忌むなり。但し後の四日間は忌むことなし。又俗に八尊入る日に雨降れば却つて晴つべき、八尊の入る日晴れて明日雨降れば雨降りつゞくなりといふ。

罰は眼の前。

因果てきめんと云ふ事。

八天狗を働く。

一人にて八人前程働くと云ふ事。

初物を食へば七十五日長生する。

俗説。

初玉手目の薬。

将棋の語。

鳩が豆鐵砲を食つたやう。

人の嘔りて目を見張り、頬をふくらしたる形容。

鳩根性。

頬ふくれて居ること。常に不機嫌なる喻。

鳩鳴き爲舞ふは皆雨の来るし。

解に及ばず。

鳩に三枝の禮あり。

鳩樹木に止まるに、親鳩より三枝下りて子鳩とまるなり。故に鳩を禮ある鳥といひ倣して、人の禮なきを戒めたるなり。「學友抄」鳥有反報食。鴿有三枝禮。詩經鴿巢釋文「案戶鳩有均一之德。食其子。且從上而下。暮從下而上。均如一。上中下。」

鳩の豆使。

使先で足駄をばくに同じ。(ツの部)を見るべし。

鳩を恐れて種蒔を控ゆるな。

杞憂に過ぎて爲すべきことも事抑ゆる勿れとの義。

鼻明かす。

呆れて茫然たらしむこと。

花多ければ實少し。

外觀の立派なるは其實質美ならずとの喻。

鼻が落ちるやう。

臭氣の甚だしきを云ふ。

鼻が宿換するやう。

前に同じ。

鼻糞で鯛を釣る。

えびで鯛釣る(エの部)に同じ。

鼻毛を延ばす。

男子の婦女子に醜弄せらるゝを悟らざるを嘲りていふ。

鼻毛をよむ。

人の弱點を看破して、之に乗するをいふ。

花さかぬ身は静なる柳かな。

外觀上見榮えさせざれども奥ゆかしき所ある喻。容貌よりは精神を貴ぶ義。加賀千代の句なり。

鼻最初に身成る。

「龍會」人胚胎鼻先受形故鼻祖。「書言故事」人受胎於母其生始生鼻。人の顔を描くも鼻を先にす。「許旌陽服氣書」人受胎于父母其始成鼻。齒家齒人。亦從鼻始。



花咲き實成る。

物の成功せる事。

話が尻に廻れば終になる。

四方山の話が始まりて其終りに至る頃には糞とか小便とか尻の方のことを話すとなり。

落語家は世間のあらで飯を食ふ。

落語家は世間の悪口を話の種として、湖口の料となすとの義。

話喰ひ。

恐ろしき話などすれば、直にこれを信ずるを云ふ。

離しつぎはせぬもの。

酒を盃につぐ時の作法。

話に實が入る。

熱心に話すこと。

話の名人は嘘の名人。

説話の巧なるものは虚言の巧なるものなりとの義。

話半分嘘半分。

人の話は半分位は事實で半分は嘘なりとの義。

話半分に聞け。

人の話は實事が半分位なりと覺悟してきくべしとの義。

鼻垂にも次第送り。

次に同じ。

鼻垂順送り。

無能者の局に當りて何事も他に譲り、次第に譲り譲りて順送りとなり、遂に一事をも断定する能はざるをいふ。

鼻つらに藤を通す。

人を使ふことないふ。牛を使ふに其鼻に藤を穿たしむ故にいふ。

鼻で粥を焚いて見せる。

他人の言ひし事の成就せざるを期して、若し夫れが成功せば、鼻で粥を焚いて見せむと嘲り言ふ。

花に嵐。

月にむら雲(ツ)の部に出兵。

鼻にかける。

己の有する所を以て、他に矜傲なるをいふ。例へば宮

貴を以て驕り、學問才能を以て誇り、恩惠を以て傲るなどの類をいふ。

花のお江戸。

江戸は櫻花を以て名高き故にいふ。

鼻の穴へ腫物出来ると嫂が孕む。

俗説。

鼻の先で待遇ふ。

人に接して無禮不遜なるをいふ。

鼻の下がかはす。

鼻の下とは口のこと。口が可愛といふことにて食を給せざるべからざるをいふ。又生命が欲しいとの義あり。

鼻の下が長し。

婦女に感溺し易きものをいふ。

鼻の下宮殿建立。

神官僧侶など殊勝らしく、社殿堂宇の建立修補を名として、寄進を募るといへども、其實自家の口腹を充たす用に供することを譏りていふ。又單に糊口の計を爲すことにいふ。

鼻の下の御祭。

食ふ爲にするを云ふ事。

鼻の下の建立一萬坪。

食ふ事の爲に計を爲すこと容易にあらずとの義。

鼻の下の十萬坪が埋まらねへ。

食を得る能はずとの義。「傳家寶」寧填萬丈深坑。不

鼻の下の長いものは多淫。

俗説。

鼻の下の長い者は長生する。

「五雜俎」に云、漢の武帝或とき臣下に對して、相書に鼻の下の人中長さ一寸なるは年百歳に及ぶとありといはれしに、東方朔がたはらに居て、大に笑へり。各朔が無禮なる體を帝につげ申す。朔陳じて、某嘗て帝を笑ひ奉るにあらず、彭祖が面の長からむことを思ひ出でて笑ひ侍りといふ。帝其の故を問はる、時、朔がいはいく唯今相書の説に人中一寸あるは百歳と見え候へば、彭祖八百歳とつけたまはる時は、人中の長さ八寸にや、其面ざし定めて一丈もあるべし。此故に笑ひ侍りぬと



笑ひしかば帝も亦大に笑へりと」  
花の都はなのみやこ

江戸の事をいふ櫻花を以て名ある都なればまかいふ。  
鼻剃はなはげ。

鬻らんと欲して隠し了せざるを罵りていふ。

花は櫻人は武士。

花は櫻を第一流に推し、人は武士を第一流に推す。

花はさくとも身はなるな。

青年の子女懐胎せざる中がよしの義。

花は根にかへる。

凡天下の事々物々皆其始むる所の根本に反るものなり

との義。「千歳集」崇徳院御歌「花は根に鳥は古巢に歸

るなり春のとまりを知る人ぞなき」古語「花散在根鳥

歸古巢。」「老子」夫物芸々各歸其根。」

花はみ吉野人は武士。

花は櫻人は武士と同じ。吉野は、櫻花の名所なるを以

て、櫻といふ代りに、吉野といふなり。

花は折りたし梢は高し。

之を欲すること切なれども、其之を得る方法に困れる

鼻端はなはしに腫物出来れば隣家りんかに出産しゅつさんがある。

俗説。

花は半開。

凡そ物はみな十分に至らざる所に興味がありとなり。

花を見るは爛漫たる盛開の時よりも、半開の時を佳と

すとの義。聽松堂語鏡曰。胡塵山曰。凡事必使可加。

酒飲しゅ微醉び花看はな半開はんかい。邵康節の時、看花特莫見離

鼻へ食ふと長者ちやうじやになる。

俗説。

花見虱。

三月朔生の花見時分に虱、衣服の表に這ふ者なり、故

に三月の花見虱といふ。

花見飯を食ふ。

食時に長き時間を費すこと。

花も實もあり。

言行揃ひて美なるものをいふ。「源氏物語」明石の上の

ことをさつまつ花たちばなの花も實もぐして「揚子

方言」實無華則野。華無實則史。」

花も折らず實も取らず。

あぶはちとらず(アの部)に同じ。

花より團子。

虚榮を取らんよりは、實益を取るが優るとの義。花を

賞するよりは、團子を食ふが本意ぞとの義。「堀川狂歌

集」花よりも葛團子を思ふらむ吉野の奥にあたる山

賊しやく。

放れ駒。

心の儘に狂ひあるを云ふ。

鼻をわかせる。

機先を制して己先之を得、人をして得る所なからしむ

るをいふ。

鼻うごかす。

得々たる容貌。

鼻をつまゝるやう。

間夜外出して、一寸先の見えぬをいふ。

鼻をつまんで遁げ出すやう。

人の厭忌すること甚しき喻。不潔臭穢の物に逢へば、

鼻をつまんで通るより出づ。

齒に衣着せぬ。

何事も心の思ふ通り、隠さず、忌憚なく、有の儘に物

言ふこと、即齒に衣着せる(一枚表面を隠して居る、

と)の反対なり。

齒に衣着せる。

齒に衣着せぬの反対なり。

跳る馬は死んでも跳る。

壯年の時の思想行為品性等の老年に至るも、猶變ぜざ

るをいふ。

羽あらば飛んでも行きたい。

疾く行きたしとあせる態なり。

羽が生えて飛ぶやう。

かたい飯のこと。又物のよく人に望まるゝ事をいふ。

羽の生えぬ間は飛ぶな。



準備整はざる間は、事を爲すことなけれとの義。  
齒の脱けた夢見るは不吉。

俗説。  
祖母育ちは三百文値が下る。

祖母育ちは三百文の損といふ。祖母に育てらるゝ子は其の成蹟宜しからずとの義。そは祖母は其愛に溺れて眞の教育法を誤まればなり。

母の溜息つくより、小供の泣くがよし。

解に及ばず。  
齒生えて生るゝは鬼子。

生れしとき齒の生えたるはそれを舐みてかくいふ。  
蠅取蜘蛛も一生袋蜘蛛も一生。

はもも一期えびも一期に同じ。  
はへば立て立てば歩め。

親の子を育つる心の切なるいふ。  
蛤で海をかへる。

到底なすべからざるいふ。  
蛤は小供の虫の毒。

俗説。  
蛤は唇氣樓を吐く。

俗説。  
濱の松風。

音ばかりといふこと、聲ばかりにて、其實なきこと。  
食があらひ。

大食すること。  
半夏の日に採りたる生物を食ふな。

俗説。  
半死半生。

人世すべて夢の如しとの義。半ば死に瀕し半ば命を保つをいふ。  
萬事は夢。

繁昌の地には草生えず。  
繁昌の地、人の通行繁し、故に草生ぜざるなり。

半田龜崎女の夜這。

尾州の半田龜崎は、女が男の所に夜這すとなり。  
番町に居て番町知らず。

東京麹町區の番町は、其土地甚だ紛はしくて、番町に居住するものすら勝手不案内なりとの義。  
榮特の愚痴。

佛弟子榮特と云ふ愚なる者ありて、常に愚痴をこぼしたる故に云ふ。  
萬能も一心の善には如かず。

藝術多しといへども心の善なるに如かずとの義。智能藝術よりは道徳が貴しとなり。  
海鰻も一期鰻魚も一期。

はもは、其體長大にして海中に住み、鰻は其體微小にして水底に潜行す、然れども其一生を終るは同じとなり。「諺草」杜詩に孔丘盜跖共塵埃といへり、俗の諺と意同じ「一休和尚の歌、生れては死ぬるものなりおしなべて猫も杓子も釋迦も達磨も」とあるも此意に同じ。  
早いが勝。

先んずれば人を制すといふに同じ(サの部)参照  
早う死にたがるも一興。

早く死にたいといふ者を嘲りていふ。  
速牛も淀遅牛も淀。

速牛も淀遅牛も淀(オの部)に出づ。就きて見るべし。  
早起三文の徳。

早起は利多しとの義。「通俗編」早起三朝當二工。「早起は三文の徳、長起は三百の損。」

早起は利多く、夜遅くなるは害多しとなり。  
早合點の早忘れ。

早合點とは深く心に刻まざるをいふなり。深く心に刻まざれば、直に早く忘却するなり。  
早からう悪からう、遅からう善からう。

早く出来るものは悪からん、遅く出来るものはよからんとなり。拙速巧遅の義。  
早く覚ゆる者は早く忘るゝ。

記憶すること早きものは、忘るゝことも早しとなり。  
早く産を求めて晩く妻を娶れ。

先財產を早く作りて、然る後妻を娶れとなり。  
疾くしたことに善い事ない。



「四京雜記」枚舉文章敏速、長郷制作淹遲、皆盡一時之譽、而長郷溫麗、枚舉有累句、故知疾行無善迹、早く熟すれば早く腐る。

大器晩成の反對なり。早熟の者、末路其成蹟宜しからずとなり。

早好の早倦。

ちかほれのちかあきに同じ。直に好み直に厭ふをいふ。心定まらずして情の移り易きをいふ。

早飯も藝の中。

早く飯を食ふも藝の中なりと云ふ事。藝無しの人酒落なり。

流行目は白眼んで置くと傳染らぬ。

俗説。

流行物は廢物。

流行するものは、直ちに廢物となるをいふ。

腹の皮が燃れるやう。

可笑しき事ありて、腹をかへて笑ふこと。

腹の皮張れば目の皮たるむ。

飽食すれば睡氣生ずとの義。「實語經」食過解怠起棘の根から葉は生えぬ。

瓜の蔓に茄子がならぬに同じ。

腹の減つたときは薬でも。

空腹の時は薬でも食ふといふほどの意にて食を擇ばずとの義。飢ゑたる時は食を擇ばず(ウ)の部に同じ就きて見るべし。

腹の柔いは無病。

腹部のやはらかなるは病氣なしとの義。

腹は借物。

女子を卑めたる往時の諺。子は生まるゝ迄暫く腹を借りしまでなりといふほどの心なり。

腹八合は醫者要らず。

大食せざれば病にかゝらず、即ち醫者を要せずとなり。八合とは十分満腹するに至らずして稍や控へ目に食すること。

腹八合は病なし。

腹八合は醫者要らずと同じ。

腹へつた時は飯が旨い。

飢ゑたる時は食を擇ばず(ウ)の部)の條を見るべし。

腹へつた時は薬でも。

空腹の際は食を擇ばずとの意。

孕女が火事を見て體を掻くと子に痕が出来る。

俗説。

孕女が通ると死したる鹿が駆け出す。

俗説。

張子の虎。

能く首を動かす喻。

針と大名とは遠くから光る。

解に及ばず。

針の穴から天覗く。

管の穴(ウ)の部)から天に出づ。

針の筵に坐す心地。

心に苦しき所ありて其坐に堪へざるをいふ。針にて刺さるゝが如く痛苦を感じずとなり。心に畏るゝ所あるか

差づる所あるかの場合なり。

針程の穴から棒程の風が来る。

隙穴より入り来る風の寒きをいふ。轉じて些細な事の爲に大事の醸生し来るをいふ喻とす。

針程の事を棒程にいふ。

些細な事をも誇大にいふ喻。

針を足の裏へたてると頭上へ昇る。

針を大切に仕舞ひて鹿末に取扱はしめざる方便にいふ。

針を倉に積むでも堪るまい。

奢侈を極むるものは、如何に財産多くありとも、遂には費消し盡くるに至るべしといふ義。

針を棒になす。

小事を言ひ觸らして大事になすをいふ。

春寒と秋ひだるいはこらへられぬ。

立春後却て寒威甚しく、秋涼の低食慾甚しく進む故に

此諺あり。

春寶引をせぬ者は六月の蚊に喰はれる。



俗に春賭博をするを蚊のまじなひといふ。

春の甲子に雨降れば早 夏の甲子に雨ふれば洪水。

甲子の日に雨が降ると六十日つづく(マの部)の部に出づ。

春の甲子日に雷鳴れば五穀みのりてゆたかなり。

春の日の長雨氣。

春雨長くふりつらくないふ。

春の夜の夢。

僅々の間といふこと。又はかなきことをいふ。「千歳集」春の夜の夢ばかりなる手枕に甲斐なく立たむ名こそ惜けれ。「源平盛衰記」奪る者久しからず春の夜の夢の如し。

春の雪は萎儀。

春雪は夢の爲によし、故にいふ。

春日に焼けたのは穢多も惚れぬ。

春日には顔色の黒くなり易き故にいふ。

晴の海原波立たず。

静なる形容。晴天なる故海静なるなり。晴るとは曇りのなきこと、即ち青天白日といふが如く、人の行爲の高明正大にして不正ならざるの義あり。舉動正しきときは何等恐るべきことなく、耻かきことなく、煩はしきことなし。海上波静なる如く、心中平靜なりとの喩。

ひ

日合から日蝕を拜むやう。

眇眼をいふ。

ひあいな目に逢ふ。

危きに臨みしをいふ。

最負の引倒し。

最負して却つて其人の害となること。

最負にて双倒が勝になり負が双倒になる。

相撲の勝負をいふなり。己れの最負する所に利を得さするをいふ。

火いたづらすると寝小便する。

俗説。

びいどろを倒につるしたやう。

美女の形容。倒は根より出づ。

燧箱で味噌をやく。

貧乏甚しくして、鄙吝なる生計を爲すをいふ。

燧箱で焼味噌のやう。

前の跡見るべし。

燧箱のやう。

狭隘なる家をいふ。

火が消えたやう。

生計の窮乏に陥る義。サツパリ閑なりといふ謎。

非學者論議に負けず。

無學なる者暴論をなすとの義。

日陰の桃の木のやう。

細く疥せたるをいふ。

日陰の豆もはじける時分。

春情の發動する時期。

東侍西坊主。

東西本願寺僧の氣質に差異あるをいふ。或は曰く東は關東のこと、即ち江戸をいひ、西は京都をいふ。江戸は侍の權威を張る所、京都は僧侶の勢力ある所をいふなりと。

火が降るやう。

赤貧をいふ。やけになること。

火が降つても槍が降つても。

如何なる困難あるも、と云ふ義。

彼岸來れば團子を思ふ。

連想する事。我國の風俗古來彼岸には團子を作りて食したるなり。故にいふなり。

日計算では足らぬが月計算では餘る。

日計足らざれども月計餘りあり(この部)に出づ。

彼岸過ぎての麥の肥、三十過ぎての男に意見。

無効の喩。時機の失したる義。彼岸後に麥に肥料を施すも効なし。



彼岸の中日に炙をすゆると疝氣直る。

俗説。

彼岸の中日に釣つた砂魚を食ふと中氣せぬ。

俗説。

ひかれもの、小唄。

「呂氏春秋」天樂篇、罪人非不歌也、狂者非不武、墓に蠅。

何の造作もなく一口に呑み込むといふ義。

墓の油で燈を付けると人の顔が長細く見ゆる。

俗説。

墓の息天へ上る。

農民の息天へ上るといふより轉じたるか。

低き所に水溜る。

悪評を賣りし人は、悪事皆其人の所爲かと疑はれて、悪名の聚り來ること、水の低處に溜り込むが如しとな

り。「論語」子張篇、子曰。紂之不善。不知是之甚也。是以君子惡居下流。天下惡皆歸之焉。」

比丘尼に翠丸。

無理な注文。

比丘尼に陰莖見せよといふやう。

無理なる請求を爲すこと。

比丘尼に白髪を見せよといふやう。

比丘尼に陰莖見せといふやうに同じ。望須眉於閻人の

比丘尼に櫛をさゝせるやう。

出来ざる事をいふ。

比丘尼の櫛貯。

無用のものを貯ふる喻。

比丘尼の髮を結ふやう。

出来ざる事をいふ。

日暮れ道急ぐ。

事切迫して俄に急ぐをいふ。日暮れ道遠しともいふ。

「史記」伍子胥曰。吾日暮塗遠。故倒行逆施之。自居焉

傳云、日暮遠、吾生已蹉跎。」

卑下も自慢の中。

謙遜に似て其自慢の反をいひて誇る意あるをいふ。佛

説に卑下慢といふ事あり。

彦根の百兩袴八幡の千兩棒。

江州彦根は奢侈なる者衆く、八幡は勤儉なる者多きを

いふ。日野の千兩袴の條参照すべし。

庇をかして表屋をとらる。

曾て己が庇陰をかしたるもの、爲に、其地位を奪はる

類をいふ。庇護を與へて却て其者より不利を蒙むると。

膝がしらで箱根は越されませ。

到底出来ざるべしとの義

膝頭で江戸。

前に同じ。

膝とも談合。

ひとり思案にくれむよりは、誰かに相談して其人の意

見をも叩くがよしとの義。

膝に黒痣のある者は旅をする。

俗説。

鹿角菜の行列のやう。

拙なる草書文。

鹿角菜は毛拂になる。

秘事は睫の如し。

「諺草」睫は目の側にあれば見えざる如く、世に秘傳といふ事も、聞ては安き事ながら、習はざれば知り得ずといふ意なり。韓非子曰。知如睫也。能見百步之外。而不見其睫。是諺と語勢相似たり。「駭異雜話」此租世の諺に申し傳へしはかなき事につきて、御物語りを承り候うて、いづれもふかき意味ある事を覺え侍る。誠に秘事は睫にて、あまり近きは却つて見えぬ物にて候ふ。

美人の素顔より醜人の薄化粧。

解に及ばず。

美人の終は猿になる。

「諺草」太平廣記に、唐代宗の廣德年中に、孫格といふ



もの、洛陽に遊び、はからざるに、袁氏の女の形う  
るはしきを見て娶て妻とせり。十餘年をひて、二人の  
子をまうく。其後孫恪官につかへて長安に行くに、妻  
の袁氏もつれ行きけるが、端州と云所にて袁氏云ける  
は、此邊の江の濱に峽山寺といふ寺あり、其寺の僧と  
相別る、事久し、この度かの寺にゆかんと云。孫恪則  
かの寺につれ行きければ、袁氏悦びて老僧の房にゆく  
に、尊者なけれども、よく案内をしろもの、ことし。  
袁氏やがて碧玉環を取出し、僧に授けてこれに  
此寺の舊物なりと云、僧これをさとらず、飯齋する  
時數十の猿、臂をつられて松にくだり鳴きさけぶ。袁  
氏哀む色ありて、罪を取て詩を作り壁にまゐらす。その  
時に云無端變化幾湮況、剛被恩情役此心、不逐逐件  
歸山去、長嘯一聲烟霧深。と書き終つて孫恪に向ひ是  
より長く別ると云ひて、着たる衣裳を引さき、忽に袁  
魂を失ふ。しばらくありて老僧にとふ、老僧むかしを  
思ひ出して語りけるは、懸僧沙彌の時此猿をかふ、玄  
宗の開元年中に高力士此寺に來り、猿のさかしきを見  
て、絹を以て猿にかへて京に歸り玄宗に奏る。玄宗こ

れを上陽宮にかひなづけしむ、其後安祿山が亂に猿の  
行先をしらずと聞きしに、今日ふた、びその猿にあひ  
てあやしき事を見けり。此碧玉環は猿のくびに懸置し  
物なりと云。孫恪いよくかなしみて船を繼してな  
くく歸りけるとなん續世説にも此事あり、日本にも  
この怪事を傳聞て俗の口すまびにする事なり。」  
柄杓で水を飲むと柄杓のやうな子が出來  
る。  
俗説。是れは柄杓にて水を飲ませぬやうの奇談なり。  
柄杓の柄を持つは縁喜が悪し。  
昔人の首を斬りたる時柄杓の柄にさしたりといふより  
これを思む。  
飛車を取つてよろこぶ下手將棋。  
將棋の語。  
飛車成り返つて味方を助く。  
將棋の語。  
尾生の信。  
つまらぬ約束を守るの愚なるを嘲りていふ。「史記」蘇

秦傳「尾生與女子。期於梁下。女子不來。水至不去。  
抱柱而死。有信如此。」莊子「盜跖爲尾生溺死。信之  
忠也。」成語考「尾生抱柱而死。固執不通。」  
備前法華に安藝門徒。  
備前に日蓮宗徒多く安藝に眞宗徒多きをいふ。  
額に矢は立つとも背に矢はたさず。  
東人の條(アの部)に出づ。  
額の廣い者は運が好い。  
俗説。

左利きの者は器用なり。  
左手にて事を爲す者は器用なりとの義。  
左團扇で生活す。  
安逸に世をくらす義。  
ひたるさ欠伸寒さ小便。  
空腹になれば欠伸を催し、寒くなれば小便を催すと  
なり。  
臂鐵砲を喰はす。  
つきはなすといふこと。女子が男子の挑みを拒否する

美女は悪女の仇。  
よき人がからぬ人にくまる、ないふ。「脱苑」蘇賢  
篤「夫美女者醜婦之仇也。盛徳之士亂世所疏也。正直  
之行。邪枉所憎也。」史記「外戚世家」女無美惡。入室  
見妬、士無賢不肖。入朝見嫉。美女者惡女之仇。豈  
不然哉」  
美女は化粧を要せず。  
素質のよき者は飾を施さざれどもよしとの義。  
羊のわゆみ。  
「諺草」摩耶經傳云。譬如旃陀羅驅羊就屠所。歩々  
近死地。人命復過是。屠所とは畜を屠り殺す所也。  
羊を殺さんとて、屠所に引き行くに、一步くと進む  
程に、死することの近づくなり。人の命も屠所におも  
むく羊の如しと云事なり。後拾に「けふも又午の貝、  
そ吹つなれいつじのあゆみ近づきにけり」  
羊に虎の皮を着せたりやう。  
愚なるもの、賢者願する、怯者の大膽願する類をいふ。  
「後漢書」羊質虎皮、見豺即恐」



羊のわゆみ、ひまの駒。

人壽日一日と短縮し日月の速く過ぎ去るをいふ。羊のあゆみの條。及びひまの駒の條。参照すべし。

匹夫も志を奪ふべからず。

「論語」三軍可奪師也。匹夫不可奪志也。早天の朝曇。

早魁の時には朝曇るとなり。引ばり爪にせらるる。

あちからもちからもちも、持ち上げらるるをいふ。人垢は身につかぬ。

悪銭身につかずといふと同義にて、人の物を押領しても永久之を有することを得ず、他に出づる者ぞとなり。人有る中に人無し。

人衆多なりと雖ども完全無缺の人は稀なりとの義。古歌に「人多き人の中にも人ぞなき人になれ人人になせ

人至つて賢ければ友なし。

人あまり明慧精察に過ぐる時は、人皆之を斥けて友と

せずとの義。「家語」水至清則無魚。人至察則無徒。

一浦ちがへば七浦ちがふ。

鯨の入り来る所をいふならん。

人が一町飛べば八町も。

人に打ち勝たんとする者をいふ。

人が増せば水も増す。

需用者多ければ供給者を増すとの義。

人喰馬にも合口あり。

合口とは氣のよく合ふといふ義なり。謎の意は無頼の徒は人喰馬の如く馴れ近づく者なきに、まかも亦却つて意氣相投合して交るものありとの義なり。「諺草」此謎の意は馬の蹄齧るといへども、能くこれに馴る者あり、放逸無道の人といへども、能其氣に合ふ者有るに喩へたり。呂氏春秋曰。人有異者。其親戚兄弟妻妾無不能與之。自苦而居。海上人有悦其異者。晝夜隨而不去。これ異言同旨の譚也。

人口ほどにゆかず。

人は言論を巧にすれども、行は之に稱はずとの義

一口物で頬をやく。

小欲を忍ばずして大過を得るをいふ。

人肥えたるが故に貴からず。

「實語教」人肥故不貴、以有知爲貴。

人事いはいむしろしけ。

人事いはい目代置けを見よ。

人事言は目代置け。

「諺草」龍城録柳宗云、俗諺云白日無談人。談人則害生。昏夜無談鬼。談鬼則怪至。是諺の意に同じ。誠に漫に人の失を語りたらんは、禍の至る事掌をさすが如し。さりとして又いふたびに目代おかんもいかなれば、畢竟いはずともありなん。まかのみならず、人々おのが悪をばせめずして、人のあやまをあらざるは、其人の心ばへおしはかられて、あさまし。下耶の詞に人事いはいむしろしけと云は、目代おけと云のあやまりなり。あまりにつたなし。

人事いはんより我身の癖を直せ。

人の事彼此批評するよりは先我身の缺點を改むべしとの義。

ひつじ

人事いはんより我胸を知れ。

前と同じ。

人事言へば人が来る。

人事いへばむしろしけに同じ。

人事と小倅。

いひやうによるとの義言ふと結ふと通はせたるなり。

他人材木になるな。

他人のやうな氣になるなどの義ならん。

一條の矢は折るべし、十條の矢は折りがたし。

孤立すれば力弱く協同團結すれば力強きをいふ。

一つ穴の狐。

同類なりとの義。「漢書」楊敞傳「古與今如丘貉」人つく牛をば角をさる。

人に衝突するを好むものは、懲らすべしとの義。「野植」引律廢牧云、畜生軀人者截兩角」一つ銅のものを食ふ。

居住を共にすること。



一つ火は燈さぬもの。

「帝國文學」四卷四。紀の一、(神代上)伊非諾尊、伊非册尊を追ひて黄泉に到ります條の一書に、「伊非册尊曰、吾夫君尊、何來之晚也、吾已其泉之窻矣、雖、然吾當寢息、請勿視之、伊非諾尊不聽、陰取湯津爪櫛、牽折其雄柱、以爲乘炬而見之者、則膿涕虫流、今世人夜思一片之火、又夜思擲櫛、此其緣也。」

一つ星を見つくと長者になる。

俗説。

人と屏風は直には立たぬ。

人の世に處するに、あまり直に過ぐるときは、却つて不利なることあり、故に多少端曲なるべからず。恰かも屏風の風曲あるを以て立ち然らざれば立たざるが如しとの義。曲られば世に立たず、(イの部)の條参照すべし。

一つまさらりの女房は金の草鞋でさがしても持て。

良妻を擇ぶべしとの義。一つまさらりは皆合性よきなり。

人取る龜は人に取らる。

人を害すれば、己亦他に害せらる、喻。

人に節を越らす。

人を陷害せんには、先人を解怠せしむるなり、解怠せしめんには、先甘言を以て暗はしむるなり、節と云ひしは甘きといはんが爲なり。「大學衍義」昭以甘言而陰陷之。「周語晉語」又有甘言焉。言之大甘。其中必苦。讀在中矣。君故生心。雖蝸蟻焉避之。」

人に高下なし心に高下あり。

人物の高下は本來種あるにあらず、唯心の如何によつて高卑ありとの義。

人に影を喰はすれば瘦せる。

人の前に立ちて影するを戒めむが爲にかくいふなり。

人に貸すとも傘は日向へほすな。

傘は日に曝せば油流る、故なり。

人に貸すな傘。

させほせ傘、壁に立つな傘、人に貸すな傘、もつててもいふ。傘を人に貸して返し來ること甚遅く、或は

全く返し來らざることある故にかくいふ。  
人には添うて見よ、馬には乗つて見よ。

人には親しく近接して其性行を見るべし、輕々しく其人と爲を判定すべからずとの義。「孔子家語」但語曰相人以居相馬以與。「史記」滑稽傳「諺曰相馬失之瘦。相士失之貧。」

人に一癖。

凡人には一の癖あるを免れずとの義。「晉書」王濟有馬癖。和嶠有錢癖。杜預有左傳癖。「白氏文集」山中獨吟詩「人各有癖。我癖在章句。萬緣皆已消。此病獨未去。每逢美風景。或對好親友。高聲誦一篇。」慈鎮和尚の歌に「人ごとに一の癖は有るものを我にばゆるせまきしまの道。」

人に舞はさる。

他人に舞弄せらるること。「史記」封禪書註「秦皇漢武。爲諸燕遷性之士。舞弄之若偶然。諺の意に同じ。人の一生は重荷を負ひて遠きに行く如し。東照宮の遺訓。人は一生の間其重大なる責任を負ふものにて、困難苦痛は固より堪へ忍ばざるべからずとの

意なり。  
人の一寸我一尺。

他人の事ならば極めて、些細の非といへども直に見ゆるが、我身の事は、大なる缺點ありとも、氣付ずとなり。「壹簞錄」里語曰。他之短見一寸。己之短不知一尺。人の一寸は見ゆれど我が一尺は見えずとも又人の針程は見ゆるが我が棒ほどは見えずともいふ。

人の噂も七十五日。

一時彼是噂を立てられても、三ヶ月も經過せぬ間に直に忘れ去られて、永くはつゝかざとなり。七十五日は二ヶ月と半月との日數にして三ヶ月には足らず。

人の嫌には指でも指すな。

解に及ばず。

人の口恐ろし。

「國語」諺云衆心成城衆口鑠金。「史記」鄒陽傳「衆口鑠金。積毀銷骨。」荀子「傷人言甚於矛戟。况形紙筆乎。」夫木集「後京極の歌」世の中は虎狼も何ならず人の口に旨ければ、我口にも旨し。



人を愛すること、己れを愛する如くすべしとの義にし  
て、己の欲する所は人の欲する所なれば先之れを人に  
與ふべし。宜しく同情を盡すべしとなり。「性靈集」諺  
云奴口甘。耶舌甜。」

人の口に戸が閉てられぬ。

人の風説誹謗等を避むること能はずとの義。即ち己に  
曲事ありて、人の噂せんことを疾み、之を防がんとす  
とも、遂に能はずとなり。「國語」周語「國人莫敢言。道  
路以目。王喜告召公曰。吾能弭謗矣。乃不敢言。召  
公曰是障之也防民之口。甚於防川。川壅而潰。傷  
人必多。民亦如之。」

人の心と竹の曲らぬは少し。

人心の正直なるもの少きをいふ。竹も一見直く見ゆれ  
ども、多少曲り居るなり。  
人の心は九合八合。

人の心は略相同じとの義。「荀子」不苟篇「君子位尊而志  
恭。心小而道大。所聽視者近。而所聞見遠。是何  
邪。則操術然也。故千人萬人之情。一人之情是也。」  
他人の事言はんより肘垢おとせ。

人の漫評などする暇があるなら、肘の垢なりともすり  
おとせとなり。人の事を言ふ勿れとの戒。

他人の午勞で佛事を爲るな。

他人の力に依頼せず。自力にて事を處理せよとの義。  
佛事の時他人の午勞によらず、自家の午勞を佛前に供  
すべしとなり。

他人の七難は見ゆれど我十難は見えず。

他人の缺點は少しにても目に付き、己の缺點は多くあ  
りとも氣が付かずとなり。

他人の坐つた後へ坐るには三年たゝかぬと  
悪い。

他人の坐したる後へ、直に坐する時は、其體温を受け、  
病氣傳染等の恐あるよりいふ。  
人の裾を搔く。

いらぬ世話をやき人を離間する事。  
人の長は二十五の曉まで。

人の身長の發達二十五歳を限とすとの義。  
他人の疝氣を頭痛にやむ。

他人の事につきいらぬ心刺をなすな。いふ。

他人の虚言は我が虚言。

虚言を信じて人に傳へ語らば、我亦虚言の責を免る、  
能はずとの義。

他人の棚卸をする。

他人の悪事を言ふ事。

人の價値は其人が死なねば定らぬ。

「香奩故事」晋劉毅云、丈夫盜棺事方定。」

他人の島に入るな。

嫌疑を招く地に入るべからずとの義。

人のなさは世にゐる時。

世に時めく時に好意を運べども、一朝零落の時には捨  
て、顧みざるに至るをいふ。「晋家々集」友といふ題「あ  
はれ我うき争までの友でなき人のなさは世にありし  
ほど」  
他人の女房と枯木の枝と上る〜ひやく〜  
する。  
他人の妻を殺するは恐るべきものなりとの義。

他人の蠅を逐ふより己れの蠅を逐へ。

他人の事に容喙せず先己を省みよとの義「景行録」「各  
人自掃門前雪。休管他人屋上霜。」

人の針程は見ゆれど我が棒ほどは見えず。

人の一寸我一尺の條を見るべし。

人の振見て我振直せ。

他人の人の態度様子を見て我身を反省すべしとの義。「諺  
草」論語子曰見賢思齊焉。見不賢而内自省也諺、  
いに本づけるなるべし」

人の周圍を廻ると蛇になる。

俗説、葬式の時棺を荷ひて庭上を廻るより思む。

人の胸を打つと三年生きない。

人の胸は肺臓心臓等の在る所にて大切の場所なればは  
げしく打ちて損傷せざらしむむが爲にかくいふ。

人の目は九分十分。

人の見る所大抵同じきをいふ。

人の行末と水の流は知れぬもの。

「方丈記」行く川のながれば、絶えずして、まかも本の



水にあらず。よどみに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しくとゞまることなし。世の中にある人とすみかと、また、かくの如し。『續後拾遺』大納言師氏の歌「水の面に、浮きてたゞよふうたかたのまだきえぬまにかはる世の中」

人の喜ぶを聞かば喜ぶ。  
解に及ばず。  
人は一代名は未代。

其身は一代にして終るとも、其名は後世に遺るといふ義なり。『白氏文集』遺文三十軸、軸軸金玉聲。龍門原上土。埋骨不埋名。歐陽公本論云「同乎萬物」生死而後歸於無物者暫聚之形。不與萬物共盡。而卓然不朽者後世之名。『本朝文粹』夫形者百年之旅館也。名者萬代之嘉賓也。

人は岩木にあらず。  
人は岩木の如き無情の者にあらず、必ず情に動かさるるなり。(人木石にあらずの條参照すべし)  
人はかげが大事。  
人は燕居の時に慎むべき者となり。獨を慎むことが

緊要なりとの義。

人は死して名を留め、虎は死して皮を留む。  
人は死後に名が存し虎は死後に皮を残すとの義。『朝野僉載』人死留名虎死留皮。『埋雅』語曰人死留名、豹死留皮。故君子疾没世而名不稱焉。  
人は善惡の友に依る。  
善惡共に友人の感化を受くるをいふ。『孔子家語』與善人居如入芝蘭之室。久而不聞其香。即與之化矣。與不善人居如入鮑魚之肆。久而不聞其臭。亦與之化矣。  
人は七轉び八起き。  
凡そ人は一生涯の中に幾回も失敗すれども、亦幾回も成功するに至るとなり。

人は名を惜み、虎は皮を惜む。  
人は名譽が大切にして虎は皮が大切なりとの義。虎は死して(トの部の條を見らるべし)。  
人は盗人火は焼亡。  
人を見れば盗人と思へ火を見れば火事と思へ、の條に

出づ。

人は萬物の靈。

人は萬物に靈長たるものなりとの義。

人は人中、田は田中。

人物は人の中に在つて、世故を嘗めたる者がよく、田地は田地の打ち並びし中央がよしとなり。

人は人、吾は吾。

人に關せず吾分を盡せとの義。人の蠅を逐ふより己の蠅を逐への條、参照すべし。

人は武士花は櫻。

花は櫻人は武士(ハの部の條)に出づ。

人は見かけによらぬもの。

悪しきものに、却つてよきものがあるが如く、人の品性賢愚など、其外貌によりて俄に判定しがたしとの義。

「孔子家語」子路初見蘧、孔子曰。以容取人。則失之于羽。以辭取人。則失之宰予。人相體の、よきものに、却つて心の悪しきがあり。

人は古らほど貴。

「尙書」人惟貴。器非求。舊惟新。物は新を用ひ、人は古を用ふとし、いふ。『萬葉集』詠舊歌、物皆新。吉唯人者舊之。應。宜。

人は病の器。

人には種々の疾病あり故にいふ。

人は老少不定。

人の生命は老者後死し、少者先死することありて、一向定まらずとの義。

人は和に如かず。

人は親和するがよしとなり。

人はわるかれ、吾よかれ、後生大事に金ほしや、死んでも命のあるやうに。

貪慾我利の甚しきをいふ。  
人一度すれば己はそれを十たびす。

勤勉すべき事をいふ。  
一重まぶちの人は美人。

容貌をいひしなり。  
人木石にあらず。



人は岩木の如きものにあらざれば優しき情ありとの事。「文選」人非木石豈無感。「白氏文集」人非木石。皆有情。不如不遇傾城色。「伊勢物語」いは木にしあらば心ぐるしとや思ひけむ。

人増せば水増す。

人が増せば水が増すの條に出づ。

人行けば草動き、鳥飛べば毛落つ。

人のなしたる事跡の掩ふべからざるをいふ。

一人口は喰へぬが二人口は喰へる。

一人にて生計するよりは二人にて生計するが經濟上得策なるをいふ。

獨自慢の譽人なし。

誰一人譽る者なきに、己れのみ一人自慢する者ないふ。

「韓非子」説林篇「鄙諺所謂自賢而不可及也。士自譽辯而不信。」

獨葺の屋根屋。

上りたり下りたりするといふ謎。

一人娘に婿八人。

一の物事を望む人の多き喻。疑、二人に婿三人(ハの部)ともいふ。

獨身者がお茶を貰つたやうに。

にこくするといふこと。

獨善がりの人笑はせ。

解に及ばず。

人をあはれむ者は日月の如し。

仁愛の深き人は、人に敬慕せらるゝとなり。

人を祈らば穴二つ。

人を呪はば穴二つの條に出づ。

人を祈る者は二の穴を穿て。

人を呪はば穴二つの條を見よ。

人を怨むより身を怨め。

人の爲せる事の我意に逆ふことありとも、決して人を怨み咎むべからず、之を我身に反省せよとなり。「淮南子」經稱訓「怨人不如自怨。」

人を鏡とせよ。

「墨子」君子不鏡於水而鏡於人。鏡於水則見容

之面。鏡於人則知其吉凶。「唐書」魏徵奏。太宗臨朝歎曰。以銅爲鏡。可正衣冠。以古爲鏡。可知興替。以人爲鏡。可明得失。朕常保此三鏡。內防己過。今魏徵逝。一鑑亡矣。

人を知るは酒がちかみち。

酒をのみたる時は其人の本質顯はるゝと云ふ。

人を毀らずして己を毀れ。

人の非を擧げてそしらんより、我身の悪しきを正すべしとなり。

人を助くるは出家の役。

人をあはれみいたわりて慈悲をなすが僧侶の任なりといふ義。

人を殴いた夜は寝られぬ。

他人を困めし者は心を痛めて爲に安からずとの義。

人を使ふは使はるゝ。

人を使役する者は、身心を勞すること多し、故に使はるゝといふ。

人を呪はば穴二つ。

人を呪はば穴二つ。

人を呪はば穴二つ。

人を呪はば穴二つ。

人を呪はば穴二つ。

人を呪はば穴二つ。

人を呪はば穴二つ。

人を害すれば、己亦害を受くる者なりとの義なり。「法華經」普門品「呪詛諸毒藥所欲害身者念彼觀音力還若於本人。古歌に「あしかれと人をばいはじ離波がた我身のとがにかへるまらなみ」つみもなき人をうれへば忘れ草己が上にぞおふといふなる」

人を人臭いとも思はぬ。

人を人とも思はず、いと不適なる體にいふ。

人を人とも思はぬ。

人を人臭いとも思はぬに同じ。

人を待たすとも待つ身になるな。

人を待つは焦慮するもの故に言ふ。

人を見て法を説け。

人を見て法を説け。

人を見て法を説け。

人を見て法を説け。

人を見て法を説け。

人を見て法を説け。

人を見て法を説け。

人を見て法を説け。

人を見て法を説け。

人を見て法を説け。

人を見て法を説け。

人を見て法を説け。



又火といふものは、家に必ず無かるべからざるものなれども、油断ありて火を疎に爲る時は、焼失の患あり。人と火とを對して、常に慎んで油断すべからざることを訓戒せるなり。

人を許すとも己を許すな。

人を責むること寛に、己を責むること、急なれとの義。

人を夢に見るは其人に戀はるゝと云ふなり。

「萬葉」四に、無間、戀爾可有半草枕客有公之夢爾之所見。幾許思異目也。數細之、枕片去夢所見來之。吾背于我、如是戀禮許曾、夜干玉能夢所見管、寐不所宿家禮。」

日向菴。

外強硬なるに見えて内軟なる喻。

火にて火は消えず。

柔剛を制すと云ふ事あり。柔は柔を制する能はず、剛は剛を制する能はず。との義。

日に三度身を顧みる。

論語及び荀子に出づ。日に幾回も我身に過失なきか反省するをいふ。「新葉和歌集」日にみたびおるかなる身をかへり見てつかふる道も我君のため「諺草」是は論語學而篤の曾子の三省を取て、忠臣の情を詠せり。然れども論語の意は、日に三たび省るにあらざ、たゞ三事を以て其身を省る也、歌の意とちがへり。

丙午の女は男を殺す。

丙午の女を娶るを忌むよりいふ俗説なり。そは丙は陽火なり、午は南方の火なり、火に火を加ふる故に惡しといふなり。

檜山の火は、檜より出で、檜をやく。

自業自得の義なり。「砂石集」自業自得果の心をよめる「おく山の杉のむら立ともすればおのが身よりぞ火を出しける」

火の車が舞ふ。

窮乏の甚しきをいふ。一休和尚の狂歌に「びんぼうな人の世界は火の車しちや米屋の鬼にせめられ」

火のじやうを落とすと貧乏する。俗説。尉とは能樂の面の白髪なるをいふ。炭の白き灰

とされるを尉といふなり。日野の千兩棒。

江州日野の商人大分大あきなひをなす力ありて相應の貯蓄が出来ても猶棒あきなひをなすことをいへるにて千兩ためるまでいつぎあきなひをなすといふやうの意なり。

火のはたに小供を置くやう。

至てけんの人なる喻。

火箸を持つも手をやかぬ爲。

事を爲すは他に目的あるが爲なりとの義。

枇杷の棒でたゝかれると三年生さなひ。

俗説。

雲雀高く上れば天氣朗なり。

俗説。

枇杷を植ゑると貧乏する。

俗説。

隙の駒。

光陰の過ぎ易きを云ふ事。「諺草」史記魏豹傳。人生

一世間。如白駒過隙耳。索隱曰。莊子曰無異騏驎之馳過隙則謂馬也。小顏曰白駒謂日影也。隙壁隙也。以言速疾若日影過壁隙也。莊子知北遊篇如白駒過隙。文選劉孝標書。隙駒不留。李善曰。墨子人之生乎地上無幾何也譬之猶馳而過隙也。郗古隙字也。李周翰曰。隙穴也。馳馬馳而過穴喻速也。堀川百首「ひますぐる駒よりもときかげらふのいそしの春にあひにけるかな。」

火水になりて。

熱中して事に働くをいふ。

火水のたゝかひのやう。

争うて互に相容れざる喻。

牝雞之晨。「書經」武王曰古人有言曰牝雞無晨、牝雞之晨惟家之

備後表に高麗べり。

壘の上等品をいふ。

貧すれば鈍する。

貧乏すれば爲す事に失策の多く生ずるをいふ。智慧の



かみい、鬘る(ハチの部)を見るべし。貧すれば緞子の帯を賣るといふも鈍るといふより緞子の帯といひかけるなり。

貧すれば緞子の帯を賣り。

貧乏になれば大切の品物でも賣飛ばすといふ義。

貧僧のかさねどき。

喜悅の體にいふ。

貧賤の友忘るべからず。

漢の宋弘が光武に答ふる時引きし古語なり。さう糠の

妻は堂より下さず(ハチの部)参照すべし。

貧女の一燈長者の萬燈。

長者の万燈ハチの部の條を見るべし。

貧の盜

盜を爲すも、皆貧より起るといふ義。『潛夫論』禮義生

於富足、盜竊起於貧窮。『漢書』民貧則姦邪生。『論

語』小人窮則斯濫矣。やは貧から(ハチの部)といふ。

貧の盜戀の歌。

貧に迫られて盜を爲し、戀に迫られて歌を詠むに至

となり。前の諺及戀の歌(ハチの部)を参照すべし。

貧は世界の福の神。

貧は人を刺戟し、奮發せしめて、遂に幸福に至らしむ

となり。

貧は菩提の種、富は輪廻の絆。

樂は苦の種、苦は樂の種と云ふ意。貧者は現世にてよ

く勤むる故來世にて幸福あり。富者は金錢有るにまか

せて現世に罪を作るとより來世は苦を受くべしとの意。

貧は病より苦し。

『文選』遭顯遠感齋詩「富貴他人合、貧賤親戚離、」四百

四病の病より貧よりつらきものはない(ハチの部)の條を

見るべし。

貧乏柿に種多く貧者に子澤山。

進柿に貧乏柿といふ者がありて種多く、又人に在ては

貧者に子が多し故にいふ。

貧乏神に取つかる。

貧窮に陥るにいふ。

貧乏圖を取る。

不利益の事或は不運の事局に當るにいふ。

貧乏圖を引いた。

勘定に合はぬ事に當りたるにいふ。

貧乏子澤山。

貧家は富家に比すれば子を多く生む故にいふ。

貧乏寺の大籠子。

似つかざるにいふ。

貧乏人の系圖談。

愚痴の事。徒に昔の事を思ひ出すにいふ。

貧乏人の正月。

持ない(餅ない)といふ謎にて、持たずといふ義。

貧乏人の嫁入。

長持ないといふ謎、長く持たずとの義なり。

貧乏人灰播けば風が吹く。

窮乏者の益運拙きにいふ。灰をまくとは田に肥料とし

て施すなり。

貧乏は壯健の母。

貧乏なればよく働く故に壯健となるなり。

貧乏暇なし。

多忙にして餘暇なきにいふ。其日暮の貧乏人が生計に

忙がしきより出でたる語なり。

貧は諸道の妨。

貧者は何事をも防ぐとなり。

貧は世の常、人の常。

解に及ばず。

貧乏揺りをするといふ。

貧乏揺りをするに舉止莊重を缺く嫌あり故にいふ。

貧乏を質に置いていも買はう。

如何なる工面してなりとも、買はむとの義。

空腹時に不味物なし。

空腹の時は、粗食にても甚旨味ありとの義。『史記』秦

本紀「饑者甘三糲糠」。『屈錯が論』糞粟一文、饑之於食不

待三甘旨。

拍子木で鼻をかむ。

きちんとしたることいふ謎。



屏風は曲らねば立たぬ。

正直に過ぐれば、世に立ち難し、處世の要は、時に實事を曲ぐることもなかるべからずといふほどの喩。

駿馬にも驚といふ病のある如くに、後偉の人にも時に蹉跌あるをいふ。

甚だ衝衝を失したる喩。大金を辨償するに粗末なる少しの物品を渡すが加き類なり。

百貫の鷹も放さねば知れず。逸物の鷹も(イ)の部の條に出づ。

百貫ふらり。和漢故事要言「百貫ふらりといふは、世に云心は、役にも立たざる古器古畫を買ひ集めて娛む者の愚を笑ふ詞とす。云々」

百姓と灰俵はたゞくほど出る。農家に年貢を納めしむるに課してもく出すとなり。百姓の萬能。

農民が日用の便をたすに、他の事務とせる職人に代つて、自ら辨ずるものなり、故にいふ。

百尺竿頭一步を進む。

議論などに既に十分盡したる上に更に又歩を進むるをいふ。輕業師の百尺許の竹竿を真直に立て之を頂上まで攀ち上りて最早便るべきなき所を離れ又一步の足を進めて身を懸らざるを百尺の竿頭に歩を進むといへり。「五燈會元」景岑招賢偈「百尺竿頭不動人、雖然得入未爲真。百尺竿頭須進歩、十方世界是全身。」「書言故事」百尺竿頭進歩。言増添工夫、向上進歩。

百戰百勝は善の善なる者に非ず。

屢戦うて勝たば、必ず人を殺し、財を傷り、國に禍すること多きを以て、善の善なる者に非ずとなり。「孫子」謀攻篇「凡用兵之法。全國爲上。云々は故百戰百勝非善之善者也。不戰而屈人之兵。善之善者也。」

百足の蟲死に至るまで僵れず。助勢が多きものは、容易に亡びずとの義。「文選」曹元首の六代論に「語曰百足之蟲。至死不僵。扶之者衆也。此言雖小。可以譬大。」

百につんだは萬がまれ。

何事も不足の事ばかりといふ義。

百日咳に罹つたら 雞を畫いた額を鎮守に納めよ。俗説。

百日の説法屁一つ。

長く苦心し、經營しつゝ來れることを、一朝の過失によりて、無効に歸し去るをいふ。「唐語彙要」「一行有り失。百行俱傾。」

百日のたれツ子。

赤子百日ほどの間よく尿尿を漉らすをいふ。

百日の晴天にはあかねども一日の雨に飽く。

晴天は幾日つゞきても飽くことなく雨は一日にても厭き易しとなり。「田家五行」千日晴不厭。一日雨便厭。

百の口がぬけて居る。

癡呆のことをいふ。一貫の中に百不足するといふこと

「后山詩談」世以癡爲九百。謂其精神不充足也。

百聞は一見に如かず。

多く聞くよりは一見するが優るとの義。「漢書」趙充國傳「充國曰百聞不如一見。兵難險度。臣願馳至金城。圖上三方略。」「說苑」政理篇「夫耳聞之。不如目見之。目見之。不如足踐之。」

百も承知二百も合點。

十分知悉せりとの義。

百文で買った馬のやう。

價値のない喩。

百様を知るとも一様を争ふな。

百の事を知るとも、一事を強いて争ふなどの義。周王でも知らぬ事は劉蕡に問へり。

百里の道は九十里が半。

事の末一段の最緊要なるをいふ。「戰國策」行百里者半九十里。此言末路之難。

冷酒と親の異見。

冷酒を飲めば後に酔を催す如く、親の教訓も後に効あ



りとの義。冷酒と親の異見は後できくとついでにいふ。

氷炭相容れず。

性質の反対なるをいふ。「楚辭」不<sub>レ</sub>氷炭以可<sub>レ</sub>相並<sub>レ</sub>。

「韓非子」強弱不<sub>レ</sub>殺力、氷炭不<sub>レ</sub>合形。

比翼連理の契。

夫婦一生はなれぬといふ契。天に在ては比翼の鳥(テ

の部)に出づ。

冷水で手を焼く。

有り得べからざる事。

日和見の順慶。

首鼠兩端を持って形勢を觀望する者に喩ふ。筒井順慶

洞が峠に屯して、山崎合戦の勝敗を窺ひし故にいふ。

平蜘蛛のやう。

平身低頭の體。

晝雨降りて其の夜星を見るは又明る日雨降るをるし。

解に及ばず。

晝生る、子は父に似る、夜生る、子は母に似る。

「大戴禮」晝生者類父。夜生者類母。

晝顔の花を取ると雨が降る。

俗説。

晝狐のやう。

白けて見ゆるに喩ふ。

晝九夜八船六。

酒を盃に酌ぐに、晝は九分目にし、夜は八分目にし、船中にては六分目にすべしとなり。又晝九夜八船七馬

六ともいふ。船中馬上は動搖する故にかくいふ。

蛭に鹽。

勢のなくなりてしほくとなる喩。

晝には目あり、夜には耳あり。

秘密の事は洩れ易し、己れは人の知らざる如く思ふこと

とも、知らずくの間の人に知られ或は聞かるともの

なりとの義。能く獨を慎めとの教訓を含む。

蛭の瘡たづね。

わめりまはれど口も得ずはれずといふ謎。

晝は茅かれ夜は索なへ。

時に及んで能く勉むべしとの義。「孟子」勝文公問<sub>レ</sub>爲

國。孟子曰民事不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>緩也。時云。晝爾于茅。宵爾索

綯。丞其乘屋。其始播<sub>レ</sub>百穀。

廣原を竹箒でかくやう。

大簡略なる形容。

火を見れば火事と思へ。

事の未だ起らざる前に豫め用心せよといふ義。

ふ

夫子自道ふ。

「自分の事を自分で言つて居るのだとの義。「論語」子

曰君子道三、我無能<sub>レ</sub>焉、仁者不<sub>レ</sub>憂、知者不<sub>レ</sub>惑、勇者

不<sub>レ</sub>懼。子貢曰夫子自道也。」

風する馬牛も相及ばず。

遠く隔ち居ること、かけちがふこと、「左傳」僖公四年

蜉蝣の一期。

人世の果敢なき喩。蜉蝣は朝に生れて夕に死する短命

の虫なり。白樂天の時「長生無得者。舉世如<sub>レ</sub>蜉蝣。」

風聲鶴唳。

疑懼することなをいふ。又臆病なることをいふ。秦の

符堅晉を討ち謝玄の爲に破られ風聲鶴唳を聞いても皆

晋の師かと疑懼せりといふに出づ。

風前の燈。

今にも死するか亡ぶるかといふいと危き喩。風の前の

燈(カ)の部)の條に出づ。

風俗は政の田地。

政事を善くせんとするには先風俗を整へざるべからず

との義。「酸醜雜話」風俗は田地なり、政は穀種の如



そだちがたし。その如く善政良法といへども、風俗と  
とのはずしては行れがたし。穀種のそだん事を欲せ  
ば、地こしらへするにまくなはく、政令の行はれん事  
を欲せば風俗をよのふるにまくなはし。

夫婦喧嘩は犬も喰はぬ。

夫婦間の争は、概れ痴情に出で、痴情に收まるが常  
なれば、其仲裁をするは、極めて馬鹿馬鹿しくつまら  
ぬものなりとの義。犬も喰はぬとは至極つまらぬもの  
なりとのこと。

夫婦喧嘩は貧乏の種時。

夫婦の不和合は、一家の衰ふる基なりとの義。

夫婦は二世師は三世親子は一世。

「和漢故事要言」今の俗ひとへに佛者の語に泥みて、世  
々生々の世として、今生に命を盡し終りて、猶其の餘  
習盡きず、未來世に於て、又師弟となり、夫婦となる  
ことを得と思ひ、愛念を後生へかけ、執着を黄泉にひ  
く者あり。眞の大愚にして、一び撫掌絶倒せずんばあ  
るべからず。白梅園此解を述べて云、夫世の字は、古  
今聚會に始制切音勢にして、王者より姓を易、命を受

くるを、一世とし、又父子相代を一世とすといへり。  
然ときは父死して其嫡子の立つを云の字にて、悉しく  
いへば、嫡に相承の義あり。爰の心は、代の字の義を  
誤りたるが、代は度奈の切音違なり、世也、更也、替  
也、と訓みて、家を嗣ぐに他姓の子を以て、廢せんと  
する家を立つるをいふ。此故に代は葉也の訓あり、父  
母は人の天地也、一度生じて此身長ず、父母死して又  
父母なし、子たる者此身一度生じて天の命をざる壽算盡  
きざる内、又改め生れん事を欲すとも得べからず、此  
故を以て親子は只一世のみにして、又父母を改め掛け  
んといふこと能はず。夫婦の交を云ば、夫死して其妻  
再嫁がざるを貞節とすといへども、又改め嫁する例和  
漢最多し。妻死して再婚を爲すは、夫に於て耻とせず、  
猶事ありて生ながら妻を改むる者あり、此心を以て夫  
婦は二世と云也。(中略)師と弟との交も亦同じ云々」

夫婦は互の氣心。

夫婦は互の氣心にて圓滿なりとの意。

夫婦は尻をも嗅ぎ合ふ。

何事をも打明くるをいふ。

夫婦も元は他人。

夫婦といへども、もとは他人同士なり、他人なりとも  
親しく交らば、骨肉の親に優るべしとなり。

笛は思を口うつし。

笛は能く心中の情思を自由に表はすとの義。笛は口に  
あて、吹くもの故口うつしといふ。

深くなる程無分別。

情の深くなる程其の心の耽溺するをいふ。

不義の富貴は浮雲の如し。

論語の語より出づ「論語」述而篇「子曰飯疏食飲水曲  
レ肱而枕之。樂亦在其中矣。不義而富且貴於我如浮  
レ雲。」

不義は御家の御法度。

不義を許さぬ嚴重なる家庭をいふ。

河豚汁と五斗味噌の味を知らぬ者は江戸兒  
でない。

往時河豚汁の流行したる頃いひそめしなり。

覆水盆に返らず。

覆水盆に返らず。

福徳の三年目。

福徳に際會したるをいふ。  
河豚さげて井戸覗く子を叱る。

己れに非行を有しながら他の非行をとがむる喩。  
河豚の横飛をしたやう。

醜婦の形容。

河豚は食ひたし命は惜し。

情と理性との闘ありて、意は其何れかに決断を與へざ  
るべからざる場合をいふ。河豚は美味なれば食ひたけ  
れども、中毒の患ありとて、躊躇する義。「花陣綺語」  
「一時は利あることも、後に大害ありと知らば、止むる  
ことなどの譬にいふ」

膀胱を揉むとよしくになる。



俗説。袋の中で物どろろる。

極めて容易なることをいふ。

袋の中の鼠。

窮状をいふ。逃る、道なきこと。

袋耳。

一度きりて忘れざるをいふ。

袋をたなしとして黄金すつるな。

其之を包圍するものよろしからずとも其内容の美を捨

つべからずとの義。

鷓目大うても鼠ほど見えぬ。

容貌雄偉なれども、無學無能なれば臆短少なる人の

材能あるに如かずとの義。「淮南子」鷓目大而、視者不

知鼠。

河豚を食ふものは、身體より舌を愛す。

一時の豪興快樂を食らんが爲に一身一家を亡ぼすをも

顧みざる者に喩ふ。舌の上の旨味の爲に、河豚を食ひ

て、一命を失ふことある故にいふ。

吹けば飛ぶやう。

身體の孱弱なる者を形容す。又輕き身分の者にもいふ。

夫妻は輪廻の羈絆。

輪廻とは因果の關係車輪の廻りて始終なきが如きな

いふ。夫妻は此の輪廻の羈絆を脱する能はずとの義。

富士山の見える國へは美女が出来ぬ。

俗説。

富士に二言なし。

武士は然諾を尙せずとの義。

富士の山ほど願うて蟻封ほどかなふ。

蟻封ほど願うて針ほどかなふ(ホの部)に同じ、就きて見

るべし。又富士の山程願うて摺鉢ほど叶ふともいふ。

武士の命は義によりて輕し。

「本朝廿四孝」死を恐れて節を出てば、後の嘲家の耻

辱、武士の命は義によりて輕しと申す。

武士の子は櫛の音で眼をさまし、商人の子

は算盤の音で目を覺し、下司の子は茶碗の

音で目を覺す。

武士の子は其心武術に在り。商人の子は其心商業にあ

り。下司の子は其心食にありとの義。

武士の三忘。

家事を忘れ、妻子を忘れ、我身を忘るゝを、武士の三

忘といふ。「御所櫻川夜討」總じて武士の戰場へ赴く

時は、三忘と申して忘るゝ事三あり、國を出づる時家

を忘れ、境を出づる時妻子を忘れ、敵陣に臨んで我身

を忘るゝを、

富士の山を蟻がせらる。

微力なるものが大なる事を爲さんとする喩。

武士は相見たかひ。

武士は互に相共接すべし即同情心に宮むべしとの義。

武士は食はねど高楊枝。

苟も利を征るを耻とし、飢渴に迫るとも、卑劣の舉動

なく、能く其威容を保ちし武士氣質をいふ。「孟子」無

恒産而有恒心者惟士爲能。「荀子」士君子心不爲

貧窮二念乎道。武士は情を知る。

武士は同情の念厚しとの義。「ひらがな盛衰記」生とし

生ける物毎に、物の哀は知るもので、取わけ武士は情を

知る。不淨說法する法師は平茸に生る。

俗説。

無性者の一時ばたらき。

怠惰なる者が一時働くことありとも長くつらざるを

いふ。

無性者の節句働。

怠惰なる者が其勉むべき時に勉めずして休日など一般

の人の遊樂休息する際に却てはたらくないふ。西諺に

いふ「金曜日」に講ふものは日曜日泣く」

不自由を常と思へば不足なし。

不自由をも満足すべしとの義。

符節を合す如し。

ピツシヤリとよく合ふこと符節とは割印したる札な

り。昔時戦時に用ひたり。

布施ない經には袈裟落す。

報酬の少きには勤むること薄しとの義。「狂言記」布施



無經「惣じて布施無經には袈裟を落すと申すことがあ  
る。さらば愚僧も袈裟を落いたと申して布施物を取ら  
うと存ずる」

不足奉公は兩方の損。

奉公人に不平心あるは、奉公人主家雙方の不利益なり  
との義。

二つより事はなす。

何事も皆一の事がよければ、一の事が悪しきが、常に  
て、同時に雙美を兼ね得ること能はずとの義。

二つ返事で来る。

直に應じて来るとの義。  
豚に念佛、猫に經。

其甲斐なしとの義。牛の前に琴と同義なり。(ウの部參  
照)

豚の木登。

到底能はざる喩。豚は木に登ること能はざるなり。

嫩にして絶たざれば、斧を用ふるに至る。  
凡物事其起りし初期に早く之が處置を爲すに非ざれ

ば、滋養して後に困ること困難なりとの義。樹木を嫩  
芽の中に絶つば、極めて容易なれども、繁茂生長した  
る後には、斧を以て截るに非ざれば、容易に絶つこと  
能はず故に喩ふ。「左傳」不如早爲之所。無使滋  
蔓。蔓難圖也。蔓草猶不可除。

二股菜菔を持つて居ると狐に魅されぬ。  
俗説。

二目と見られぬ。

醜顔をいふ。又た非常に醜醜なる目に逢ひたる人を見  
る能はざるにも用ふ。

二人で火を吹くとき爺婆と言はねば仲が悪  
くなる。

俗説。

二人となす。

他に比すべき人無しとの義。

二人の君に事へ難し。

二心を持つ男には事へがたしとの義。  
二人前は働けぬ。

一人の身にて、二人前の働きはなり難しとの義。「品字  
箋」一身二人の役に充て難し。」

豚を盗んで骨を施すやう。

大なる悪事をなし、小なる慈善をするをいふ。  
淵川に蓋はならぬ。

人の投身することある故にいふ。投身することなしと  
は限られずとの義なり。

淵に雨。

物毎に折角と勵み動むといへども、畢竟其益なきをい  
ふ。例へば浪費者に少許の金錢を貸すとか恵むとかす  
るが如き類毫も其甲斐なきをいふ。「淵に鹽」ともい  
ふ。

扶持にさする。

人に恩を施して其をばなにかくるをいふ。

淵に鹽。

「淵に雨」の條に出づ。

淵に臨みて魚を羨むは退いて網を結ぶに如  
かず。

他の地位境遇を羨むよりは、自ら之を獲べき方法を講  
ずべしとの義。網なくて淵な臨みぞ(アの部)參照。

藤は樹に縁り人は君に縁る。

ふちかつらは、樹木に纏ひ付くによりて繁茂し、人は  
君恩によりて生くとの義。

淵は瀬と爲り、瀬は淵となる。

世の變遷無常なるをいふ。紀淑望古今集序云「淵變作  
瀬云々」歌に「よの中は何か常なるあすか川きのふの  
淵は今日の瀬となる」

藤を以て錦につぐ。

其きものへ其からぬものを添ふる喩。「萬葉集」十七大  
伴池主が大伴家持に答ふる歌の序に「忽尋芳音、輪苑  
凌雲、兼垂倭詩、詞林舒錦、以吟以詠、能國意緒、  
春可樂、暮春風景最可伶、(中略)不能默止、俗語云、  
以藤續錦、聊擬談笑耳、」

二日酔は迎酒すれば癒る。

宿醉は更に又飲すれば醒むるものなりとの義。

ふつくちらきに平字なし。



漢字の字音其韻尾にふつくちきと響くものは皆仄字なりとの義。

佛種は縁より起る。

「法華」方便品の偈「佛種從縁起」

佛前の供へものを食へば出世が出来ぬ。

佛前の供へものを食せざらしめん爲にいふ。

佛頂糞を着く。

ほとけの頬に糞を塗る(ホの部)に出づ。

降つて湧いたる災難。

突然災厄に罹るをいふ。

佛の箔を剃す。

佛像に金箔を以て塗り飾りたるが常なり、之れを剃き取るに亂暴陋劣の所業なり。

筆の先で飯を食ふ。

操觚者流の筆を以て生計を立つるをいふ。

普天の下率土の濱。

「詩經」北山篇「溥天之下莫非王土率土之濱莫非王臣」

懐と相談。

財布を検して金のあるか否か勘定して見る事。

不動の金縛り。

動かさることをいふ。眞言秘密の法にして、人を動かす能はざるやうにするなり。不動は不動尊ともいふ顔色尊にして右に降魔の剣といふを持ち、左に縛の繩といふを握り、背に火焰ある象を圖す。一切の鬼魅障惱を降伏すといふ。

太さには呑まれよ。

權勢あるものには屈服せよとの義。

船姿三里帆姿九里。

岸より洋中の船を眺むるに、岸を距ること三里許迄は、船體を認むを得べく、又九里許迄は、帆影を認むを得べし。

船の塵埃に酔うたやう。

俄に事の繁劇なるに逢ひ、其何より着手すべきか知らざるが如き、或は田舎者が都會の繁華なるに目眩し心驚くが如き事を喩へていふ。

船の念佛。

「和漢故事要言」命窮りたるを知るときは、日頃の驕る氣、食る心も失せて、哀慟の情一身に充るならひなれば、常に其放心を治め、著を退けて、日に善に勤ん事を思へとの心也。△莊子に云。莊子出で遊ぶ序に、道の傍なる車の轍の跡に溜りたる水の中に、一の小き鮒ありて莊子に云て云、我命を助けよと、莊子の云、まて汝斗升の水を乞て活きん事を願はんよりは、大なる河海の水こそましましならめ、吾今に西江の水を傾けつとして、汝を迎へん。それまでは先涸轍の水に息をすべしと教ふ。鮒の云、其西江の水を以て迎へんよりは、吾を枯魚の肆に活れ、吾命旦夕に過るを以て大なる欲なし。斗升の水早くして吾命を救ふこと速なり、と云ける。此語より出でたる世語にして、念佛の二字は後世の鄙俗の附會せし也。

船の水飲むやう。

あぶくするをいふ。苦しみ境遇に在ること。

船乗は板子三尺下地獄。

船に乗る業を操るものは、其生命實に危険なりとの義。

船底の板を隔て、下は、千仞不測の淵なり。故にいふ。船盗を陸で追ふ。

無功なるをいふ。苦しみ境遇に在ること。

船に懲りて興を忘む。

黒犬に咬まれるれば鍋の尻恐しに同じ。

船には水より火を懼る。

物は案外な所に畏るべきものあるをいふ。

船に櫓の無いやうなもの。

頼りなく心細きことの形容。船に櫓も權もなきときは舟中の人は頗る心細き思を爲すべし。或は船にといふを略して單に櫓の無いやうともいふ。

船は船頭は任せよ。

物事は、それく其業とする所の専門家に托すべしとの義。

船は帆で持つ、帆は風で持つ。

物事各自相待つて用を爲す喩。

歩の無い將基は負將基。

將基の語。



踏みつくる。

他人を輕蔑する義なり。踏みつくるとは足下にかける義にして、人を馬鹿にするをいふ。

踏みつけた所業。

他人を輕蔑したる所業をいふ。

文はやりたし書く手は持たず。

之を思ふこと切なれども違ふこと能はざる義。文官なる者が人に書を寄せんと欲すれども、己が無筆の爲に其思ふ所言はんと欲する所を、違ふ能はずして焦心することなをいふ。

不身持の儒者が、醫者の不養生をそしる。

己が非を顧みずして他人の非をそしるをいふ。

糞が出たが別が出ぬ。

分別のつかぬことをいふ。

分相應に風が吹く。

人の貴賤貧富それらの分際に従ひ應じて、世に處すること。即ち身分相應に世を渡り行くことをいふ。

文事有る者は必ず武備あり。

「史記」孔子世家「孔子攝相事曰、臣聞有文事者、必有武備。有武事者必有文備。」博覽古言「鶴と云ふものも能く聚るものなり、一道に違ふものは、必ず兼ぬる道あり、道異なりと云ふとも、理同じき故なり。」

紛失物のある時は狢犬の足括れ。正章獨吟「失物はうする時ぞと思ひとり。くるもほどく狢犬の足」

踏んだり蹴たり。非道の事をする上に非道を重ねる義。踏む所が窪む。

踏む所が窪む。慳吝なる者をいふ。慳吝なる者は慾に引かれて土を踏みて、他の街道なるは足になりともつけて歸らんとするほどのものなり。故に踏む所が窪むといふ。

積鼻禪を締めぬと陰莖が大きくなる。俗説。

積鼻禪締めてかゝれ。輕忽にするな用心して力を入れてとりかゝるべしとの義。

分分に風が吹く。

分相應に風が吹くに同じ。

分別の分の字が百貫する。

分別心の貴重なるをいふ。踏めば窪む。原因あれば必ず結果ありとの義。地を踏めば其踏みし所は窪むものなり。

不夜城の如し。

瓦斯燈電氣燈などの煌煌として夜尙晝の如き觀あるをいふ。花街の事。

冬編笠に夏頭巾。

物の顛倒したること。冬は頭巾を被り夏は編笠を戴くが常なり。それを反對にするは、即ち物事の顛倒したるをいふなり。或は曰く——は異風となすことにて世を捨てし様をいふなりと。

冬の雨が三日降れば猫の顔が三尺伸びる。

冬時雨降れば暖なるものなれば、三日降りつゞくときは猫が快適を感じるなり。(猫は寒を厭ふ動物なり) 冬の雨は三日降らず。

冬は三日間も雨の降りつゞくことなし。

冬吹雪の暴風あれば熊が捕獲る。

解に及ばず。農作の豐饒なる義。轉じて物の豐饒にして満足なるをいふ。油こぼすと稲に虫のつきたる時油を注ぎて殺す故に云ふ。

振られて歸る果報者。先方の好意ならざりしが却て身の爲の障礙なりとの義。遊廓に通ひて藝妓に振られて歸るものは却て幸福なりといふこと。

古い石塔。有るも無きも差支なしとの義。

古い墓の上にたまりし水にて疣を洗へば落つる。俗説。(病を落す禁厭)。

古い墓の花筒の水を飲ますれば瘡が癒ゆる。



俗説。

古家の造作するやう。

其根本を治めずして、一時の瀾縫策を施すを古き家の已に朽ちて楹も軒も破れ、壁亦崩れたるを修補せんとするに喩ふ。畢竟其效無しとの義。

古川に水絶えず。

盛なりし者が一朝衰ふことありとも、猶其精力の存するを、古き川の流域は變じても、全く水の枯渴することなきに喩ふ。例へば富家の破産すれども、猶幾分の資財を遺す類なり。

故きを尋ねて新しきを知る。

舊知識の素ありて新知識を得との義なり。「論語」温故而知新可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>師矣。」

古釘箱の中で鹿角菜が喧嘩をするやう。

拙なる字の形容。

富妻那の辯舌、舍利弗の智慧。

フルナは辯舌に巧にしてシヤリフツは智ありし人なり。辯才あり、智力あるをいふ。

古船の造作。

古家の造作するやうを見るべし。

風呂敷を擴げる。

誇大の言を爲すをいふ。又取締る所なく爲し擴げる所行をいふ。



平氣の平左衛門。

無頓着にして何とも感ぜざるをいふ。例へば怒るべくして怒らず、悲しむべくして悲しまず、耻づべくして恥ぢざるが如き類なり。

平氣を粧ふ。

氣に落付かざる所ありとも、表面に無頓着なる如くに爲すをいふ。

平家を滅ぼす者は平家。

自己を害する者は、自己なりとの義。平家が自ら亡滅の因を作りて終に亡滅を招きたる故にいふ。

平地に風波を起す。

無事なる所に事を起して、平和を擾亂するをいふ。

平仄が合はぬ。

辻褄合はず(ツ)の部に同じ。「世事百談」四聲に平仄といへるは上下の平聲を平といひ、上去入を總て仄といふ事は、宋の沈約始造四聲調上去入爲仄聲と古今韻會に見えたり。平仄の名、宋まに始れり云々詩を作るに五言七言共に平仄字配置の一定の規則あり(二四不同二六對の條參照)其平仄の則に合はぬは、調子の外れたるなり。故に物の前後次第に合はざることを斯くいふ。

瓢箪から駒が出る。

思ひもよらざる所より、思ひもよらざるもの、出づるをいふ。又滑稽より事實となり或は冗談にいひし事から事實となりて争論を生ずるをいふ。「小町踊」へうたんを出たる炭や黒の駒「下養狂歌集」浮き浮きたる人のやどには瓢箪から駒も馴け出る。「鹽尻」瓢より駒を出す繪有り、是は即月江録張果老踏破胡盧といふと又張果が紙を以て鹽馬とせしとを取合せて描けるに

瓢箪で餘押へる。

要領を得ざる義。其言の曖昧模糊として捕捉すべからざるをいふ。又物の外ること、及び勢して功なく到底其目的を達し難きをいふ。「瓦礫雜考」此語はもと禪家などに起りしこと、や、足利義滿公の頃より専らいひ弘めしやう(中略)相國寺如拙といへる僧、この圖を作れり。其序詞云、大相公俾<sub>レ</sub>如拙畫<sub>レ</sub>新樓於坐右小屏之間とあり、大相公とは足利義滿なり。」

瓢箪にかるみをかくるやう。

頗る輕き形容。瓢箪は元來輕きものなり、之れに輕みなかくれば更に輕し。

瓢箪の川流。

浮きに浮くといふ喩。

瓢箪を括つたやう。

帯をたく締めたる形容。

瓢箪を持つて居ると轉ばぬ。

俗説。



可べくの字じ。

下に置かず上げ用ひらるゝとの義。

へげ猫ねこのやう。

人の垢染汚れたる形容。

臍へそが西國さいこくする。

甚しく笑ふをいふ。

臍へそくり金かね。

婦人の私に貯へて、少時も身を離さず持つ所の金ないふ。

臍へそで茶ちやを沸わかかす。

甚しく笑ふをいふ。可笑しきに堪へざること。

臍へその垢あかを取ると力ちからが失なくなる。

俗説。

臍へその垢あかを取ると腹はらが痛いたむ。

俗説。

臍へその緒なまき切つて初はじめて。

生れ來りて初めてといふ義。人生るれば直に臍の緒を切るものなり。

臍へそを噬かむ。

ほぞを噬む(ほぞ部)の條に出づ。

臍へそを撚よる。

甚しく笑ふこと。

下手た碁ごに徒目だめなし。

圍碁の語。

下手た將碁しょうご王わうより飛車ひしやを大事だいじがり。

將碁の語(川柳の句)

下手たとはいはれ扇あふぎは破やぶれる。

舞の下手なるを罵られたる上扇は破れたりとの義。

下手たな商法しょうぼうするより冬田ふゆたへ水みづかけろ。

用意ある農夫は冬田を鋤くなり。

下手たな鍛冶かぢ匠じやうも一度ひとたびは名劔めいけん。

下手と雖ども時に人を驚かすやうの伎倆を顯はすないう。

下手たの射やる矢や。

其の矢先さが定まらずといふこと。

下手たの考かんが休やすむに似にたり。

碁將碁に能くいふ語なり。不能の者何ほど考へても名案の出でざるをいふ。

下手たの大工だいこう指ゆびを切きる。

不能の者事を成す能はず却て害を招く喻。手きり、まら出し、道具探しと云ふ事あり、何れも大工の弟子の親方に叱らるゝなり。

下手たの鐵砲てつぱうも數回かずかい發はつちや中あたる。

拙き技も、數回之を重ねて爲せば、上手となるとの義。

凡何事にても、度重ねて之を爲せば、功を奏することありとの義。

下手たの道具だうぐ立たて。

拙き者の事を計画するをいふ。

下手たの永放ながはな置おき百目ひやくもくの損そん。

圍碁の語。

下手たの長談ながだん議ぎ。

談話に拙き者の話、自然冗長に渉るをいふ。下手の長談議高座の妨ともいふ。「狂言記」布施無經「是さへ御

合點が參れば別に申す事も御座らぬ下手の長談議と申す事がござる先今日は是迄に致しませう。」

下手たの中飛車なかひしや角かくの取替とりかへ。

將碁の語。

下手たの庖丁ばうてい百遍ひやくべんあらへ。

魚を料理するには、數遍あらふほど、味美なりといふ。

下手たの的まとは外はずれる。

拙き者の爲す事は、功を奏せずとの義。弓を射るに拙き者は的を射ること能はず。

下手たは上手じやうずの飾物かざりもの。

「老干」不善人者。善人之資。諺の意同じ。

下手たも眞星まことほし。

拙技の者の見事に功を奏するをいふ。射事の譬より出づ。

絲瓜へちまの皮かわとも思おもはぬ。

毫も意に介せざるをいふ。

窻へつまの上うへへ刃物はものを載のせると怪我けがをする。

俗説。(迷信)



屁の三徳は第一氣がすいてよし腹が空つてよし唇の塵がとれてよし。

解に及ばず。蛇木に上れば雨降る。

蛇の上るを見れば出世する。

俗説。蛇を見れば睡く蝶を見れば睡くなし。

俗説。蛇竹に登り蜈蚣地に轉ぶ。

足なき蛇は滑なる竹を上り、足多き百足も時として轉ぶ事ありとの意。

屁放つて尻をすぼめる。事を爲して後悔する義なり。爲すべからざることを爲して、後に彼是編綴する喻。

屁一放は薬千服に當る。

放屁の氣を爽にするに、薬を服するより勝るとの義。蛇七曲するも、我身曲ると思はず。

我身の曲事に氣付かざるをいふ。蛇に足無し魚に耳無し。

「淮南子」兔絲無根而生。蛇無足而行。魚無耳而聽。蟬無口而鳴。

蛇に道を横ぎられたときは三步退け。

俗説。蛇の穴へ女が小便すると見込まる。

俗説。蛇の生殺のやう。

殺しませず助けませず人を困しむるをいふ。蛇の太さ長さを指て真似たら吹いて置かぬと腐る。

俗説。蛇を指しすると指が腐る。

俗説。辨慶心。

女色に耽らざるをいふ。辨慶は一生涯一度婦人と肉を交へたるのみなりとの俗説あり。

辨慶の立往生。

辨慶が奥州衣川にて立ちたるまゝ死せしといふより起りし語にて、立ちしまゝ遂に何の爲す所もなきをいふ。

辨慶の泣き所。

中指の最高關節より、先の方をいふ。これは食指と薬指とを直立せしめたる間に、中指を挿みて、之を中間節より風めて、最高關節より先の所を動かさるゝときは、辨慶の如き大勇力といへども、風從せしめられざるはなき故にいふ。是より轉じて人の前に風從する者をいふ。叩頭平身の體にいふ。辯舌水の流るゝが如し。

能辯者の形容。「諺草」是は晋郭象が故事より出でたる事なり。晋書列傳二十郭象字子玄。少有才理。好老莊。能清言。大尉王衍每云。聽象語。如懸河瀉水。注而不竭。謙らず口。

謙退せずして虚言を吐くことをいふ。へらぬ者なら金百兩死なぬ者なら子一人。金を費消しても減ることなきものならば、金は百兩あ

ほ

奉公人根性。

職務を奉ずること誠實ならず、表面働く態して、私に横着を働くをいふ。

奉公は仕勝恩は取勝。

奉公は仕たものが勝り、恩は受けたる者が勝つとの事。棒に振る。

物を無くする義にして、空しく費すことをいふ。「精遊笑覽」大路を何にても持ちありきて、賣るをふり賣といふ。見聞集に、街道を眺め居りしに、ふり賣とて萬の物を賣らんと呼はる。賣れば物が無くなるなり、棒にふるとはふり賣の事より出でし。



法は江河の如し。

法令を布くは、成るべく寛大にして、煩苛を避くべし  
の義。「駿遷雑話」天下の法は寛大にして江河の如く成  
べし、瑣細にして溝渠のごとくなるべからず。江河は  
大にしていちじるしければ、よけやすし、まかも深廣  
にしてあなどりがたき故に、犯しがたし。溝渠は小さ  
くしてまげれば、よけがたし、まかも淺狹にして近  
づき易き故に犯し易し。さるによりて昔より江河を踏  
あやまりて、はまるものあるなきがず。溝渠にはや  
もすればはまるもの多し。こゝをもて後漢の耶頭が安  
帝に上る書に王者の法は江河の如し。易避して難犯  
といへり古今不易の名言といふべし。

猶其群を離れずとの義。

ぼう—眉毛に薄化粧。

棒ほど願うて針程かなふ。

其希望する所の大きくして、其成し遂ぐる所の小なる  
をいふ。(志願する所大にして、成就する所の小なるこ

帆裏を打つた。

物事の案に相違したるをいふ。風が變つて帆の裏を打  
ち返すに喩ふ。

棒をくはする。

他に痛快なる打撃を與ふことをいふ。「臨濟錄」如今  
更思一頓棒喫「無門關」來無門處。喫「痛棒」  
棒を呑んだやう。

立すくまりのことなり。

外には富貴の物語、内には脛より火を出す。

其貧なくして徒に外見を張るをいふ。他に向つては己  
の富貴なる如く語れども、其實貧乏甚しきなりとの義。

菩薩實て俯き人間實て仰ぐ。

五穀熟する時は、其穗を垂れて下に俯す。人は少しく  
學問をし、又富むときは傲り高ぶり仰ぐといふことな  
り。菩薩とは俗に五穀のことをいふ。菩薩實が入れば  
俯き人間かがいれば仰ぐともいふ。

干大根に湯をかけたやう。

ふゆることをいふ。乾大根に湯を灌げば非常に殖ゆる  
ものなり故に喩とす。

星に起き月に臥す。

朝早く起き、夜遅く寝ることをいふ。

星の自分の方向に飛ぶを見たら幸あり。

俗説。

星の飛ぶとき願事すれば必ず協ふ。

俗説。

星の光ピカ〜として定らざるは明る日風

吹くまゝし。

解に及ばず。

星ピカ〜として其色白きやうに見ゆるは

風吹くまゝし。

解に及ばず。

星を戴きて出づ。

朝早く起きて家を出て樂に務むるをいふ。「呂氏春秋」  
「宓子賤治單父。彈琴鳴琴。身不下堂。而單父治。巫馬期  
以星出。以星入。日夜不居。以身親之。而單父治。」  
細い煙も立ちかぬる。

寒貧甚しきをいふ。

細い煙を立つる。

貧困の生計を爲すをいふ。

細うても樫の木。

形小さけれども品質の勝れたる喩。樫の木は細き者と  
いへども頗る堅し。

臍を噬む。

「諺草」物の及ばぬ事に喩ふ。後悔するをいふ。左傳莊  
公六年云若不早圖。後君噬臍。杜注若噬臍。腹齊。喻不  
可及也。

細帯の女房萬事縮りなし。

川柳の句より出づ。細帯のまゝにて正しくチャンと帯  
を結ばざる位の婦人は、萬事につけて取縮りなく放  
漫なりとの義。

菩提の種をまく。

佛道に覺り入る因を作るとの義。菩提とは梵語なり、  
道と譯して、道の至極なる正道をいふ。又覺と譯して  
悟得する正覺をいふ。

牡丹の睡猫。



「夏山雜談」牡丹の睡猫といふ諺あり、猫は性のひがみたるものにて、佞人に譬へたるなり。是を飼ひて愛するは多くは女人なり、同氣相求むる故なり。」

牡丹餅棚から落ちて来ず。  
自ら勞して自ら働くに非ざれば、之を得ること難しとの義なり。安逸にして事を遂ぐる能はざる喻。

牡丹餅棚に在り。  
其方法だに講ずれば、求むる所の者眼前に在りて、之を得らるべしとの義。

牡丹餅で頬をたゝかれるやう。  
美味といふことの謎なり。(往時は牡丹餅を美味としたるなり) 心持のよい事の形容。又幸なる出来事に逢ひしなふ。

法華勸めるほどすゝめても。

法華宗は傳道に最も熱心なり。如何ほど勸めてもといふ義。

法華佛になるならば牛の糞が味噌になる。

他宗法華宗をそしる語。

法華骨なし。

法華を罵る語。

法華佛になるなら道の傍の犬の糞が肥料になる。

他宗法華宗をそしる語。

北國の雷。

きたなり(北鳴)といふ謎。衣を着たまゝ、或は來りしまゝ等の事なふ。

北國日和。

定めなきことに喩ふ。北國邊は天氣不定なるが故にまゝいふなり。

法燈執。

物の頭をする者なふ。佛法を燈に喩へて佛法の棟梁をさして法燈といふより出づ。「徒然草」宗の法燈なれば寺中にも重く思はれたり」發頭人の事。

ぼつ／＼三年波八年。

齒工の語。點、昔、波の描きかたなふ。

布袋竹の杖をつくといふ／＼になる。

俗説。

布袋さんのやう。

腹の膨れたるなふ。

佛頼んで地獄へ落つるやう。

善き人に依頼し、善き結果を得んと欲して、却て惡結

果を得たるなふ。

佛頼めば極樂世界へ參る。

佛に歸依すれば、極樂に往生を遂ぐとなり。

佛造りて魂入れぬやう。

經營すべきこと、一應は爲し了りたれども、緊要なる

最上一點の工夫を缺けるなふ。(佛造りて眼を入れ

ずしといふ)

佛造りて眼を入れず。

折角事を營みながら今一ツといふ肝腎の所を遺したるなふ。佛像を刻み、或は畫くとも、眼を入れざれば之を尊敬する念も起らず。「續傳燈錄」江州東林尼菴道願禪師潁川人。族鮮于氏。久參圓悟。微有省發。泊二悟還蜀。囑依妙喜。仍以拈致喜曰。顔用彩繪已畢。但缺點眼二耳」

佛になつても苦は色かゆる。

如何なる人にも、憂苦の爲には、自然風托して顔色を變ずとの義。

佛になるも沙彌を經る。

上位に達するも、追々と下より進み行く者なりとの喩。

沙彌を經て、佛となるとの義。

佛の顔も三度。

之を犯すこと三回にも至れば、如何なる溫柔なる人も途には怒るとの喩。佛は慈悲深き者なれども、數回も之を干せば怒せざるべしとなり。「禮記」卜筮不過三ノ。

佛の光より金の光。

錢は阿彌陀程光る。宗教上の信仰より金錢を重しとする義。

佛の椀。

かなはぬといふ謎。佛の椀は金椀なり。かなはんといふに通はせたるなり。

佛の眞似はすれども長者の眞似は出来ぬ。







煩惱の犬追へども去らず。

煩惱を制しがたきをいふ。「諺草」大論云煩惱者。能令心煩作惱。故名煩惱。又曰屬煩惱。賦屬。疑是名煩惱。姪。煩惱皆心の惱をなす。故に煩惱と云。俗にたゞ姪の事のみを煩惱と心得ぬるはあし。又下段の詞に怒垢煩惱と云つゞく。法華經諸苦所因貪慾爲本。又曰衆生垢重。是等によりて見れば擲なき詞にあらず。「煩惱の犬は打つとも門を去らず。」

煩惱は除きがたしとの義。「塵埃波」「煩惱の道は思ひきりがたし。天となりても門にしのばむ。」

煩惱が常に人の頭にまつはりつきて離れがたきをいふ。「増鏡」「煩惱はくびにのるさつづきは花にのる。」

盆の十六日は地獄の釜の蓋も開く。  
蔵入りの日にて宿下り子のくつろぎて喜ぶ日なるを以ていふ。  
凡そ人間の一時勢の盛なる時には神明もたゐることなしとの義。一時勢威を遠くするをいふ。

盆三日は媳と姑の中がよくなる。

盆の三日は樂を休みて家内平和なるをいふ。  
盆も正月も一度で。  
上を下へと混雜するをいふ。  
盆を戴きて天を望む。  
物事一時に兩ながら兼ね施すことの難き喻。盆を頂くときは天を仰ぎ視る能はず。強いて天を視んとすれば、盆は地に墜つるなり。「漢書」司馬遷傳「僕以爲戴盆何以望天。」

ほむる子の夜糞。  
あまり稱賛せらるれば、あまへて醜態を現はすと云ふ意。

譽むるは毀ると思へ。  
没に人をほめ立つるものは、必ず亦毀るものぞとの義。

譽むるは毀る基。  
「諺草」「莊子曰。好而譽人者。亦好背毀之。吉田兼好がつれく草にほまれは又そしりの本なり。身の後の名残りて更に益なしとかけり。」

譽める子の寢糞。

世人の譽りて讃稱する者にも、時に醜を流すやうのとあるにいふ。

譽める人には油断すな。

面り我をほめむる者には用心すべしとの義。  
吠ゆる犬はうたる。

沈黙を守らざれば殃に逢ふをいふ。  
法螺を吹く。

虚言を吐き、徒に夸大の言を爲すをいふ。  
惚れた病に薬なし。

戀の病に薬なし。(ユの部の條参照)但歌は「お醫者さんでも有馬の湯でもほれたやまひは直りやせぬ。」とあり。

惚れた慾目で美しく見える。  
解に及ばず。

惚れて通へば千里も一里。

逢はず戻れば又千里と云ふ但語の前の句なり。  
惚れられたが因果。  
解に及ばず。

襪褌が出る。

醜事汚行など缺點の顯はれ出づること。  
襪褌買。

醜婦を厭はずして懇懇を通ずる人の綽號。  
法論味噌の夕立。

役にたゝぬことをいふ。  
母衣武者の夕立。

役にたゝぬことをいふ。

ま

賣主坊。

もと僧の偽詐卑陋なる者の稱なりしが、漸々轉じて人の二面兩舌信なき者をいふに至れり。

蝸牛も一軒の主。

小なりとも一家の主は、主たるだけの權威勢力を有すといふこと。蝸牛に至る所に家を預ひ行くより云ふ。  
盲龜の浮木。



うき木の龜(う)の部に 出づ。  
儲けの前の胸算用。

預め将来の利益を計算して、空想を描くを云ふ。  
まかする米はかめぬ。

委任するときは、責任を重むじて、其の付托に負くに  
忍びずとの義

曲つた釜には曲つたこしき。  
こしきとは物を蒸す時に用ふる槽なり。釜の口と形及  
び寸法を一にせざれば用をなさず。悪しき者には悪し  
き者の配する喩。

曲つた釣針。  
人を奸計に陥れんとする心の曲れるものをいふ。「川中  
島合戦」人々を欺す偽り表裏、今日の振舞に願はれ本心  
曲つた釣針につらるゝ勘介ではおぢやらしませぬわい  
の。」

蒔かぬ種子は生えぬ。  
其原因なければ、其結果なしといふことにて、凡物事  
先其種子を蒔き置くにあらざれば、後に結果を吹むる  
こと能はずとの義。「法苑珠林」祭祠驚愕「四海大地内  
及以一切處。何有不下種而獲果實者。」

枕を砕く。  
思案に暮るゝことないふ。

枕を高くして臥す。  
無事安穩にして、氣にひいることなきをいふ。安心し  
て居ることなり。「史記」張儀傳「張儀説龍王曰。爲  
大王計。莫如事秦。事秦則楚韓必不致助。無  
楚韓之患則大王高枕而臥。國必無憂。」

枕を投ぐると頭痛持になる。  
俗説。枕の取扱を疎略にせざらしめんが爲にいふ。

負けて勝つ。  
勝たずして負けるが、結局却て勝となるといふ義。敗  
けるものは勝つともいふ。

負賭博のしこりうち。  
負け口になれる博奕打は、少しづゝの金を出して、恐  
ろく、打つとなり。しこるとは緊り凝る事なり。故に  
終に勝口来るも前に負けたるを恢復する能はざる也。

負け惜みが強し。  
負くるを惜むことの非常に強きをいふ。

負け惜みのへらず口。  
負けるを惜むこと、非常に強きをいふ。

曲らねば世に立たず。

我身を曲げて世に従ひ、俗にそむかぬやうにするに非  
ざれば、世に處し難しとの意。「老子」曲則全「世説」  
「王夷甫。如屏風。屈曲從俗。能敵風塵。」家隆卿の  
歌に「まかりとて直き心も世にた、ずまじる逢のあさ  
ましの世や」「山居四要」「如直絃者。死於近邊。如  
曲鉤者。得封侯。」

曲れる枝には曲れる影あり。  
悪しき事には悪しき結果の伴ふことないふ。

薪が吹くのは荒神の喜ぶまゝ。  
俗説。(迷信)

薪の火が吹くのは客の来るしるし。  
俗説。

捲くより延せ。  
阿波海船人の諺。帆をまくより、帆足を延せとの義。

消極主義より積極主義の可なるをいへる也。  
枕草紙の殿様のやう。

男のみよろしくてのるりとしたる何の能もなき者をい  
ふなり。

買けたるに負けずと言ひ張るやうの者は、却てへらず  
口ないふとの義。へらず口(への部)の條参照。又負け  
惜みないふともいふ。

誠は寶の集りどころ。  
「正直の頭に神宿る」(シの部)を見るべし。

馬士にも衣裳。  
駄馬を牽きて、荷を送るを業とする、馬夫の如き者なり  
とも、衣裳を飾れば立派に見ゆとなり。如何なる人に  
ても衣裳を飾れば人柄が立派に見ゆるなり。

馬士の喧嘩。  
「伊達染分手綱」誠は馬士の喧嘩とて、馬の踏み合ふ  
如くなり。

孫を可愛がるより犬を可愛がれ。  
孫の成人する頃は、已に物故するが常にて、之より直  
接に養育の恩を報いらるゝことなし。されば三日養ひ  
てすら其恩を記すといふ犬を愛養するが却て優るとの  
義。

麻姑を雇ひて痒處搔くが如し。  
意の思ふ通りにゆきて毫も遺憾なき義。心持のよき、

麻姑を雇ひて痒處搔くが如し。

意の思ふ通りにゆきて毫も遺憾なき義。心持のよき、

意の思ふ通りにゆきて毫も遺憾なき義。心持のよき、

意の思ふ通りにゆきて毫も遺憾なき義。心持のよき、

意の思ふ通りにゆきて毫も遺憾なき義。心持のよき、

意の思ふ通りにゆきて毫も遺憾なき義。心持のよき、

意の思ふ通りにゆきて毫も遺憾なき義。心持のよき、

意の思ふ通りにゆきて毫も遺憾なき義。心持のよき、

意の思ふ通りにゆきて毫も遺憾なき義。心持のよき、



と。麻姑は麻姑の手（木を刻み人の手の如くして背の痒きを掻く器なり）をいふ。列仙傳に、方平と云ふ者の妹に、麻姑といふ仙人あり。其の手鳥の爪に似たり。蔡經といふ者、私に念ふは、背の痒きとき、麻姑が爪にて掻きたらんには、佳ならんと。方平即知て、蔡經が背を鞭て曰く、麻姑は仙人なり、汝其爪にて背の痒きを掻くべしと謂はんやと、是れ麻姑の手の本づく所なり、杜牧之詩「杜詩韓集然來讀。似備麻姑一癢所抓。」

正宗も焼落つれば釘の價

真工の作といへども、其製拙く品質悪しければ、其價値を失ふとのことにて、凡そ物其の質あしくなりたるは、其の價なしとの義なり。

榊で量りて箕でこぼす。

少しく収めて、多く支出する喻。

榊の底をたぐくと鬼が来る。

俗説。

榊の底をたぐけば迷子が見つかる。

俗説。

又藏屁をたる。

平素温順にして、無能なる者が、意外の所行あるをいふ。又藏とはまたさ男の約りたるを固有名詞の如くいひなせるならむ。

またいは阿房の唐名。

溫柔なる人と評せらるゝ位のは、愚物なりとの義。股にかける。

四方に奔走する事。

またるゝともまづ身になるな。

待つはつらきもの故いふ。

間違は多く酒より起る。

酒は人の氣を狂はしむるよりいふ。

間違へて鐵瓶の後をつぐと坊主客が来る。

俗説。

間違へて吹竹を倒さまに吹くと客が来る。

俗説。

抹香なめた閻魔のやう。

誰面をいふ、即ち不愛想なる顔付のこと、閻魔は不愛想なる顔付なり、抹香を甜むるとは不愛想を甚しく言

松木柱も三年。

はんが爲なり。物の早晚衰ふることをいふ。松木柱も三年は朽ちずして、持ちこたゆべしとなり。

松の木に蟬。

大なる者に小さき者の對したる喻。

松は一寸にして棟梁の性あり。

せんだんは二葉ふり香し。（その部）といふが如し。後偉材幹あるもの幼時より、彩を放つといふ義なり。

待つ人の來るは蜘蛛の舉動にて知らるゝ。

衣通姫の允恭帝を待つ歌に、吾がせこの來べき背なりさゝがにのくものおこなひこよひしるしも」といふに出づ。

松へ雪がかゝると七度ふる。

俗説。

待つ身に辛き置炬燵。

人に置き去られて待ち居ることの心づらきをいふ。

待つ身は長いもの。

待ち居る間は、時の長きを覺ゆとなり。

待つ身より待たるゝ身。

人を待つはつらけれど、人に待たるゝは、尙つらきものなりとの義。

祭の延びた六月の晦日。

「假名手本忠臣蔵」主従顔を見合せて氣わけのやうにきよろりツと祭の延びた六月の晦日見るが如くにて手持ぶさたに見えにけり。」

祭の渡つた後のやう。

喧嘩なりし後、急に静寂となりし形容。祭より前の日。

物事成就しての樂よりは將に成就せんとする前の樂が却つて深しとの義。祭日の前日は祭日の日より樂み多し。即ち希望の樂多きをいふなり。

待てど暮せど。

長い間待ち居れどもとの意。

待てば甘露の日和あり。（待てば甘露の食を得る。）

時節を待てば柿の種といふ如く、時節の來るを待てば、自ら天より甘露の降り來るが如き良き事に出逢ふ日も



ありとなり。又「待ては海路の日和あり」ともいふ。「維摩經」甘露法之食什曰、諸天以三種々名藥、著海中。以寶山摩之。令成甘露。食之得仙。名不死藥。的なきに矢を放つ。

無鐵砲なる事をなすをいふ。所謂正嶋を得たるの射た。

言能く其事をいひ當てたるをいふ。所謂正嶋を得たる義なり。的を外した。

的を射たといふに反對の義なり。狙板に鯉。

次の語に同じ。狙板の魚。

袋の風に同じ。眼は天をはしる。

達人の眼識世相人事を大觀すること。天に目ありて地上の事を見下すやうなりとの義。前齒の離れて居る者は親不孝。

俗説。

間夫は苦界の愛晴し。

人の妾となりたるもの、或は藝妓などの、間夫と情を通じて、樂となすをいふ。

繼子待遇。

一方へ親しくするに反し、他の一方に疎なる待遇なすことをいふ。世の繼母、吾が子に親しくし、繼子に疎なるよりいふ。

繼子根性。

心のひがみたるをいふ。繼子は繼母に苛められて心ひがみが常なり故にいふ。

隨意にならぬが浮世の習。

人事意の如くならざるが、世の常なりとの義。

繼母と牛殺の木に良く伸びたるはなし。

繼母は繼子に對して心曲りたる者にて、牛殺の木に亦良く伸びたるものなし。故にかくいふ。

隨意よさんと笠よこちよにかぶれ。

どんな風體になるも可なりとの意。

慢心鼻をはぢかる。

自慢する者却て他に耻かしめらるゝをいふ。「犬子集」まんじはや風にほぢかるゝはなのさき(花と鼻とを通はせたるなり)

蝮指で押へると瘡が治る。

俗説。

蝮指の者に灸を据えられると熱い。

萬卒は得易く一將は得難し。

俗説。

萬將の得難きをいふ。まんたひやかし菰かぶり。

未詳。萬年も馴んだ子狗のやう、

深く寵愛するをいふ。萬能足りて一心足らず。

萬藝に通じたれども、何れも上達する所なしとの義。又藝能多けれども己が一心を知らずして、身を修むる能はざる者を罵りていふ。「顔氏家訓」省事篇「古人云多爲小善。不知熟一。颯風五能不成伎術。」古歌「枝葉よりとかく心の根が大事萬能よりも一心を知れ。」

満は損を招き謙は益を招く。

「書經」大禹謨「滿招損。謙受益。時乃天之道。」みつればかく(ミの部)に同じ。

豆を植ゑて稗。

好結果を得んとて經營したる事が、意外の不結果なるを云ふ。

守人に隙があるも、盗人に隙なし。

盗人の暇はあれども守り手の暇がない。(メの部)を見るべし。

眉痒ければ思ふ人を見る。

眉の痒きは戀人の來るしるしの條を見るべし。

眉毛に火が付くやう。

火急なること。

眉毛をよめる。

心中を洞見せらるること。

眉毛をよむ。

心中を洞見すること。

眉に唾を塗れ。



欺かれぬやうに用心せよといふ義、眉に唾塗れば狐にばかされぬといふ俗説よりいふ。狐に出逢ふたら眉に唾ぬれ(キの部)参照。

眉の痒きは戀人來るしるし。

俗説。「萬葉集」「めづらしき君を見んとぞ左手の弓とる方へ眉根がきつれ」

迷はんよりは問へ。

疑惑することあらば、徒に考へて迷はむよりは迷に問ふて之を知るべしとなり。

鞆を蹴るより易し。

容易なる事。

圓い卵も切りやうで四角。

ものも言ひやうでがどが立つといふ對句なり。

圓い物は轉び易し。

人心の餘り圓滿に過ぐるは、事を失敗する恐あり、多少圭角なかるべからずとの意なり。

丸くとも一かどあれや人心。

人の心は圓滿なる中にきまりあるべきをいふ。

圓益へ目鼻をつけたやう。

圓き顔の形容。眞綿で首をしめるやう。

婉曲に人を責め苦しむる義。眞綿に針を包む。

心中に險を藏しながら、表面には、如何にも温厚柔和にして、善人らしく見せかけるをいふなり。

眞綿の轆鼻禪を締める。

事業を營みて、非常に大利を得ることをいふ。

參る所の多きに山上參り、食物の多きに河豚汁。

常軌を外れて奇行を爲す喻。山上とは、大和の大峰山のもとに役の行者の開きし所なり。山上參りするものは、絶壁を攀ち上りて、非常の險を凌がざるべからず。

河豚汁を食ふものは中毒の患あり。他に參詣所多きに山上參りを爲し、食物多きに河豚汁を吸ふが如きは、常軌を脱したることなり。

姦通代七兩二分。

往時姦通したるものは、七兩二分出して謝罪したるなりといふ。

姦通を知らぬは亭主ばかり。

有夫の女姦通を爲して、其近隣誰一人之れを知らざるものなきに、獨り其夫たるもののみ之れを知らずとの義。

み

身われれば命あり。

現身の存在する限りは、生命ありとのことをいふ。木伊乃とりが木伊乃となる。

遊所などに入りびたれる者を、伴れ歸らしめんとて遣れば、其者も共に遊びて、歸らざる如きないふ。「閑窓瑣談」古くより俚俗の諺に、木乃伊取が木乃伊になるといふたとへを、つれづれにいひ傳ふ、其起源を奈何にと尋ねれば、木乃伊の出づる國は、赤道の下にあたる國にて、極熱の地方なり。其所にいと廣々たる砂地あり、其邊を往來する人は土にてこしらへたる車に乗りて過ぐることなり。萬一誤つて地に落れば忽に焦れて木乃伊となる。亦其木乃伊を取らんとて土の車に乗

箕賣笠にて簞る。

我國の所行にて神國などには忌嫌ふ所爲なり。箕賣故、物を簞るに箕を以てすべく思はるれど却つて



笠にて物を籠るとなり「奥の奥に奥に奥」(カの部分)「紺屋の白袴」(コの部分)と同じ意。

見えはるより類はれ。

虚飾よりは、利徳を取るべしとの義。見えはるとは、外見を取り繕ふこと、類張るとは口に物を入ることにて利を収むる意なり。見えはるといふより類はれと押韻したるなり。

三日月の下に横雲あれば四日のうちに雨降る。

解に及ばず。蜜柑が黄色くなる時節には、醫者の顔が青くなる。

晩秋蜜柑の黄ばむ頃、氣候自ら人に適して、身體の健康を保つによきを以て、病人少しといふ義なり。病人少ければ醫者の顔青くなるなり。身から出た錆。

災禍失敗に遭遇する等すべて悪結果を得るは畢竟是自己の作りたる悪因に基くとの義。「鷹筑波」「身から出た錆びが夕立雨」「法苑珠林」十惡篇「惡從心生。反自

賊。如鐵生垢。消毀其形。」「尙書」天作孽猶可違。

自作孽不可違。右の手で放して左の手で握る。

一方に與へて、一方に奪ふといふ義なり。三行半を書きなさい。

妻より夫に離縁を迫るときにいふ語。三行半とは去状のこと、即ち夫婦離婚の時に夫が婦に與ふる縁切れ状なり。「他我身の止」「つひにその女房をも三行半でちをあげ」又宗因の句に「歸る雁みくだり半を名残りにて」とあり。

神輿を据える。

人の容易に立ち去る景色なきをいふ。坐りこむことなり。腰を据えると輿を据えるとを通はせたるなり。

身さへ意にまかせぬ。

萬事意の如くならざるをいふ。無住法師の萬事世間運に任せて有るべき心地の述懐に、「我身猶わがおもふにまかなはぬに人をこゝろにまかせしやば。」見ざる聞かざる言はざる。

隠遁する義、心を靜に養ふこと。人の非を見ず、聞か

ず、言はざる様にする。こと。「吾心銘要」「耳不聞人之非。目不視人之短。口不言人之過。庶幾爲君子。」

見猿言猿聞猿。

庚申塚、即ち青面金剛童子の前にある三疋の猿の名。前の諺の寓意なり。又三疋猿の諺に「見ず聞かず言はざる三の猿よりも思はざるこそまさるなりけれ」短き物を端截る。

萬葉集卷五、山上憶良が「貧窮問答」に、「(上略)飯炊事毛和須禮提、奴延鳥乃、能村與比居爾、伊等乃伎提、短物乎、端伎流等、云之如、楚取、五十月夏加許惠波、廢屋度麻底、來立呼比奴。(下略)同卷同人の「沈瀾自哀文」にも、「諺曰、痛瘡瀝鹽、短材截端」と見えたり。これは、「泣く面を端がさす。」「餓鬼の物を出がせびる。」の類なり。三島曆のやう。ユマカナル喻。身まらさずの口たさ。

己が身の分を知らずして、妾にへらさず口をきくこと。生計と死病にあだなことはない。

生計の苦と、病苦と、孰れも尋常にはあらず、甚だ苦しきものなりとの義。

簾を隔て、高坐を覗く。

迂りしきことをいふ。

見せが付いたら、買人がつく。

物品を公衆の縦覽に供すれば、自ら買ふ人ありとの義。見せと店とを道はせたるなり。

見せびらかす。

見せ誇る義なり。

晦日に蕎麥を食ふと小使錢に困らぬ。

俗説。

味噌糞を一緒にする。

糞糞其別を正さず、一緒に取扱ふ義。

味噌糞の世話。

細事の世話までやくとの義。「漢書」「威宣爲左内史。其於米鹽之事。大小皆關其手。」



味噌汁で顔洗へ。

おついで顔洗へ(オの部)に出づ。

味噌汁を吸ふと煙草のやにを拂ふ。

俗説。  
味噌摺坊主。

僧にして薪水の事を執るものをいふ。  
味噌の味噌臭きは上味噌にあらす。

學者にして其學識に誇るが如き者は、眞の學者にあらずといふ喩。味噌は豆と麴と鹽とを和して、醸し作れる物なるが、其の臭味の失せぬのは上味噌にあらず。上味噌といふは、其臭味の全く去りたるものなり。「海人藻芥」二條其基公の仰せに上腐の上らふしきと味噌のみそ臭きは下品なり。」

味噌に入れた鹽は餘所へは行かぬ。  
今他の爲に擲つ所の金が、空しく失ふことなくして、他己れの利益となるやうの類をいふ。味噌を作る時に鹽を入るゝものなるが鹽のからき味は味噌の中に存すといふことなりし。

味噌を付けた。

事を爲損じたるをいふ。失敗して耻辱を取りしことをいふ。「太平記」「桃井直常敗軍の條に「當時の人の落首なりとて、(唐橋や、鹽の小路のやきしこそ、桃井殿

は、鬼味噌をすれは、彌陀の光も金次第。」

地獄の沙汰も金次第といふと同義。金力の貴きをいふ。彌陀をたのむは親よりたのめ。

佛道に歸依するには先其の親より初むべしとの義。微塵積りて山となる。

ちりつもりて山となる(オの部)に出づ。就きて見るべし。

微塵眼に入れば泰山も見えず。  
人の精神内に一點の曇あるときは、大道を没して見えざるに至る喩。又些細な事が大事に影響する義なり。

「避暑錄」一指蔽目大山弗見。」  
道分の石に師の恩父の恩。

道標の文字を讀み得、岐路に迷ふことなきは全く己を教育し呉れたる父の恩と師の恩との致す所なりとの義なり。

道を盲人に尋ねるやう。

之れを知らざる所のものに教を求むる喩にて、其效なきをいふ。韓愈の答陳生書。「是所謂借聽於聵。問道於盲。未見其得。」

水至つて清ければ魚すまず。

せい水に魚すまず(セの部)を見よ。

水入らず。  
視しく睦まじき者の間柄をいふ。

水井戸より湧き出ると夢みれば吉兆。

俗説。  
水かけ論。

争論の何れにも決せず、其理非曲直を断ぜずして、放言のまゝに終るをいふ。

水のかけつこをする。  
互に責任を人に嫁する事をいふ。

水鏡を見ると愛嬌が落ちる。  
俗説。水中を覗かしめざる方便にいふ。高野山に水鏡の井戸あり、これに面を映して若し見えざる時は其年中に死すと云ふ。

三つ鼎で談す。

三人對話すること、鼎は三足なり故に三人の座したることなり。

三日坊主。  
物に厭き易きをいふ。三日月の背に出て、直にかくるるより云ふならん。末のつゝいふこと。

水甕へ落ちた飯粒のやう。  
いやに太つたる容貌を云ふ。

三つ鐵輪。  
三方に座する事。かなわはゴトクの事。「一谷嫩軍記」熊谷辰三鐵輪の證議」

三日八日に涅齒つくるな。

俗説。  
水臭い。  
薄情にして冷淡なるをいふ。鹹味の淡きを水臭いといふより、淡きことをいふ義に用ふ。

見付けられたが百年目。  
見付けられたが最後と云ふ義。

三歳兒に髪が生えたやう。



似合はれ事。  
三歳児の根性百まで。

幼時の氣質終身失せ去らざる義。三歳児の根性八十まで、或は三歳児の魂八十までともいふ。「論語」「子曰三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也。」

水三合あれば大海。

水は少しく席上に溢すも、非常に多く思ふものなり。三疊角で飯を食ふと出世しなす。

俗説。

水仕奉公。

下女の事。

水鳥陸に迷ふ。

水禽の類は、水中に於て自由に遊泳を爲せども、陸に在りて自由を失うて迷ふなり。非常に逃うて途方に暮ることにいふ。「毛詩」「離渠水鳥。而在原失常處。」

水に油の交りたるやう。

親しき者の中に疎き者の雜るをいふ、油に水の交りたるやうともいふ。又君子小人互に相容れざる義とす。水に入つて垢落ちず。

爲し甲斐のなきことに喩ふ。  
水に流す。

従來の感情の行違ひ等を忘却し去ることをいふ。又單に過去のことを全く忘却し去ることにいふ。

水に源あり樹に根あり。

物皆根源あるをいふ。

水に盡くが如し。

目に見耳に聞くことのおとがたもなき義なり。又忽に消えて跡なし即記憶に存せざる義なり。速に消えて久しく住せざる喩。又徒勞無益の業をいふ、水に盡くのはかなきに比す。「大般涅槃經」「壽命品」是身無常。念念不住。(中略)亦如畫水隨畫隨合。「觀經序分義」在家者貪求五欲。相續是常。縱發清心。猶如畫水。」

水の泡となる。

爲したる事のおとがたも無く、無効となるをいふ。

水の月。

目に見るのみ手に把る能はざるをいふ。

水の滴るやう。

至極清浄と折えきりたるをいふ。潤澤あること。

水の出花。

一時盛にして直に衰ふること。

水の流と人の行末。

何所に落つくを知らずとの意。人の行末と水の流れ(ヒの部)の條に出づ。

水の流るゝことを夢見れば縁談整ふ。

俗説。

水の中で屁を放るやう。

不明晰の言語を爲して、一向取り留めたる事なき形容。

水呑百性。

小作人をいふ。

水はさかさまに流れず。

物を逆うてなす能はずと云ふ意。

水は三尺流るれば清くなる。

解を要せず。

水は窪みに身をよする、鳥は梢を慕ふ。

卑きにつくもあれば、高きを慕ふもありて、其志す所其依る所の各異なるをいふ。

水は方圓の器に従ふ。

人は善惡の友によるといふ喩なり。「荀子」「君道篇」君榮也。榮圓而水圓。君者孟也。孟方而水方。「韓非子」外儲說「孔子曰爲人君者猶孟也。民猶水也。孟方水方。孟圓則水圓。」白氏文集「偶吟詩」無情水任方圓。器不繫舟隨去住風。」

水は低きに流る。

安きを追ふとの意。又物各其本性に従ふものにして性を遷し難しとの意あり。「孟子」「人性之善也。猶水之就下。」

光秀の天下。

世に時めくことい、極めて短時目なるをいふ。光秀の天下で三日坊ともいふ。光秀信長を低したれども、間もなく秀吉の爲に亡ぼされし故にいふ。

水もたまらず。

一瀉して過ぎ行くより云ふ。

水も漏さぬ中。

至極親密なる間柄なりといふ義。「小町踊」「籠にさへ水を漏さぬ氷かな。」



盈つれば虧くる。

月に盈虧ある如く、人事榮枯あるを免れずとの義。水をさす。

人を離間すること。即ち人の親密なる間柄を疎遠ならしむるをいふ。

水を流すやうな口上。

流暢の辯を云ふ。

水を向ける。

人をして、己が爲さしめんとする、方針に趣くやうに、仕向くること、巫女の事よりいふ、

身でないものは骨髄。

魚肉杯の肉に非ざる所は、骨髄になすと云ふこと。如何なる物でも捨てずして用立たしむると云ふ意。

身で身を喰ふ。

我身自ら我を滅ぼすに至るをいふ。又血で血を洗ふ(チの部)といふに似たる義もあり。

水戸邸の百軒長屋。

往時江戸小石川の水戸邸に長屋多かりしなり。

水戸生強情。

水戸生の人には強情なりとの事。身と佛は見れば見る程尊い。

人の身は、よく思ひ見れば、實に尊き迄自由に便利に造られたと云ふ事なり。

見直し聞直し。

「神代口訣」神は人の過失を見て怒り給はず、大目に見給ふ事をいふ。とがめず、恨みざる者は神明の過有るを以て見直し聞流しの謂なり。

南竹藪殿隣り。

居をうつさば隣をかれて察すべしとの義。即ち南の方に竹藪あるがよく。又隣に大家あるをよしとすとの意。

「左傳」諺曰非宅是下。唯隣是下。

源 乾 け ば 流 濁 ぐ。

根源衰へて其末に及ぶとの義。凡何事にても其根本を養ふにあらざれば、其末の盛ゆること期すべからずとのこと。「天台」根露條枯。源乾流竭。

源 清 け ば 流 れ 清 し。

其根本とする所、其原因たる所、宜しきを得ば、其末、

其結果良好なりとの喩。「荀子」君道篇「源濁則流清。原濁則流濁。」

實ならぬ木には神憑く。

「万葉」二に、「玉莖 實不成樹爾波、千弊破、神曾著常云、不成樹別爾。」

實なる木の實ならぬに神の領したまふ。

女のさるべき男せれば、遂に男を得ざるべしとの義。身にあまる嬉しさ。

身にも嬉しさの溢れ出づるといふ意にて喜悅の情の甚しきなり。「新勅撰」「うれしさをむかしは袖につ、みけり。こよひは身にもあまりぬるかな。」

見ぬ商は出来ぬ。

見ぬもの、相場は決められぬとの意。

見ぬが奇麗。

悪しき事は見ぬ方よしとなり。

見ぬが佛。

見ぬが尊しといふこと、即ち見ざるを可とする義。しらぬが佛(シの部)の條参照すべし。

見ぬが佛聞かぬが花。

他人の噂をきいたる時其の事實を十分に聞かず見ざる方幽しとなり。

見ぬ京物語。

見しことなきを見たるらしく、漫に語るをいふ。見ぬこと清し。

未だ見ざることは、よきもの、やうに思はるゝとなり。即ちたとへ清からずとも、之を見ざれば清しと、思ふが如きをいふ。見ぬもの清しともいふ。

見ぬ怪物に膽を消す。

恐怖心強くして、其事なきに、漫に驚き恐るゝをいふ。見ぬやうで見るやうで。

見ざる如く、見る如き態をなす義。窺み見るをいふ。

「吉原雀」佛脱大愛道比丘尼經下。女人欲視男子。見之之後却縮。是十三態。女人見男子。去後在後見之。是十四態。女人欲見男子。後低頭不語。是十五態。」

美濃と近江の寝物語。

「犬子集」寝物語に月ふかしぬる肌寒や秋にあふみの國さかひ。奈須といふ地がありて美濃と近江との境をなす。



箕笠はてんで持。

箕笠は各自各別に用意せざるべからず、凡善惡親應し、禍福相承ぐ等、身自ら之に當らざるべからずとの義。

箕笠をきては人の家に入らぬもの。

「門に入らば笠をぬげ」ハモの部の條を見るべし。

身の皮剥いても。

衣服を賣盡してもといふ義。

身の毛がよだつやう。

恐怖の義。

箕造る人は笠をきる。

箕造る人は笠をきる。笠造る人は笠をきる。

實のなる木は花より知れる。

後來立派なる行蹟ある者は、其未然の時、既に前知し得らるゝとの義。

身のほどを知れ。

上を見るな(ウの部)の條に出づ。

身はならはし。

人は平生の習慣次第にて、善くも悪しくなるとの義。

小町の歌に、「手枕のすき間の風も寒かりき身はならはしものになぞありける。」寂蓮法師の歌「里はあれぬむなしき床のあたりまで身はならはしの秋風ぞふく。」

身は身で通る。如何にしてなりとも、身分相當の事をして暮し行くといふ義。

耳搔で集めて熊手で搔き出すやう。

集むること少く、散ずること多しとの義。

耳がとんぼがへるやう。

大聲なるを驚くとの義。

耳學問。

自ら研究したるにあらで、人に聞いて物を識れるをいふ。「荷子」上學神聽。中學心聽。下學耳聽。

蚯蚓が土を食ひつくす。

「釋迦如來誕生會」カの蚯蚓といふ虫が世界の土をくひ盡さば何を喰はんを歎くと云ふ由同然の深川心。

蚯蚓ののたくるやう。

書の拙き形容。

蚯蚓と大蛇と。

「聖德太子繪傳記」この守屋に橋付くこと、蚯蚓が大蛇に争ふ如し。

耳朶の大きな人は運が好い。

「諺草」俗に富貴貧賤は、耳垂珠にありと云。陳希夷神相全編云。耳厚而堅。發而長。皆壽相也。輪廓分明。聰悟。垂珠朝口者主財壽。貼肉者富足。耳薄如紙貧窮無倚。事文類聚別集云。節度李忠臣因奏對。德宗謂曰。卿耳長大貴人也。忠臣問。驢耳甚大。龍耳即小。臣耳雖大乃驢耳也。上悅之。

耳に釘。

「北條時賴記」姫君の耳に釘むツとしたる御顔つき

耳に御馳走をする。

面白き談話を耳に入ること。

耳に蛸が出来るやう。

再三同じ事を聽く義。耳に蛸の居るほど」といふ。蛸は「聾聵」にて堅き疣の如きもの。

耳に針。

「晉我扇八景」祐經が耳に針をさす重忠の一句の異見

耳の垢を溜めて置くと蛇になる。

俗説。耳垢を能く掃除せしむる方便。

耳の痒きは良い事を聞く前兆。

朝右夕左(アの部)の條に出づ。

耳の耳くさきはくはれず。

「味噌の味噌臭き上味噌にあらざ」といふに同じ。就きて見るべし。

耳の正月をした。

愉快なる話を聞きしこと。

耳の御馳走。

面白き談話を聞くこと。

耳を尊び目を卑しむ。

聞く所を貴び見る所をいやしむ義。報衛の東京賦に「莞爾而笑曰。若客所謂末學膚受。貴耳而賤目者也。」

耳を取て鼻をかむ。

到底爲し得べからざる喻。

耳を取つて鼻へ付けるやう。

吻合せざること。



耳を抑へて鈴を盗むやう。

「淮南子」有「竊鐘而走者。鎗然有聲。恐人聞之乃自掩其耳。」

容貌は果報の下地。

容貌の美なるは、人に愛寵せられて、幸福を得る基なりとの義。「みめは果報の基」といふ。

容貌より心。

人は其容貌よりは、心の美しきがよしとの義。「古今集」雜歌上女どもの見て笑ひければよめる、「みたちこそみやまがくれの栞木なれ心は花になさばなりなむ。」

懐胎の時は異様な物を見るな。

異様な物を見て、精神を駭かすやうの事ありては、胎兒に悪しき影響を及ぼすが故にいふ。

妊娠中火事を見て腹を撫づれば悲のある子を生む。

俗説。

身も蓋もなし。

何れしなしとの義。

身も世もあられぬやう。

熱痛の極なるを云ふ。  
明星地を照せば明日雨ふるしるし。

明星は金星のことなり、太陽より第二に位する行星の名、地球より小し、二百二十五日にして、太陽を一週す一名太白ともいふ、此の星は日の出の前にも日の入の後にも見えて他の星よりも赤く輝く故に明星の名あり、其の曉なるを明の明星といふ。(古名アカボシ、啓明)夕なるを宵の明星といふ。(古名ユフツ、長庚)

見様見真似。

長く人に親炙し、或は人の爲すことを見つゝある間に、知らず識らずに、感化せられて、其風尙其所爲を倣ふに至ることをいふ。

都にも田舎あり。

都會の地にも僻地の如き所あるをいふ。

見られぬといふほど見たし。

禁止せらるれば却つて反動を起し易きことをいふ。

見るに煩惱。

見るに目の欲障るに煩惱といふに同じ。

見るに目の欲障るに煩惱。

五官の媒によりて、欲情の制しがたきないふ。「吾吟我集」小座頭のはれぬ思ひやましならん見るに目の欲おこる煩惱。

見るは法樂。

見る而已ならば、無代價なりとの義。法樂とは神前に奏する歌舞及樂なり、無代にて見ることを得。見るは法樂見らるゝは因果ともいふ。

彌勒の出世

出世の運き事。

身を切らるゝやう。

苦悶の甚しき義。

身を粉にする。

殆ど我身を忘れてよく働くことをいふ。

身を知る雨。

「八百屋お七」身を知る雨さめくと泣いて俯伏居たりしる。

身を捨てゝこそ浮ぶ瀬もあれ。

熱心な去り、愛我の念を去らば、却て無事安樂なりとの義。「繪詞傳」山川の末に流るゝとちからもみならず

てこそ浮ぶ瀬もあれ。「花草紙」うぶものゝしなしなどいふ條に、「ものゝふのやたけ心のひとすぢに身をすてこそ浮ぶ瀬もあれ。」

身を摘みて人のいたさを知れ。

己の欲せざる所人に施すなかれといふ趣意なり。「聯珠詩格」方南山詩「自縁若得重裘煖。戲拾庭前雪打人。」慈鎮和尚の歌「誰もみな我身をつみて思ふべし命はなしきものと知らずや。」大内義隆の室の歌「身をつみて人の痛さぞ知られけるつま戀しきは戀しがるらむ。」我身をつめて人の痛さを知れともいふ。

身を引く。

親戚縁者の者を負最すること。

實を見て樹を知れ。

人の行爲を見て、其心を推知せよとの義。「論語」視其所以。觀其所由。察其所安。人焉廋哉。人焉廋哉。



む

六日の菖蒲、十日の菊。

既に時機を失ひて、用立たぬといふ義。菖蒲は五月五日端午の節に用ゐる者なれば、六日に至ては無用の物となるなり。「夫木集」「いかにせん今は六日のあやめ草、ひく人もなき我身なりけり。菊は九月九日の節句に入用のもの。昔とつた杵欄。

昔て熟練せる事は、久しく其事を放擲しても、猶能く其技を顯はすとたり。昔寝養を放つた者は無い。

己が過去の非を言ふものはなし。老人抔何れも「我々の若し時は壯時の自慢をなすものなり。昔の劔今の菜刀。

往時盛なりし者の、今は其勢力の衰へし喩。物に在ては、昔時用を爲したるものも、今は其效を失ひたるをいふ。古語に、「秦之時鞍轡。」鞍轡とは秦の咸陽宮を作りし時の錐なり」とあると義同じ。昔の長刀今の

菜刀、いいふ。昔の長刀今の菜刀。

前の義に同じ。昔は今の鋭。

過去の事に鑑みて、現今の事を處理する便益あるをいふ。「家語」觀周篇「夫明鏡所以察形。往古所以知今。昔は肩で風を切り、今は歩くに息をさる。往時は勢威を振ひしものが、今は衰微に陥りたるをいふ。(榮枯盛衰の状をいふなり。)

昔は馬車を馳する位の勢なりしものが、今は金錢を欲するに至りたりとなり。(金錢に困るをいふ。)

向ふ笑顔に矢立たず。怒れる拳笑顔にあたらず(イの部)に同じ。就きて見るべし。

向ふ猪には矢もたらず。猪の毛は粗くして逆立る故向より射るも矢立たず、後より射ば立となり。事をなすにも皆やり方あるをいふ。

向ふ三軒兩隣。

市中家多き所にては、向三軒兩隣のみ親密にすべしとなり。東京にては轉宅の際、蕎麥を配るに向三軒兩隣なり。向ふを張る。

他に負けじとて、之に對して勢力を張り合ふ義。麥糶を壘へこぼすと蚤になる。

俗説。麥とまうとめは踏むがよい。

「倭訓栞」俗に蔥花の芽、露の藪を、シットメと云、麥とシットメは踏がよいと云俗語も、此をいへるなり。

メは芽の義也。麥と大豆には二番肥施くな。

解に及ばず。麥の出穂に日を晴らせ。

麥は穂の秀づる頃晴を好む者なり故にいふ。麥は百日の播期に三日の刈旬。

麥の播種する時期は長く、收穫時期は短しとなり。麥飯にて鯉を釣る。

えびで鯛を釣る(エの部)に出つ。麥飯は脚氣に藥。

脚氣病には麥飯を食するを良藥とす。蒙古高勾麗の鬼。

「諺草」後宇多院弘安四年の秋、蒙古國より六萬艘の兵船を浮べく、日本を攻、高勾麗の者案内者となり、筑前國博多まで着船す。八月一日俄に神風驟く吹て、蒙古の六萬艘の兵船悉く破損す。是を世にむくりこくりの鬼とて、おそろしき事にいはせり。蒙古は元朝の本の名なり、高勾麗は高麗の事なり。康富記にこくりと訓せり、國裏と書くは誤なり。

木犢子は磨きても黒し。

人の個性の容易に變じ難きなど、如何に人為的工夫を凝らすとも、到底其効なきに喩ふ。「莊子」鵠不浴日而白。烏不黔日而黑。又た顔色黒きものが化粧するを嘲る語。

むくろじを三年研く。



何程研くも白くならざるを悟らざるをいふ。  
無藝大食

藝能なく、唯大食するのみなるものを嘲りていふ。  
穢い所せると蚯蚓が出る。

きたない所せると、蚯蚓が出る(キの部)に出づ。  
蟲一匹殺した事ない。

氣質の濃厚にして、人を苦しめし事なきをいふ。  
蟲が好い。

神経の過敏に過ぎずして、寛容の態度あるをいふ。轉  
じて自分勝手なるを平氣に言ふ事にも用ふ。

蟲が這ふやう。

廻々たる歩行を形容す。  
蟲が怒ると子供が泣く。

小兒の疳の起る事。  
蟲喰齒に物のさはるやう。

痛ある上に、また痛みを加はること。  
蟲の息のやう。

細き息。わびしき生計をなすに喩ふ。

蟲歯をやくと蟲が取れる。

俗説。  
無慈悲の吝嗇は寶の番人。

吝嗇にして慈悲心のなきものは、毫も世上に益なくた  
だ財寶の番人となつて世を送るのみと罵倒したるな  
り。

無常迅速。

世のうつり變る事の早きをいふ。  
無常の風は時を擇ばず。

人は何時死するも知れずとなり。  
娘の子と小袋。

娘の子を育つるには、費用のかゝるものなりとの義。  
小袋と小娘(コの部)の條を見るべし。

娘一人に七藏開けた。

娘一人の爲に嫁仕度衣裳其他の事に巨費を投じたるを  
いふ。

娘一人に婿八人。  
現に在るものは二にして、之れを要望するもの八人も

ありといふことにて一の好地位を衆人の之を望むに喩  
ふ。

娘をよめらすなら大家にやれ。

娘を自家より優れる家に嫁すべしとの義「名臣言行録」  
「嫁女必須勝我家者勝吾家則女之事人必飲  
必戒。」

むせぶに懲りて飯を廢するやう。

あつものに懲りて冷飯を吹く(アの部)といふに同じ。  
「淮南子」散林訓「有以噎死者而禁天下之食則悖  
突。」

夢中作左衛門。

夢中とばかりいふと同義にて、諸事空に居るを云。是  
は元祿の頃の江戸のはやりの諺なりといふ。

鞭長しとも馬腹に及ばず。

勢力ありながら能く爲すことなきをいふ。  
楚伐宋。宋告急於晋。晋侯欲救之。伯宗不聽。古人  
之言曰。鞭之長不及馬腹。天方授楚。不可與爭。

むつかしき講には、入らぬがよい。  
面倒な事の禍中に投ぜざるを可とするとの義。

六指者は繁昌する。

俗説。  
胸が大きい。

度量の寛大なること。  
胸が広い。

度量の狭いこと。  
胸三寸に納むる。

喜怒哀樂の情を抑へて、色にあらはさるるをいふ。  
胸に一物手に荷物。

心に挟む所あるをいふ。手に荷物を持つ如く、心にも  
のを持つ(思ふ所ある義)となり。胸に一物といふより  
手に荷物と對して押韻したるなり。

胸に釘。

胸中の秘密、若しくは弱點をうちさゝるゝ等、すべて  
心底に痛苦を感ずるをいふ。心くるしきこと。

胸に手をあてる。

思案すること。人の思案するときは、自ら胸に手を  
當つるものなれば、かくいふなり。



胸むねに手を置いて寝ればうなる。

俗説。

胸むねに火を焚く。

怒氣胸むねにみつるをいふ。

胸むねに焼鐵。

胸むねに釘といふに同じ。「平假名盛衰記」お筆が胸むねにやき

鐵さす、今さら何と返答も」

胸むねをうつ。

喫驚くつきょうすること。

無明むみょうの酒に酔ふ。

迷ひの中に居ることないふ。無明とは佛語にて暗きこと、即ち邪見妄執の中にあるをいふ。「秘藏寶論」「徒

縛むす妄想むさう之繩むす。空醉くうすい無明むみょう之酒。

紫むらさきは朱しゆを奪ふ。

悪あくの感かん化くわ力りき強かくして、善ぜんき者ものを悪あくしくすること。朱色しゆしきが紫色むらさきの爲ために化くわせらるゝを以もつて喩たとへず。「論語」惡あく紫むらさき奪むす朱しゆ。惡あく鄭てい聲せい亂らん雅や樂らく。」

紫むらさきは襪わめ易やすし。

紫むらさきは襪わめ易やすし。

紫むらさきはうつらひやすき色なりとの事。

村雨むらゆを嵐あらしの誘さそふ如ごとし。

「一心五戒魂」いつく迄もつけ出る其有様はむらさ

めな嵐あらしのさそふ如ごとくにてさらさらさつと走り行く」

無理むりが通とほらば道理だうり引籠ひっこめ。

國道こくどう無なきときは、暫しばく稍しやう晦くわいして、之れを避けよとの義。

次つぎの無理むりが通とほれば道理だうりが引籠ひっこむの條じょう参照さうじゆすべし。

無理むりが通とほれば道理だうりが引籠ひっこむ。

無理むりと道理だうりと兩立りやうたつせざるをいふ。即ち無理なる事を道

理りらしくいひ張はる者ものある時は、眞まの道理だうりは却かりて非道

の如ごとく聞きゆる者ものにて、自然じぜんと引込ひきこまざるを得えずとなり。

「前漢書」劉向りゆうきやう傳でん、譏ぎ邪じや進しん則すなは衆賢しゆけん退たい。群ぐん狂きやう盛せい則すなは正士せいし銷しょう。」

め

目明めあき千人にんめくら盲人にん千人。

無識むしきの人ひともあれば、具眼ぐがんの人ひともありとの義。

目めあり目めなしは唐からの攻せう合がはせ。

圖基ずきの語。

目めあり目めなしも目めにぞよりける。

圖基ずきの語。

名人めいじんは人ひとを謗そしらず。

有道いうどうの人ひとは我身われみを反省はんじやうして、敢あて他人たにんの非ひを離はなずるこ

となしとなり。許魯齋きよろさいの語ことばに「君子くんし省しやう己おのれ胡こ遠えん毀くわい人にん乎や」

哉や。」

妻めかけいと子こいとし。

妻子めかけこの愛あいにひかざるをいふ。

冥途めいどうの旅たびの一里塚いちりづか。

一休いっけの歌うたに「門松かどまつや冥途めいどうの旅たびの一里塚いちりづかめでたくもあり

めでたくもなし」とあり是より出でたる諺ことわざなり。

冥途めいどうの飛脚ひやく。

先方せんぽうへ使つかしたまひにて、歸かへり來きりて復命ふくめいせざるをいふ。

冥途めいどうの道みちに王わうもなし。

人は死し後に富貴ふき貧賤ひんけん尊卑そんひの階級かいきふなしとの義ぎ「古今著聞

集」延喜帝えんぎてい冥途めいどうにて雀すずめの窟くつの聖せいに逢あひて讀よみたまひけ

る歌うたとて、幽奈落ゆうならく温泉おんせんの底そこに入いねれば利り那なも須す陀だも替か

命いのちは義ぎに依よりて輕かろし。

人の命いのちは貴重きやうじゆうなるものなれども、義ぎに比ひぶれば甚ただ輕

きものなりとの義ぎ。「後漢書」朱穆しゆもく傳でん「情じやう爲ため恩おん死し。命めい緣えん

義ぎ輕かろ。」和漢朗詠集わかんらうぎやうしふ述懷じゆわい「心こころ爲ため恩おん使つか。命めい依よ義ぎ輕かろ。」

命いのちは食くはに在あり。

いのちいのちは食くはに在あり(ヘイの部)に出いづ。

名馬めいばには辯べんあり。

名馬めいばに一辯いちべんあるを免まれずとの義ぎ。有名いうめいなる人物にんぶつは一辯

名筆めいひつは筆ふでを擇えらばず。

筆蹟ひつせきの巧たくまなるものは、筆ふでのよしあしを論ろんぜず、矢張やじやうり

其そのの筆蹟ひつせきが見事けんじなりとの義ぎ。「後山談叢」善書ぜんしよ不ふ擇たく紙

筆ふで妙たう在ある心手しんて。」

名物めいぶつに旨うまいものなし。

名物めいぶつと稱なづせらるゝ物ものに美味うまいなきが通例つうれいなり。故ゆにかり

て一般いぱんに名高なかつたかき者の却かつて其評判そのへいぱん判程はんぢやうの價値けいちなきをい

名譽めいよを失うしなふは眼めを失うしなふに同じ。



人若し真正なる名譽を失ふときは、人に擯斥せられ、世に立ちゆくこと難し、例へば眼を失ふが如し、頗る不自由なりとなり。

各自の友達に非ず

人は各自に友人ありて、之を己一人の友とのみ思へども其友また他に友あり、畢竟真友とすべきは己一人なりとの義。

めうがを食へば馬鹿になる

「閑窓瑣談」俗説に眞荷を食すれば昏鈍になるといふ、又記憶を悪くするものなりと云ふ、其故はと尋ねれば、めうがは釋迦の門弟の殷特が墓より初て生出しものなり、殷特は愚にして我名をも忘るゝ程なれば、名を書て首に掛て歩行者なり、其塚に生たる草なればとて名を荷ふと書て、名荷と名號、是を食すれば、心氣を滋し、記憶なからしむ、依て若荷の異名を鈍根艸といふと言へり。此説何者が妄りに作出して、愚蒙の盟を誣誑惑こそ最憤けれ。先殷特が故事ならば、天然の事なり、天然には名荷といふ字なし。亦名を荷ふといふ意の梵語を翻譯すれば、荷名と讀べし。名荷とは横かず、且つめうがといふは、倭名にて音にはあらず、

めが、とも云へり。此艸の狀、薑に似て、柔かなる故に、薑に對て、眞荷とはいふなり。昔は夫の倭語、女は婦の倭語にて剛柔を別ちて名づけたるものなり。(めうが男)と云心と知るべし。本名は眞荷にて覆菴とも、嘉艸とも異名を呼ぶ。鈍根艸といふ名は決してなし。亦其性も心氣を損するものにあらず、本艸綱目に曰く、不祥の邪氣を去り、蠱毒を解し、瘡を治し、沙蟲の毒、蛇の毒を解す。稻の芒が、夢の世の眼に入たる時は、眞荷の根の汁を絞り入れてよし。然ばありとも薬を服する人は聊か遠慮すべし。多く食する時は、薬の爲に悪し、是奈何といふに諸の毒を消すゆゑなり。

妾側室は男の働

妾を畜ふるは男子の働あるなりとの義。これを養ふだけの金銭を工面せざるべからざる故に云ふ。

目から鼻へ抜ける

伶俐機敏なるをいふ。滲滲せざることに基づく、凡人には涙管とて眼から鼻へわけて涙の流れゆく管あり其管の通りをよくせざれば涙のはけ道がふさがる故あふれこぼるゝなり。

目から火が出るやう

頭部面部などを物に衝きあて、酷くうちたるをいふ。

目さゝ千人目くら千人

目あき千人目くら千人といふに同じ。

目くさり金

少しの金をいふ。目薬金にはあらざるが、少しの事を目薬程と云ふ事あり。

目糞が鼻垢を笑ふやう

同醜同類の者互に相嗤笑する喩。

目くじらを立てる

些細なる事をやましくいふこと。

目凹に馬鹿なし

目の凹みたるものは思慮多しといふ俗説。

盲人が杖を失うたやう

憑依する所を失ひて力を落す喩。「陳同甫集」別去惘然。若盲者失杖。

盲人に鏡を貽るやう

用に立つ者たりとも、使用する能はざる者に與へては、一向其役に立たずといふに喩。「韓非子」勿胎盲者鏡。勿予瞽者履。

盲人に道を聞く如し

求め問ふ所其當を失するをいふ。之を問ふも無益の沙汰なりとの義。「書言故事」韓公答陳生書、足下求迷化之術、乃以訪愈、是所謂借聽於瞽、求道於盲、未見其得者也。

盲人に目鏡を貸すやう

盲人に鏡を貽るやうといふと義同じ。「あんまに目鏡」ともいふ。

盲人のよそみ

あり得べからざる事。

盲人のかき覗き

つんぼの立聞(ツの部)に同じ。「維摩經」如盲者見

盲人のさぐりあて

確乎たる意識に訴へずして、漫然と事をなし得たる事。



盲人の杖を失ふ如し。

「盲人が杖を失うたやう」の條に出づ。

盲人蛇に怖ぢず。

古人の「法を知る者は恐る」といへるに反對にて物事を辨知せざるが故に怖るべきことにも怖るゝことなしとの義なり、古歌に「ふみあてはめくらもへびにおづべきかしらればやすき和歌の道かな。」

盲人滅相にやる。

胸中に成算なくして漫に事に當り、思ひ切つた事を断行するをいふ(「盲人滅法界」ともいふ)。

盲人も京へのぼる。

庸愚なる者も立身することある喻。一心になれば何事もなると云ふ意。

飯粒で鯛を釣る。

えびで鯛を釣る(エノ部)に義同じ。

飯粒をこぼせば盲人になる。

飯粒をこぼさぬやうに威嚇したる訓戒なり。

飯のあらと嫁のあらとは少しにても齒にかか

る。姑が妻の微瑕をも寛容する能はざる義。

飯の上の蠅のやう。

追へども去らず、拂へば復来る如く、煩冤事に喰ふ。

飯の腐つたのは食つても中毒らぬ。

俗説。

飯の喰ひ立に寝ると牛になる。

食後に寝るは、體裁の宜しからぬもの故、しさせざらしめんが爲に威しつけたるなり。

飯の食たてに伸をすると腋下へ飯がは

る。

俗説。

飯へ多く茶をかけるを好きなる者は實意が鮮

い。

飯前の煙草、死前の念佛は實にならぬ。

俗説。

煙草は食後にうまく、念佛は死後に有難みあり。

目眥の下つた者は多淫。

俗説。

飯を食て直に寝ると牛になる。

飯のくひだちに寝ると牛になるの條に出づ。

目高も魚の中。

枯木も山の賑ひ(カノ部)といふ類なり。

目面がわるい。

目つきの悪相なるをいふ。

目面にかゝる。

人の缺點を目撃するによつて己が氣持の悪くなること。

目で人を殺す。

美人秋波を送りて、人を懺殺する事。

目で視て鼻でかぐ。

能く物事に念を入るゝこと。

目と鼻と有りや京へのぼる。

荷も目と鼻とだにあれば京に到るを得べしといふ事に

て、何事にて成し得られざることなしといふ義。

目と鼻の間。

物の近いといふことの形容。目と鼻と相近きものなればなり。

目に物言はず。

目にて知らずる事。

目の一週間は七十五日。

眼病の癒ゆるは、長き日数を要すとの義。

目の上の瘤。

目の上に瘤を生ずれば、非常に障礙となるものなり、之を忌憚する所の人など、己の邪覺となるに喩ふ。

目のうとい雷。

「須磨都源氏」目のおうとい雷に掴みぞこないにあふた

と思つて辛抱いたしませうと。

目の下のほくろは泣ぼくろ。

目の下のほくろは涙の種ともいふ。

目の集る所へ珠が集る。



類を以て集まるといふ如き意にて、よき人の所によき人のあつまり、あしき人の所に悪しき人のあつまりのことがいふ。又文學者の所には文學を研究するものが集り来り、法律家の所には、法律に關する質問を爲すものが集り来る類にいふ。

眼球の黒いうち。

生存して居るうちといふ義。

目は臆病手は千人。

見るに煩惱ともいひて目は諸道の妨げを爲すこと多きを以て目の誘惑を避くべし、手は千人分をも働かせよとて宜しく手腕を揮ふべしとの意ならん。

目は心の鏡。

人の心情は直ちに目付きに表はるゝものにて、目は實に人の精神を映す鏡の如しといふ義。「孟子」存乎人者莫大於眸子。眸子不能掩其惡。胸中正則眸子瞭焉。胸中不正則眸子眊焉。「聖書」馬太傳「身の光よ目なり、若しなんぢの目眩かならば全身も亦明なるべし。若し汝の目眩かならば全身暗かるべし。是故に爾の中の光もし暗からば、其暗きこと如何に、大ならずや。」

目八分に持つ。

目八寸。

眼力の至明距離をいふ。魚の長さ杯にも云ふ。目へ這入つてもいたくない。

愛する事の甚しきをいふ。

目細鼻高櫻色。

目細く、鼻高く、顔色の櫻色なるが、美相なりとの義。

目細あれど口細なし。

飲食を好むもの、多きをいふ。

面くらつた。

吃驚する事。狼狽の體あるをいふ。

牝鶏うたへば家ほろぶ。

妻たる者一家の權を弄する時は其家衰ふとなり。「周書」牝鶏無晨。牝鶏之晨。惟家之索。」

牝鶏すゝめて牝鶏時を告ぐる。

婦人先づ内にすゝめて夫之を外に行爲する喻。

牝鶏時を告ぐるは不吉なり。

牝鶏うたへば家はほろぶとるふに同じ。

目もあてられぬ。

一見人をして慘然たらしむる光景なるをいふ。

目もあやなり。

すぐれて麗華なることをいふ。

目も口ほどに物をいふ。

目つきにて人に意を通ずる故にいふ。

目もと冷しく鼻筋透る。

容貌の美なること。

目脂が鼻くそを笑ふ。

目くそが鼻蓋を笑ふと同じ。

目病の一週は七十日。

眼病の治療は長き時日を費す故にいふ。

目病女と風引男

眼病にかかりたる女がうづむき勝にて、其姿何となく婀娜ほく見えてよし。風引男また然り。つまり風姿の婀娜たるをいふ。往時世の柔弱なる風習として、かゝる容姿をめでたるなり故に此諺あり。

目病女に感胃男。

前の諺に同じ。

目わたる鳥。

物の早き事に喩ふ。本無常の喩なり。「文選」人生瀛海内。忽如鳥過目。「萬葉」挽歌序「二鼠競走而度目之鳥且飛古歌に「しあしにこゝろひかれて朝夕のめわたる鳥のゆくゑしらすも」後頼家集に「たまさかにくるとはすれど目をわたる鳥のはやくもかへりぬるかな。」

目を三角にする。

怒ることないふ。三角にすると怒れるときの目つきにて、何となく鋭き眼ざしなるをいふ。

目を皿にする。

目を大きくして物を見詰ること。

夫婦は從兄弟ほど似る。

夫婦は互に其氣質性行の相類似するに至るものなり。いとこは容貌の相肖るものなり。故に云ふ。

も



猛虎籠にゐるときは尾を揺つて食を求む。

猛虎深山に在るときは、百獸震ひ恐るれども、一朝捕へられて、檻の中にあるときは、猛威を逞しくする能はず却て尾を動かして、食を求むとなり。英傑の士風する時に、人の憐みを受くるに喩ふ。

もうはまたなり、またはもうなり。

からうすまんにて運の悪しきをいふ。米相場に此米もはやあがるまじと思ひばかりで賣却すれば、まだ次第に騰貴して、早賣したるを悔い、又此米まだくあがるならんと、益買ひ込めば、もはや下落するに至り、大に損をするなり。此より出でし諺なり。

木魚が質に置かれたやう。

人の禪上に安臥するをいふ。

自分は金を出す事なく、他人にのみ出さするやうにするをいふ。俗説に鶴と鳩と鳩と集りて食を買ひ、十五文を要せり。乃ち鳩曰く、鶴は七文、鳩は八文、出すべしと。而して鳩は一文も出さず去れりと。此説参考すべし。

持合世帯。

世帯は多人數持合にて融通せば生計し易しとなり。餅は乞食にやかせ魚は大名にやかせよ。

魚は大名にやかせ、餅は乞食にやかせよ。(サの部の條に出づ就きて見るべし。

餅腹三日。

餅は腹に強くして容易に空腹に至らざるをいふ。

餅は餅屋。

凡何事によらず其専門とする所の業に精しきをいふ。

餅は餅屋の餅がうましと云ふ。

持も提もならぬ。

何如とも處理すべからざるをいふ。

餅より粉に要る。餅の費用よりは、餅の上に塗る粉の費用が割合に多くかゝるといふことにて、何事によらず其主たる所の者より、却て其附帯する所の者に、多く費用を要するにいふ。例へば家を新築しても、建具よりは、其内部の造作などに、多く費用を投ずるが如し。

餅を搗いた日にやくと火にたゝる。

餅搗の日に餅をやくと火にたゝるといふ俗説。

もつけの幸。

思ひ設けぬ幸といふ義なり。僥倖の事なり又不利なりし事が却て幸福となるをいふ。俗に非常の凶事を物怪といふ。

持つたが因果。

己之を所有すれば、其れたけの處置を付くる等、却て煩累となるで詮なきとの義。

持つた病は直らぬ。

天性の固癖、之を奈何とも爲難しとの義なり。

持ッつ持たれつ。

互に相依り相扶くることをいふ。

持つべきは我子なり。

子を有することの利なるをいふ。

持つべきものは子。

「謡曲荷登」何者、此の山路をしのぎ、はる／＼來候ふべき、持つべきものは子にて候ふ。

元木にまさるうら木なし。

木の礎が、元の木より劣るといふを以て、新に馴染む者よりは、故舊の者がよしといふに喩ふ。後の妻より前の妻がよしといふ喩に多く用ふ。

原價に爲しかぬる。

商人の折廻(損して賣)して爲に其資本丈の者をも得ること能はざる義。

元の木阿彌。

一旦貧窮より起りて、資産を作りたる後、再び産を破りて故の貧窮に歸る類をいふ。「諺草」筒井陽舞坊順昭大和國郡山城主信昭長と同時代の人二十八歳にて病死す。此時其子伊賀守定次順昭わづかに一歳也。順昭遺言して、三年の間は卒去なかくし置くべしと、ありければ、木阿彌と云盲人其形順昭に似たる故、他國より使者來る時は、かの盲人をほのくらき所におき、順昭は病氣の體にもてなし、相見せしむ。定次三歳の時始て表を發す。(順昭が墓は南都圓證寺に在り)こゝに至て木阿彌なりしことを諸人知れり。今俗にもこの木阿彌といふ事はいり起れり。もとの蒙ちやんと云ふ。こゝは吳下の阿蒙



より出でしならん。  
故の鞞へ收むる。

紛糾したる事を理して故に復する喻。夫婦喧嘩ありて一旦離縁したるもの、故の如くなるをいふ。

故の鞞へはまらぬ。

故に復せざる喻。

元結の自ら解くるは人に戀はるゝまろし。

「萬葉」歎、管、丈夫之戀、亂許曾、吾髮結乃、浪間奴禮計禮。」

元結をまたぐときれ易くなる。

俗説。

藻に棲む蟲の我から招く。

我れと我から禍を招くといふほどの意にいふ。海藻に住む蟲にわれからといふものあり、小さき貝なり、此貝引きあぐればみづから破れくたくるによりわれからといふが、其蟲の名のわれわれと、我からとをかけたる詞の縁なり。「孟子」有孺子歌曰。滄浪之水清兮。可以濯我纔。滄浪之水濁兮。可以濯我足。孔子曰。小子

聽之。清斯濯纔。濁斯濯足矣。自取之也。夫人必

自侮。然後人侮之。家必自毀而後人毀之。國必自代而後人伐之。「陸奥雜話」此歌(孺子あり歌うて曰く云々の歌)の本意は定めて聖人は不礙滯於物、世と推し遷つるの意にて、かく歌ふにてもあらんかし、それを孔子き、給うて、水すむ故に人纔をあらひ、水濁る故に人足をあらふ、是纔をあらはるゝも、足をあらはるゝも、水の自ら取る事なり、小子よくきけとの給り。されば榮辱禍福みな藻にすむ蟲の我から招くといふ事、此歌にてしるく侍るたゞ人をとがめずして手前をつしむにしくはなかるべし。「古今集」あまのかる藻に住む蟲の我からと音をこそながめ世をばうらみじ」

物得書かねば祐筆置く。

無筆者の做語する所にて、自ら物を書する能はざれば書き役を置いて書かしむとなり。

物言はずの早細工。

言に訥にして行に敏なるをいふ。

物言へば唇寒し秋の風。

口は禍門のといへる如く、ウカと物言へば、己れの不

利を招くものなれば、成るべく沈黙を守れとの訓戒なり。

物が知らずる。

「心中萬年草」心細うて悲しやと物が知らずる皿のゆかり」

物狂水こぼさず。

如何なるものにて、我身の害となることを知れば之れを爲さずとの義。「淮南子」狂馬不觸木、獬狗不自投於河、雖三虺蟲而不三自陷、況又人乎。」

物盛なるときは衰ふ。

物の盛事は永久なること能はずとの義。「史記」物盛則衰。時極而轉。「涅槃經」壽命品、夫盛必有衰。「徒然草」竹林院の條、月満ちてはかけ物盛にしてはおとろふよるづのことさきのつまりたるはやぶれにちつきみちなり。」

尺度を手渡しにすると仲が悪くなる。

俗説。

物種は盗まざる、が人種は盗まれません。

姦通はすべからざるものなりとの義。生兒は能く其親に似る者なるが故に、姦通すれば直に生兒に依りて露はるゝとなり。

物には理勘功學あり。

物事理を推して考へて知ることあり。學問の力によりて知ることありとの義。

物の哀は秋こそまされ。

秋の時候は何となく悲想を感じるものなりとの義なり。「徒然草」折ふしのうつりかはるこそものことに哀なれ、もの一あはれば秋こそまされ。」

物には料簡品もある。

事と品とによりては宥恕することも出来るが、此事は宥恕しがたしといふやうの場合にいふ。料簡とは宥恕、堪忍、等の意義あり。

物の名も所によりて變る。

物は同じけれども、土地の異なるに従うて種々其稱呼を異にすとの義。古歌に「物の名も所によりて變りけりなにはのあしは伊勢の濱萩。」

物は新を用ひ人は古を用ふ。



物は新なるを貴び人は老成を貴ぶとの義。「萬葉」詠恋歌「物皆新 青唯 唯人者 恋之 願宜」尙書「人惟貴 器非 求 舊惟新」

物は言ひ様で圭が立つ。

丸い雞卵も切りやうで、四角となる如く物もいひやうで同じ言葉も其語勢語調の如何によりて婉曲の辭を怨罵の辭たらしむるべしとなり。但語に「圓いたまごも切りよて四角物も言ひよて角がたつ。」

物は心の持次第。

うれしくも悲しくも、すべて何事も心次第なりとの意。

物は相談。

物は相談して見れば分らぬといふほどの發語にして、人に相談すべしといふ義なり。

物は試し。

物事は試に經驗して見るがよしとの義。

物は八分目。

凡物事其極に達せざる前が却てゆかしとの義。花を半開に賞し雨を微醉に飲むが如き類是なり。

採溜より振溜。

洗濯する時採んで洗ふよりは振つて洗ふが垢を能く去るとの義。

紅葉の媒。

「諺草」大平廣記に云、唐禪宗の時、于祐と云もの、御澁禁中の下流に遊んで、一の紅葉をひろふ、詩の書付て有けるを見るに云、流水何甚急。深宮盡日閑。慙慙謝紅葉。好去到人間。」于祐別に又一の紅葉に題して云、曾聞葉上題紅葉。葉上題詩寄何誰。是を以て御澁の水上行て流す。宮女韓夫人これをひろふ、後に于祐は韓夫人といふ人を頼んで、其門下に居る年を経て、帝あまたの宮女を追放たれるに、韓夫人も其中なれば、韓夫人のよしみを以て、終に于祐に妻す。婚禮の時に至て、各々の紅葉を取出して、示せしに、互に詠せし詩也。韓夫人を見て、于祐夫婦に謂て云、今日媒人をもてなすべし、韓夫人笑て詩作りて云、「一聯佳句隨流水。十歲幽蘭滿葉。今日卻成鸞鳳友。方知紅葉是良媒。」紅葉の媒と云事はこの故事より起れり。この事を歌に「なかれての名にや立なんくれなるの一葉なうけし水くきのあと。」

紋切型。

形式上の定まりたることを例の如くいふとの義。

門前市を爲す。

人の其門に出入すること多きをいふ「漢書」鄭崇傳「上貴崇曰、君門如市人。何以欲禁禁切主上。崇曰、臣門如市、臣心如水。」

門前の小僧習はぬ經を讀む。

「くわん學院の雀巢求を轉る」(ハク)の部)といふに同じ。就きて見るべし。

文選は天下の半才。

平安時代に學者意を文選に用ひし故にいへり「老學庵筆記」國初尙文選。當時文人專意此書。士庶爲之語曰。文選關秀才半。」

門徒の正月。

世俗一般に正月に縁喜を祝うて寺とか僧とか死を聯想するものを忌む、然るに門徒宗にては皆さんお墓へ参りませう、これより有難い事はない、と續けて云ふ。死と云ふ事を忌まずとの意。

門徒は佛正座で神側。

門徒の宗旨は佛を正坐にして神を側にするとの義。

門徒物知らず。

他の宗派門徒をせしりていふ。親鸞黨の一途に彌陀を尊信のみして佛學せざるをいふ。

門徒物知らず法華骨なし禪宗錢なし淨土情なし。

門徒、法華、禪宗、淨土、を罵りたる語。

門に入らば笠をぬげ。

「香紀」神代卷「諸神噴素戔鳴尊。曰。汝所行甚無賴。故不可住於天上。亦不可居於葦原中國。宜急適於底根之國。乃共逐降去。于時霖也。素戔鳴尊結東青草以爲笠。而乞宿於衆神。衆神曰汝是躬行濁惡而見逐。如何乞宿於我。途同距之。是以風雨雖甚不得留休。而辛苦降矣。自爾以來世諱著笠。以入他人屋內。有犯此者。必債解除。此太古之遺法也。」

木綿布子にもみの裏。

表面より裏面のよくて、不調和の事。

桃栗三年柿八年柿は九年でなりかゝる。

種子を下して實を生ずるに至るまで、桃栗は三年を要



し。柿は八年を要し、柚は九年を要すとの義。又桃栗三年柿八年梅は酸いとて十三年ともいふ。物事一定の順序を経過せざるべからざるをいふ喻なり。

燃ゆる火に油をそぐやう。

怒れる者を、更に怒らす如く、事を増長するに至るをいふ。燃ゆる火に薪を添ふるやうともいふ。

燃ゆる火に薪を添ふるやう。

前の諺に義同じ。帝範「惡火之燃添薪、望止其滅」

燃えくひに火つぎ易し。

一旦酒色怒其他の事に感溺したる者の之を禁止すとも亦再び其事に接すれば直に心を蕩するに至り易きをいふ。燃え杭の再燃し易きに喩ふ。やげば、つ杭に火がつき易いともいふ。

燃えついでからの火祈禱。

時機既に後れたるをいふ。平素火の用心を愼まずして家に火の燃えうつりてから火の祈禱するは既に遅しとの義。

貫ふ物なら藜でも。

藜は無用の者なり、されども己より人に與ふるにあらで人より己れの方に貫ふものなれば是にてもよしとのことにて、燃深き燄食のものをいふ。

貫ふ物なら元日に御弔ひ。

前の諺に同じ。元日に御弔ひは不吉なれども貫ふものならばよしとの意。

貫ふ物なら夏もお小袖。

小袖は夏時不用のものたれども、貫ふものならばよしとの意。

漏る釣瓶にたまる桶。

釣瓶桶の水が多少漏れても、汲みてやまされば手桶に水がたまるとの意。或は曰く一方は減らし一方は溜むる、即ち貫ふものと貯ふるものとを對照したる喻なりとの意。

守に守れぬ子は藪へ捨てよ。

心に怪と思ひて易からざる事は、捨て、吉凶を見よとなり。

もろこし四百餘州。

「使川全世」光武中興仍併省郡國十縣道侯國四百餘所

千歲寶掌和尚詩云「行盡支那四百州。此中偏稱道人遊。」

や

及より出せる錆刀。

身から出た錆(ミの部)に同じ。「吾吟我集」思ひしみて切るにも切られぬは及より出せる錆刀也。「桓譚新論」豈所謂肉自生、蟲。而人自生禍者耶。」

楊枝一本削らず。

不細工をいふ。手不精なるものをいふ。楊枝には臍の上へ帯を締めたる者を貫へ。

楊枝の使かけを使ふと仲が悪くなる。

楊枝のやうな手足。

手足の繊細なるをいふ。「忠臣骨砥刀」こなさんが楊枝のやうな手足にて泥田の中の田植業、御山姿が五文きり下がりましよと戯むる。楊枝は折て捨てないと化る。

楊枝を手渡しすると仲が悪くなる。

洋服一割髭二割。

凡物品を購ふに、洋服を着たるものは一割高く、髭を蓄へたるものは、二割高しとの義。明治時代の諺なり。養由に弓をいふ。

釋迦に説法といふが如き類をいふなり。「淮南子」養由基楚將、善射、去楊葉、百步射之、百發百中、楚恭王獵。見百猿逸避、箭。王命由基射之。由基始調弓、矯矢未發。乃抱樹而號。俗諺の起こりに出たり。射術の達人に對して弓の事を云は、却て笑を取るの媒也。世の人曲藝小技あれば精妙の術を偕し雲泥の隔ある事をしらず誠に養由に對して弓をいふの類なり」と諺草に見ゆ。

養老の泉を飲めば老人も若やぐ。續日本紀七、養老元年十一月の詔に、「朕以今年九月、到美濃國不破行宮、留連數日、因覽當郡多度山泉、自盥手面、皮膚如滑、亦洗痛處、無不除癒、在朕之躬、其驗、又就而飲之、浴之、者或白髮反黑、或積髮再生、或開目如明、自餘痼疾、或者皆平愈、又萬葉六にも、



「此泉をよめる、從古人之言來流、老人之、變若云水會、名爾貢、湖之瀨。」といふ哥あり。

夜行すれば月やけがする。

女子の夜行を戒むる爲にかくいふなり。女子はすべて顔色のやけて黒くなるを嫌ふものなれば、夜行すれば月やけがすると威しつけたるなり。

後日に鹽から嘗めやうとして今日から水は飲まれぬ。

末の確定せぬ事を、前より準備出来ぬとなり。

焼餅と缺餅と焼く方がよい。

婦人の嫉妬は婦徳を害するものとして之れを思ふども、又其夫が他の女と情を通じて家を外に遊蕩度なき時にも、悠然として打ち捨て置くは、家を持つにも、情の上よりも、孰れもよろしからず。されば矢張り嫉妬も必要なりといふ意なり。嫉妬の事を俗に焼餅をやといふ。(焼餅をやくの條参照すべし。)缺餅は餅を薄く切りたるものにて、乾して後炙り食ふものなり。故に對してやく方がよいといふなり。焼餅やくとも手をやくな。

鹿相をすなどの義。

焼餅を焼く。

りんきすることないふ。もと遊女より出でたるなり、やくとは厭することないふ。花街にていひ初めし流言なるべし、今手を焼いたなどいふ俗語も是より轉じたる詞か。「やつこもんどう」に、「やくとは、オキニ入ルといふ心なり」とあり炭火の事をオキといふそれに手を入るゝを御氣に入るに通はせたる隠語か、やくはだますこと、もちは座もち、取もちのもちにて、とりつくらふほどのことなれば、だましてとりつくらふ事をいふ。

薬師の前地藏の後

暗夜のことをいふ謎、地藏の縁日は、二十四日、薬師の縁日は、八日なればなり、「新撰狂歌集」さる寺に地藏院は女を好き、薬師院は若衆を好みければ、すきくは地藏薬師の前後、へだつ所は蟻のとはたり。」役人と木端は立てるほどよし。

立てるとは敬して拜むやうにするをいふ。疫病神のやう。

甚しく思ふこと、疫病は人の最も思ふ所なり。

薬罐的

事に熱し易く、又直に冷却し易きをいふ。

薬罐でゆでた章魚のやう。

手も足も出ないといふ義。薬罐の湯出鮪ともいふ。

焼後の釘拾ひ。

巨大の損害失費ありたる後に些細なものを收むる喻なり。

焼石が飛び出た。

飲酒の欲を制すること能はざるをいふ。

焼石に水のやう。

大酒家に少量の酒を飲ましむるが如き類をいふ直ちに飲み盡すをいふ。焼石に水を注ぐに、忽吸収せられて直に消失するなり。

焼け木に火付き易し。

焼え木に火が付き易い(モの部)に出づ就きて見るべし。

やけ酒を飲む。

事意の如くならず、失敗に失敗を重ねたるに際し、暴飲して強いて悶を遣るをいふ。

焼けた稻荷で鳥居が無い。

取柄がないといふ謎にて、鳥居と取柄をもちりたるなり。稻荷には鳥居が多きものなれども焼けた稻荷には鳥居がなきなり。

火傷火に懲りず。

前の失敗に懲りず、又々其事に手出しするを火傷せし者の火を懼れざるに喩ふ。

やけのやんばちをいふ。

無理の言を吐きて我意を募るをいふ。

焼野の雉子夜の鶴。

親の子を思ふ愛情の切なるをいふ。雉子は住める所の野原が焼け出しても子を抱きしま、容易に飛び立たず。鶴は子の護衛を爲して夜間寝ずに居る。何れも子を愛すること深きものなり故に子の愛情をいふ喩とす。「白子文集」琵琶行「第三第四絃冷冷、夜鶴憶子籠中鳴」「話曲唐船」たとへば親の子を思ふ事人倫に限らず焼野の雉子夜の池梁の燕も皆子故こそ物思へ。」



焼場に銅壺を引くやう。

歌なうたふときなど聲の悪しき形容。

焼原に霜が降つたやう。

黒き顔に白粉を塗りたる者が所々はけ落ちたる形容、醜婦の白粉を厚くつけたるをいふ。

兇暴は貧から、茶は罐子から。

人の暴を爲すも、もと貧窮より湧き出て、茶は罐子より沸き出づとの義。「孟子」富幾子弟多頼。凶幾子弟多暴。

焼け木杭に火がつき易い。

燃え杭に火がつき易い(モの部)に出づ。

夜叉が馬をはなしたやう。

醜き人の驚き呆れたる體をいふ。

夜叉が嫁入。

醜女の嫁入をいふ。

やさしき人にも力あり。

人は見かけによらぬと云ふ義、温順柔和の人にして力あるをいふ。

夜叉の如し。

容姿眼光のすさまじく猛悪なる形容。

夜食に若し夷膳を据えたら直すと悪い。

彌次喜太で道中。

二人連にて氣樂に旅行すること。膝栗毛の彌次郎兵衛と喜太八との滑稽洒落の道中より出づ。

安請合は期にならぬ。

輕諾する者は必ず頼みにならぬとの義、輕々しく承諾することを安請合といふ。

安賣爲るな。

薄き報酬にては人の聘に應じ、或は奉職することなれとの義。

安からう悪からう。

物價安直なれば、其品質亦悪いとの義。

安はたごの善馳走。

氣味のわるく油断のならぬ義。

安物買の銭失ひ。

安物買へば鼻落つるに同じ。

安物買へば鼻落つる。

安直なる物品を買ひて却て後悔すとの義、實淫を買へば鼻を落す(梅遊にッ)に至る。ことあるより、出でたる語なり。

やすりかすりを取る。

鏝で偷む義、食糞甚しき義。

瘦腕にも骨あり。

役立たぬやうに見えても、役に立つとなり。

瘦せ馬に荷が過ぐ。

力量に不相應なる重任を負ふことをいふ。瘦せたる馬に重荷のやうともいふ。又小舟に荷が過ぎたともいふ何れも同じ義なり。

瘦馬に針たてるやう。

やせ兒にはすれと同じ。

瘦せ我慢をはる。

己の力に堪へ得ざることを強いて爲さんとすることをいふ。「博覽古言」此れは政の道を進ぶるなり。誇へば馬疲る、時は如何ほど鞭をあてても、勢力なければ騙

ること能はずして、鞭を畏れざるものぞ。其の如くに民貧しく詰る時は生命を續きがたきに依つて、食欲深くなり刑罰法度を畏れずして、科をなすもの多きなり。云々」

瘦せ子に軟綿。

泣き面に蜂(ノの部)に同じ。

瘦馬鞭に驚かず。

墮落したる者、制裁を畏れざるが如きをいふ。「墮落論」

「疲馬不<sub>レ</sub>畏<sub>二</sub>鞭<sub>一</sub>。弊民不<sub>レ</sub>畏<sub>二</sub>刑法<sub>一</sub>。」

瘦せ子にも産神。

死に垂々たる疲子にも産土の神の加護すると思へば、氣丈夫なりとの意。

瘦せ地の豆の猿啼かせ。

地味の瘦せたる如に作り豆の能く熟らざるをいふ。猿なかせとは豆が熟らざるを以て猿の食ふに乏しきないふなり。「職人盡歌合」戀すれば瘦地の豆の猿なかせ涙

の川は今ぞまじける。」

瘦せたる馬に重荷のやう。

任重に過ぎて堪へがたき喩。



瘦せても枯れても武士は武士。

如何に零落しても武士は武士の氣骨體面存すとの義。

「孟子」故士窮不失義。

瘦せても枯れても幹が幹。

前に同じ。

瘦法師の酔好。

身に不利なるものを欲する喻。酔は骨を柔にするものなり。故に云ふならん。瘦せたる者酔を欲めば猶瘦するなり。

屋臺見せの蟹のやう。

しやちこばりたる形容。又手足杯のもぎとられたるをいふ。

奴に毘が無い。

あるべきものなきをいふ。

八坊主七つ瀧。

「本朝俗語志」越後高田の近所、新井宿の近在に、東西に山あり。山間凡一町ばかりなり。八つ時に西山の影東の山へうつる、大入道の形なり。七つ時は瀧のかた

ちにつる、新に瀧の出来たる如し。

雇はれ人に科なし。

人に雇はれて、其人の指押を受けし者には、罪科責任なし。唯之を使役して、其事を爲さしめたる者に、貴任もあり、従つて罪科を負はざるべからずとの義。

宿なし犬のやう。

ころつくをいふ。歸する所のなきものをいふ。

雇ふ乞食は冷飯食はぬ。

人は如何なる程度迄零落するも、尙傲慢心あるをいふ。

雇や穢多も馬に乗らぬ。

前に同じ。雇やといふは雇へばの意。

宿屋の嬖に狐の魅たやう。

多忙にて、きり／＼舞をする體。

柳に風折なし。

柔弱なるもの、却て強き喻なり。體質の脆弱なるもの却つて病に打ち勝ちて長壽を保ちゆくが如き類をいふ。柳に雪折なしとも柳の枝に風折なしともいふ。参照すべし。

柳に雪折なし。

柳に風折なし、柳の枝に雪折は無し、皆同じ意なり。

千利休の歌に「降ると見れば積らぬさきに拂へかし。雪に

は折れぬ青柳の絲。」

柳の枝に雪折は無し。

柔弱なる者の却つて強き喻又善柔にして、物に忤はず、世と推し移る者は、自奇禍を招くことなしとの義。

「淮南子」木強則折。革固則裂。齒堅於舌。而先之敵。

口義云木強則折。如藤如柳則難折。つよきはむづ折れハツの部に反對の意なり。参照すべし。

柳原大納言。

古衣のことをいふ。東京神田柳原には古着商のみ軒を並ぶ。これより洒落に柳原大納言より賜はりし服なりとて古衣のことをいふ俗説となれり。

家根越しの天の川。

遠く隔絶せるを以て、話を通じ難しとの義。假名手本忠臣蔵「チト咄したい事がある、やれこしの天の川で

矢の如し。

水の早く流れ歲月の疾く過ぐる形容。  
矢張野に置け、れんげ草。  
物のもとの状態に在るをゆかしとするをいふ。手にとるな、矢張り野に置けれんげ草といふ句の初めの手にとるなを省きたるなり。紫雲英草の野に在るが幽しけれども手に取りては趣なし。されば矢張り自然のまゝなるもとの野原に置いて見るがよしとの義。  
野巫醫者がうにころろを拾つたやう。  
喜悅の有様をいふ。  
野巫醫者が七味調合をするやう。  
事を爲すの額る緩漫なるをいふ。  
野巫醫者の薬味箆筒。  
山師の玄關前と同じ。薬味箆筒とは漢方醫が草根木皮種々の薬品入れたる引き出しの多きたんすをいふ。庸醫は徒に此薬味箆筒を飾り立て、患者を引かんとするなり。  
庸醫者の玄關のやう。  
玄關ばかり立派にて其實内手の窮乏なるをいふ。



野巫醫者の手柄談

拙劣なるものが、手柄らしく自慢話をするを嘲りていふ。

藪の耳の切れたるごとし。

意義未だ詳ならず。

藪から棒。

甚だ唐突なること。甲と乙と談話をする際に丙が其話柄に關係の無き事項を突如として語り出すが如きないふ。

藪に捨子。

子を捨つる藪あれど身を捨つる藪なし(この部)を参照すべし「天の網島」なふ悲しやと、言ひ捨つる、跡に見捨つる、子を捨つる、藪に夫婦の二肢竹、永き別れと藪に馬鋏のやう。  
あたり次第にかきあつむといふ義。

藪にも香物。

「藪の中にもこうのものを見よ。」

藪の中で屁を放る。

人の知らざる所にて醜行ある喻。  
藪の中にもこうの者。

庸醫にも功者ある如く、拙劣なる者にも非常の大功を爲すことあるをいふ。此諺の起二説あり、一説に司馬懿が登知野夫有ニ功者一の語より出づといひ。又一説に尾張阿波手森といふ處に、藪の中に壺をふせて、往來の瓜、蒟、鹽、の買人、其我が賣る物を納め置き、香物自然となれて瓜、蒟に萎穢を少し加へて、毎年極月廿五日、熱田神社に煤拂と、二月初午の神供とに、獻す、此香物より、いひひるめたりとぞ。

藪蛇。

藪をついて蛇を出すといふを略していふなり。

破れ靴を捨つるやう。

瘻も惜む色なきをいふ。「釋迦如來誕生會」に「破れたる菓ぐつを捨つるより猶惜しからず。」

破れ頭巾で耳にかゝる。

耳に障るといふ隠語。

弊れても小袖。

品質の良き者は破損する至にりても、猶其實の美を失はざる喻。人にていはば、零落するに至りても、元貴かりし者は賤しき事を爲さずといふ義なり。「殺梁傳」朝服必加於上冠冕雖舊必加於首。

藪をついて蛇を出す。

爲さずともよきことを爲して、意外の不利厄難を惹起すること、自ら求めて禍にかゝる義。棒などにて藪をつきし爲に蛇の現はれ出て來るに喩ふ。

山がらの胡桃まはすやう。

彼方此方取り廻したるばかりといふ意。

山師の玄關のやう。

外觀を虚飾する喻。投機者流の其玄關を飾りて俗眼を眩耀せんとするに喩ふ。山師の玄關前ともいふ。

山高きが故に貴からず。

外觀の立派なるは貴ぶるに足らずな、實質のよきが貴しといふ程の意。「實語教」山不高故貴、以有樹爲貴。

日本は言擧せぬ國。

言擧とは揚言する事。万葉十三の長歌に「阿蘇島倭之國者、神柄跡、言擧不爲國難、然吾者事上爲(下略)また同卷に「葦原水穗國者、神在國、事擧不爲國、雖然辭擧、敘吾爲(不略)。」

山と山と重ねて外といふ字にえかけよ。  
出て逃げよとの謎。山と山とを重ねれば出の字となり、外といふ字にえをくれば逃となるなり。

山に千年海に千年。

世味の辛甘を嘗め盡したるをいふ。老耄なる者をいふ。小蛇は山に千年、海に千年住みて、龍となるとの俗説より出でしならん。

山に躓かずして、埜に躓く。

大事に失敗せずして、却て小事に失敗する喻「韓非子」不躓於山而躓於埜。「淮南子」堯戒曰戰々慄々日々慎。一日莫躓於山於埜埜。」

山に登る時汁をかけて飯を食ふな。

俗説。

山のあなただの水掛論。



論據もないことを争ふないふ。

山の芋が鰻と爲る。

地位の卑き者が非常に出世したる喩。「祇園祭禮信仰記」天下取、國をとろく、とろく、汗山の嶺からうなき

とは早い出世のやつこらさ。

薯蕷で足をつく。

いやしむかな木で目をつく、(イの部)と同義。就きて見

るべし。

薯蕷で簽を掘るやう。

難くして到底其効なきことをいふ喩。

山の神があれる。

妻の怒ること。山の神とは妻といふ異名なり。奥様を

(おみさん)といふに出でしならんか。

山の神に睨を見せたやう。

女の怒りたる面貌を形容せるならん。

山の主は己一人。

一人にて私に利益を壟断すること。

山の蓬萊ほどある。

物の澤山なる喩。班工が多く蓬萊工を描く故に多き。

山の物は山盛。

桃栗など盛り上ぐることを。山盛りとは山のやうに高く

積み上げて器物にも入るゝないふ。

山は富士、瀧は那智、橋は錦帯。

日本にて名高き者山は駿河の富士山を推し、瀧は紀伊

の那智瀧を推し、橋は周防の錦帯橋を推すとすなり。

病と荷物と軽いがよ。

病人は其病の輕きを欲し、人夫は其荷物の輕きを欲す。

病の重きも荷物の重きも何れも苦しきものなればな

り。

山人の薪に花。

「煙山録」不束ならぬ山人の薪に花とはこれならん

病癒りて醫癒る。

人が病氣の時は醫者に信頼して其命に隨ひ生を衛るこ

とを慎むが、病少し癒ゆれば、早や油断して醫藥の事

を打ち忘れ、反りて病氣の重くなるやうの事あるをい

ふ。始めに慎みて終に忘ることをいふ義なり。「説苑」

敬慎篇「官怠於宣成。病加於小愈。」

病は口より入る。

人の疾病は多くは口腹の慾より起るとの義、傳芝が口

銜、病從口入。禍從口出。

山蛭に喰ひつかると、雷が鳴るまではな

さぬ。

俗説。

病を知れば癒ゆるに近し。

自ら其缺點を知るときは、其を改善するに勉むる者な

り。病氣といふことを氣が付けば治療を加ふるを以て

癒ゆるに近しといふなり。

楊梅の擇食。

楊梅を食ふとき、先其美きものを撰び、遂には之を盡

すに至る者なり。「吾吟我集」楊梅のふりぐひなれや疾

し遅し誰身ひとつ世に残るべき。」

山を攻めて金を取るやう。

山を掘りて金を取れば後に水旱の災ある如く、一時の

利益を計りて後害を遺すないふ。「草木子」攻山取銅

鐵。鑿地數百丈。銷陰之精。地祇空虛。不能含氣出

雲。水旱之災未有不由此也。」

山を抜く力あり。

強力なること。「項羽本紀」力拔山氣蓋世」

病足に腫足。

やせ子にはすねといふに同じ。就きて見るべし。

暗に手をひき出すやう。

くらがりから牛をひき出すやう(クの部)に同じ。

闇夜に鐵砲。

見當無しに危険の事を爲す喩。

闇夜に提灯を得たやう。

依頼する所を得て大に喜ばしき喩。

闇夜の飛礮。

骨折の甲斐のなきこと、徒勞に關する義なり。

闇夜のにしき。

其甲斐なきこと、見榮えせぬこと。「諺草」無用なる事

の喩なり。「漢書」云宮貴不歸。故鄉。如衣錦夜行。」蘇

武書曰夜行被錦不足爲榮。」



貫之の歌に、「見る人のなくてちりぬるおく山のみちは夜のにしきなりけり」

病む身より見る目。

枕に臥す病人よりは、其側に侍する者が、却て心を苦しむとの義。

病眼に茶をぬりたやうな日和。

昔は眼病に茶をぬりたり、一時爽になるなり。ぼんやりしたやうで又た、はつきりしたる天氣をいふ。春の空なり。

病め醫者死ね坊主。

醫者は病人多きに從ひ收入多く、僧侶は死人多きに從ひ收入多し故に醫は人の病まんことを欲し、僧侶は人の死せんことを欲すとなり。

矢も楯もたまらぬ。

拒み防ぐこと能はずとの意にて情思の切迫して殆ど堪へがたきをいふ。即ち矢にて楯にても敵の襲來を拒ぐべからずとの意にかる。

守宮が食ひつくと雷が鳴らぬうちは放さ

ぬ。

俗説。鎧が降つても構はぬ。

危念の身に切迫したることあるにも拘らず、何ともせず無頓着なるをいふ。

槍先の功名。

武を以て功名を立つること。

やらかもので育つ。

お粥ばかり食ふといふこと、絹物を着せて育つといふことのもちり。

やらす取つたり。

饑食なる者の所業、只管人より與へられたる物を取るのみにて、己の物を人に與ふることなしとの義。

やらすのがさずぶつたり。

「やらす取つたり」に同じ義なり。

やらす奪取。

強慾の事。

槍持のせんちのやう。

せんちで槍(セの部)の條参照。

槍持槍を使はず。

唯之を待つのみにして使用する能はざるをいふ「椰子」  
「屠者食糞糞」徳川時代の大名の行列に槍持あり、これに基づく。

やる時に着物をぬげ取る時に着物を着よ。

此は前人の諺なり。礎をやるときは、風烈しくして、事ある時なれば、裸體となつて働かざるべからず。取る時は、無事なる故、衣を着けて可なりとの義なり。

八百膳を茶漬にする。

贅澤を極むる事。(八百膳は東京淺草區山谷にあり昔時有名なる料理屋なり。繁盛の頃飲食して七兩貳歩なり

矢を射る如し。

迅速なること。



唯識三年俱舎八年。

之を學修するに多くの年月を要するをいふ。唯識、俱舎共に佛教の學なり。

勇士は櫓の音に目をさます。

常に寸分の油断なく、武道に心掛める武士は、櫓の鳴るを聞かば、熟眠中にも、直に蹶起すとなり。

勇將の下に弱兵なし。

首領たる者勇氣に富めば其部下に弱卒なしとの義「孫子」死人身邊有活鬼。勇將手下無弱兵。

遊女の誠と雞卵の四角なのは無し。

卵に四角なるは無きが如く、遊女に誠あるは絶無なりとの義。

柚の木の手棒でうたれると三年生きなす。

俗説。

幽霊の滾風。

幽霊の滾風に逢ひし如く、何時とは知れず、其姿を隠すをいふ。

幽霊の飛脚に來たやう。



やせたる形容。

幽靈のやうになつた。

消えて跡方なきをいふ。

雪壓して松の操を知る。

雪降りて始めて松の背きを知るとなり。危急艱難の事變に遭遇して初めて其人の節操を知り得べしといふに喩ふ。

住がけの駄賃。

已去らんとする時に、何事か爲す所あるをいふ。(朝がけの駄賃ともいふ。)

往大名に歸り乞食。

往く時金を持ち、歸る時は既に費消し盡したること。遊女通ひする者の類をいふ。往く時は勢よくして大名の如し、歸る時は勢なくして乞食の如しとの意。

雪と云ふ字を墨でかく。

赤き心を墨でかくと同じく白き雪と黒き墨との連想を云ひたるなり。

雪と炭のやう。

性質の反對せること、非常に相違あることに喩。

雪の翌日は裸虫の洗濯。

雪降りし翌日は天氣清明なりとの義、裸虫とは裸もの(衣裳を多く持たざるもの)をいふ、降雪の翌日は天氣清明なる故裸者が喜ぶとなり。

雪の翌日は乞食も洗濯をする。

前に同じ。

雪のはては涅槃。

涅槃は舊曆二月十五日なり、其の翌日より雪ふらずとなり。

雪の前の熊野炭。

相違あること性質の相反する事をいふ喩。

雪は犬の伯母さん。

犬は雪中にも寒を覺えざるものにて却つて雪を歡ぶなり故に雪を犬の伯母さんといふなり。

雪は豊年の兆。

「毛詩傳義」豊年之冬、必有積雪。謝靈運が雪賦「盈尺則呈瑞於豐年」朱子曰「雪非能爲豐年、其所以然。

以其凝結陽氣在地。至來歲發達而生長萬物也。」  
行きはよ〜〜歸りは恐し。

行くときはよけれど歸る時が恐るしとの義。

雪佛の湯好み。

自福を求むる喩。雪佛とは雪塗磨のことにて之れに湯を濯ぐときは雪融けて雪佛は其姿を失ふに至るなり。

雪道と魚の子汁は後ほどよい。

雪道は人の踏み開けたるあとよく、魚の子汁は鍋底になる程味よしと云ふ義。

雪も水も解くるやう。

人の言語動作の濃厚にして態到なること。

油断大敵。

油断とは心の弛みて念慮を失ひ注意を忘るの謂ひなり。諺の意は油断は大敵の如く恐るべきものなりと心得て、萬事に付けて能く注意警戒を忘るべからずといふにあり。「道歌集」油断をば大敵なりと心得て堅固にまもれ己が心に。「駿騫雜話」大敵外になしの條「寛永の頃にかあらむ、永井信濃守尙政しきりに昇進して寵

任せられけるが、其頃非伊掃部頭直孝一代の元老にておはせしに、或時邂逅して我等弱年の身にて、特恩を蒙りて重職をつとめ候事誠に至極と申すべく候、そこもには御老功の御事にて候へば、我等心得にも成るべき事思し召しよりも候は、仰きかされ候へとあれは、掃部頭先感じて、奇特なる御心得にてこそ候へいかにも一つ存じよりたる事候ま、傳授し候べし。されども大切なることをあからさまには申がたし。いよ〜御間あり度候は、某が宅へ御越候へといはれしかば、日を定めて禮服を着し彼宅へ行かれしに掃部頭出で、對面の後。世話に油断大敵といふ事、定めて御覺あるべし、某が傳授外には無く候、此一言にて候て、必ず御忘れあるなといはれしとぞ。むかし周の武王即位のはじめ、太公望を召して、簡約にして、行うて恒とし、萬世に傳ふべき道ありやと問ひ給ひしかば、太公望まうさく、其旨丹書にあり、王もし聞かむと欲せば齊戒したまへとありしかば、武王齊戒端冕して東面して立ち給へり。其時太公望西面して、丹書の言を武王にさづけて曰く「敬勝、忘者吉。怠勝、敬者滅。義勝、欲者從。欲勝、義者凶。」今油断大敵の語俗話なれども丹書



の戒にかなへり。云々」

油断の字の出所。「涅槃經」三十二に云。譬如世間有諸大衆。滿二十五里。王勅一臣。持一油鉢。經由中過。莫令傾覆。若棄一滴。當斷汝命。復遣一人。拔刀在後。隨而怖之。臣受王命。盡心堅持。經歷爾所大衆之中。雖見可意五邪欲。心常念言。我若放逸。著彼邪欲。當棄所持。命不全濟。是人以是怖因緣。故乃至不棄一滴油。此の油鉢の喩より油断の字出でたるならんといふ。

讓狀 がものをいふ。

「卯月挽」おのれ一人が智慧でないサアゆづり狀が物を言ふ。

湯出章魚のやう。

酩酊の體をいふ。

湯とも水とも成らず。

また方針の定まらぬこと。「京みやげ」母が身にあるそのうちに湯とも水ともなりはせて。

湯に入るとま肩から滯すと感胃ぬ。

俗説。

湯に入る時先づ乳をぬらせば風ひかぬ。

俗説。

湯の辭義は水になる。

浴湯の際辭讓する間に湯が冷却して、水と爲るといふほどの義にて、辭讓すべからざること辭讓するなれとの義なり。「薩摩歌」阿呆な斟酌し過して湯の辭儀は水になる。

湯の中で屁を放るやう。

水の中で屁を放る(ミの部)に同じ。

湯腹も一時。

飢ゑたる時は湯を呑みても一時飢を忍ぶべしとなり。

指ぬきの穴を虫にくぐらるゝと指が腫る。

俗説。

指は切つて捨てられぬ。

兄弟相互に扶助し合ひて捨つること能はざる喩。

指環をはめてると肩がはらぬ。

俗説。

夕刻迷藏をすると隠坐頭が出る。

俗説。

夕方に赤兒を家の外へ伴れ行く時は墨をつけて印をして置かねば山姪に取替へらる。

俗説。

夕刻に子供が騒ぐ時は雨が降る。

俗説。

夕刻は一日の大晦日。

夕方の繁忙なるをいふ。

夕立は一日降らず。

驟雨は暫時の間降りて一日間も降ることなし。次の諺

参照。

夕立は馬の背を分る。

驟雨は一村一郷の中にも、降る所と、降らざる所とあり、馬の背上にてすら右と左とにて晴雨を異にするほどのものなりとの義なり。「續博物志」俗以五月雨爲分龍雨。一曰兩轍雨。夏月に降る雨を分龍雨といふは夏雨は龍の行ふ所にして、或は一村一郷を隔て、降らず、故に兩轍雨とも云。車の轍を隔つるほどにて、

降り降らぬ所あるをいふ。分龍雨は所謂夕立雨なり。

夕虹百日の旱。

夕方の虹は晴天の兆なりとなり。朝虹に川越すな(ア

の部)参照すべし。

湯水のやうに使ふ。

金錢を浪費するをいふ。

弓するとも寐鳥を射ず。

「論語」述而篇「子釣而不網。弋不射宿。」

弓と絃の相違。

相違の著しきないふ。一方は弓の如く迂回し一方は絃

の如く捷しとの義。

弓は挽人であたる。

弓の善悪によるにあらず、挽く人の伎倆如何による。

弓も挽きかた相撲も立ちかた。

弓を射るに挽きやうあり、相撲には立ち合ふがありとの義。

弓矢取る身は名を惜む。

弓矢取る身とは武士の剛なり、唐土の虎は名を惜み日



本の武士は名を惜む(タの部)を見よ。  
弓を袋に納む。

治まれる世のこと、「詩經」周頌「明昭有<sub>ニナル</sub>周。式序<sub>ニ</sub>在<sub>レ</sub>位  
載戢<sub>ニ</sub>干戈。載櫜<sub>ニ</sub>弓矢。」是より出でたる諺なりと諺草  
に見ゆ。

弓折矢盡。

術計盡きて如何ともしがたき義。勢の窮まりたる場合  
をいふ。李華が用古戰場文「鼓衰兮力盡矢竭兮弦絶」  
夢と鷹とは合せがら。

鷹を使ふに巧拙あり、其の使ひやうによりて、鳥を捕  
ると取らざるとの相違あり。夢も亦合せやうによりて  
凶ともなり吉ともなるなり。(なく鹿も夢の合せのまゝ  
に(ナの部)参照すべし。)

夢に牡丹餅のやう。

不意の喜びある喻。

夢に夢見し心地。

うつら／＼と何か何やらわづらぬ心地をいふ。

夢は五臓の煩ひ。

腸胃の病ある者は多く夢む故にいふ。  
夢の浮橋。

名のみにて實物なし。夢の中の通ひ路をいふ。古諺に  
「おもかげは見しを限りの途絶にて逢ふ夜空しき夢の  
浮橋。」

夢の浮橋中絶えて。

「新古今集」「春の夜の夢の浮橋中絶えて峰に分る、横  
雲の空。」事の中途に絶たれたるをいふ。

夢は逆夢。

悪しき夢を見たる時は反對に判断せよとの義。夢は逆  
さまともいふ。

夢は三日。

「陸奥歌」よいに付わるいに付夢は三日が大事の物」  
湯本山に雲なくば鹿島洋をわたすな。

湯本山に雲なくば鹿島洋をわたすな。

常陸國平湯邊にていふ諺湯本山は陸奥岩城なり。

由良の港は千軒ある千軒あれば相食。

由良の港は千軒ありて彼我互に交易賣買をなし  
て生活を営むとなり。

百合若大臣のやう。

睡を嗜むをいふ、「百合若物語」相傳九州有<sub>レ</sub>人。名百  
合者。性嗜<sub>レ</sub>睡。或三日三夜不<sub>レ</sub>寐。」

ゆるぐ杭はぬける。

確乎不拔にして、動搖することなき剛毅のものは、事  
を破ることなければ、精神の動搖して定まらざるも  
のは、遂に身の不利を來すと成り。動かざる杭は脱く  
ることなければもぐら／＼動くものは容易にぬくるも  
のなり。故に喩ふ。

湯を水にする。

折角爲したる事を破毀する喻。

湯を沸かして水に爲る。

折角爲したる事の功を棄せざること。習ひ覚えし事を  
忘る、等に喩ふ。

よ

よい時は馬の糞も味噌となる。

幸運に乗ずる時は、如何なる事を爲しても、首尾能く

成効するものなりといふこと。  
好い中には垣をせよ。

中のよい親密なる人同士ほど、懇懇にして物事を等閑  
にするなけれ、然らざれば互に葛藤を生ずるに至る、  
とあればなり、といふほどの義。「省心雜言」隣里欲<sub>ニ</sub>  
高墻。親情欲<sub>ニ</sub>遠方。」

夜溺去して夜糞たれ貫うた。

前の妻を去つて、後の妻の却つて前の妻に劣るをいふ。

よい物の程ならねば名花出來ず。

播く所の種子善からざれば、生ずる所の善きこと能  
はずとの義。

よい／＼が水溜を見たりやう。

躊躇して進まざる喻。

用心に國亡びず。

治に居て亂を忘れず能く警戒して怠らざれば其國家  
安全なりとの義。

用ある時の地藏顔用なき時の閻魔顔。

用ある時は温顔もて人を頼み、用なき時は甚だ無愛想



用心に繩を張れ。

なるをいふ。物事に注意しゆく上にも注意すべしとの義。一休和尚紫野に居る頃、人の書を求むるものあれば、御用心と書きて與へぬ。強いて他のことを求むるものあれば、御用心くと、幾つも書きたる上に、只といふ一字を添へて、只御用心と書きしことありとや。そもく此用心の二字を合せて一字に作り書けば、其文一寸見れば忍に類し、兪忽に見れば恩にひとし、はるかに見れば思ふに似たり。「和漢故事要言」著聞集に云、西行法師出家に成りしより。先は、徳大寺左大臣の家人にて侍りけり。他年終行の後都に歸りて、年比の主君にて御坐。眠に、後徳大寺左大臣の御許に参りて、先門外より内を見入れば、寢殿の棟に繩を引けり、怪しくて人に尋ねければ、アレハ寢居しとて報られたると答へしを聞きて、寢の居たらん何か苦しきとて、恨みける由あるを、兼好徒然草に引きて綾小路宮の小坂殿の棟に繩を張られしは、池の蛙を鴉に取りせじとの用意なる由を断りたる此二つの文章より出でたる詞也。」

用心は臆病にせよ。

「証草」証の意は兼ねて備へ置く事はねんごろする程にせよと云事也。郁離子云早思具舟。熟思具裘。天下之名言也。是も用心は臆病にせよと云意と同じ。困學紀聞「乗車常以顛墜處之。乘舟常以覆溺處之。仕官常以不遇處之無事。」容救身の害、五分の損。他人に容救するは常に身に不利益のみ聚るとの義。備を作る。

世が世なら。

全盛なりし世を思ひ出して其頃なれば斯々あらんと、昔を慕ふ語。鷓鴣の類、夜明ければ己が眼見えざる故に巢を作る。とならず、因て懈怠の人をいふ。夜が明たら巢を作らう。鷓鴣の類、夜明ければ己が眼見えざる故に巢を作る。とならず、因て懈怠の人をいふ。世が世なら。全盛なりし世を思ひ出して其頃なれば斯々あらんと、昔を慕ふ語。鷓鴣の類、夜明ければ己が眼見えざる故に巢を作る。とならず、因て懈怠の人をいふ。夜が明たら巢を作らう。

好時は牛の糞も味噌となる。

好時は牛の糞も味噌となる。縁の切れん事を恐るゝなり。昔伊非諾命、伊非册尊を追ひて黄泉に趣かんとし、櫛に火を點せしによる。又吾妻鏡に、鎌倉の佐介谷に住む者、蟹の旅行中我娘を戀うて屏風の上より櫛を投げ、これを不意に受取れば他人となり親子の縁切れたるなりと云ひて、志を遂げんとせる記事あり。

夜櫛を擲げぬもの。

縁の切れん事を恐るゝなり。昔伊非諾命、伊非册尊を追ひて黄泉に趣かんとし、櫛に火を點せしによる。又吾妻鏡に、鎌倉の佐介谷に住む者、蟹の旅行中我娘を戀うて屏風の上より櫛を投げ、これを不意に受取れば他人となり親子の縁切れたるなりと云ひて、志を遂げんとせる記事あり。

慾に頂なし。

慾に際限なしとの義。「尉繚子」治本篇「百里之海不能飲一夫。三尺之泉。足止三軍渴。臣謂欲生於無度、邪生於無禁。」慾に迷うて目がくらむ。慾に目なしに同じ。慾に目なし。

慾に目なし。

慾の爲に目も開か、心も味みて、何事も一切見えずとの義。(慾には目見え、は又「慾の爲には目も見えず」ともいふ)。「淮南子」説林訓「所重者在外。則爲之拘。逐獸者。日不見泰山。嗜慾在外。則明所蔽矣。」列氏「既符篇」昔齊人有欲金者。清且衣冠而之市。適遇

運のよき時は悲も變じて喜となるといふ如き意。

よきも悪しきも心がら。

よくなるも悪しくなるも皆己が心次第なりといふ義。

夜着の袖口のやう。

唇の皮の厚き者を形容す。夜着の袖口は頗る厚きものなればかくいふ。

よき分別は老人に問へ。

老人の分別あるをいふ。

欲、垢、煩惱。

人に在りて離れ去ること能はざる者は欲心と垢と煩惱との三なり。ぼんぼんの犬追へども去らず。(ホの部)参照。

善く射る者は又善く防ぐ。

攻撃すること巧なる者は、防禦にも長ずとなり。

善感胃者は健康。

俗説。

能く泳ぐ者は能く溺る。

川だち川ではつる、(カの部)参照。



金者之所。因攫其金而去。吏捕得之。問曰人皆在焉。于攫人之金何。對曰取金之時。不見人徒見金。省心銓要。攫金於市者。欲心勝而不。知有羞惡。求珠於淵者。利心專而不。顧其沈溺。

慾の喰違ひ。

慾の熊鷹股裂ける。

慾の爲には目も見えず。

慾の釣針にかゝる。

慾の爲に迷うて、詐偽師などの垂手にかゝること、魚が餌の爲に釣針にかゝるに喩ふ。

慾の無い者には圍が當る。

無慾の者に却て利潤ありとの義。

慾の深い應は爪が脱ける。

慾の熊鷹股さけるといふに同じ。

慾の袋に底なし。

慾ばるときは却て大なる損を招き、底なくなりて漏れ出づるとなり。又慾心に際限のなきにもいふ如し。

慾太り。

慾の爲にふくれて居るとの義。

慾目に昏む。

慾心の爲に蔽はれて、思慮分別を失ふをいふ。

避けて通れ酒の酔。

酔狂者には避けてかまふことなかれとの義。堅石も酔人を避く(カの部)に同じ参照すべし。

横紙破り。

無理非道な事をする者をいふ。紙を縦に破れば真直ぐ破らるゝが、横には如何にしても真直破るべからず、其を破らんとする是無理なり。源平盛衰記「清盛入道の横紙を破りたまふをもなだめられしかば云々。」

横紙を破る。

無理非道の所行を爲すをいふ。前の語参照。

横手を打つ。

恰ばしき事をいふ。

横に車を押す。

無理をおし通すことないふ。

「北條時頼記」横に車を押さうとは、賤しいさとしい未練な心。「西鶴雜留」富貴は惡をいへし、貧は耻をあらはすなり。身體時めく人のいへる事は、横に車ものいて通し。」

横に寝る。

金錢をかりて返さるるないふ。

横根、疔瘡、骨がらみ。

梅毒病にて、横根は最も輕症に、疔瘡稍重く、骨がらみ更に重しとの義。

横の物を縦にもせぬ。

横の物をたてにするは容易の業なるに、之をたにせずといふ意にて懶惰なる者、終日何事をも爲さずして、空しく暮すをいふ。

横禿はたゝいて嗅ぐと新澤庵の味がする。

俗説。

横槍を入れる。

俗説。

横槍を入れる。

甲と乙との争論に、其の双方の弱點を傍觀せる丙の打ち出て議論するをいふ。

夜聲八町さゝやき八町

夜の聲よく遠方に聞え、さゝやくこと亦却て遠方に聞ゆとなり。

義經と向脛。

途方もなき相違の事。よしつね、向ずね。國音相似て事實非常なる相違あるよりいふ。

腹の管から天上のぞくやう。

小智短見を以て廣大の事理を窺はんとする喩(くだの穴、から天のぞく(ク)の部)参照。

吉原が明るくなれば自家が闇。

吉原通ひを繁くすれば、自然家の衰微を來すとの義。

吉原雀。

吉原の事に馴れたるもの、からす籠(カ)の部参照。

夜雀を捕れば夜めくらとなる。

夜雀を捕らうとするは如何にも酷なる所行故之れを禁ぜしむる爲に成しつけていふなり。



四隅取られて碁を打つな。

園蔭の語。

外目で見ればほどよくはなし。

何事にも他より見るだけによくはなきものなりとの義。

よその花は赤し。

他人の妻は自分の妻より容貌品行の優れたる如く見ゆる類、萬事他をよしと羨むをいふ。

夜虹立つて百日雨降る。

俗説。

世の取沙汰は七十五日。

人の噂も七十五日(ヒの部)に同じ。

世の中流れ渡り。

物に凝滞せず能く世と推し移る義。

世の中に下戸と化物なし。

酒を嫌ふものなしといふ意。

世の中の人の心は九合八合。

人の心は九合八合(ヒの部)に出づ。

世の中の人の心は九分十分。

世の中の人の心は九合八合といふに同じ。

世の中は疣相持。

生活は相持に(ミの部)に同じ。

世の中は九分が十分。

世事すべて不十分なるを常とする。九分あれば十分その義。

世の中は寝てこそ福をまうけたれ。

僥倖の福を待つ義。

世中は二世はゆかず。

「万葉」四に「空蟬乃、世世毛二行、何為跡鹿、妹附不相而、吾獨將宿。同七に、「世間者、信二代者、不往有之、過妹爾不相念者。」

「古義」に「二代ゆくとは生れかへりて再び現在を經るをいふ。」と解けり。

世の中は三日見ぬ間に櫻かな。

世の中の變遷速かなるをいふなり。世人の無常なる猶櫻花の如し、花盛開なりと思ふ中に、いつしか夜半の

嵐に吹かれて、枝頭また前日の靚あらずといふほどの意に喩へたるなり。

世は情

世は人情によりて渡るを得となり。

夜半に嵐あり。

油断すべからず、明日をも恃むべからずとの意。『明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐のふかぬものは。』

世は人の持つにあらざ道理の持つなり。

人は道理の下に服従すべきをいふ。

世はもとしのび。

人ほどかく過去の事を追慕して現在をばかなむものなりとの義。『新古今』清輔の歌「ながらへばまた此ころやしのばれんうしと見し世で今はこひしき。」

俊成の歌「行末は我をもしのぶ人やあらむむかしを思ふ心ならひに。」「爲家歌集」何事もふるき世のみぞしたはしきおもひあはするけふぞかなしき。」

宵越の錢を使はぬ。

江戸の職人労働者、其日儲けて其日に消費し、一夜も

貯蓄することなきをいふ。

宵工の朝臥せり。

宵寝する者の、宵たくみには、翌朝早起すべしと却て晏起するをいふ。『説苑』説叢篇、「喜夜臥者、不能二蚤起也。」

宵張の朝寝坊。

夜をふかす者は、必ず朝は晏起する者なり。(朝寝の宵夜をふかす)参照。

讀まん同士書かん同士。

同年輩の者ないふ。又讀まず書かずの徒といふことにて。無學なる者にもいひ、學問に不勉強なるものにもいふ如し。

夜道に日は暮れず。

既に遅くなりて、急ぐ甲斐なきことは、緩りとしても差支無しの義。

世短く意多し。

人世は誠に短きものなるに、思ふこと共た多しとの義なり。『鶴林玉露』古詩云「人生不満足百。常懷二千歲憂。而淵明以五字、世短意常多。是也。」



読みと歌。

魚心あれば水心(ウの部)の如し。

嫁が姑。

姑やさしくして却つて嫁の方あしきないふ。

嫁が姑になる。

娘は嫁となり、嫁は姑となる、次第送りなれば、前の身分に在るとき、豫じめ後の身分となる準備をすべしとなり。「聖範」古詩云。人命百年能幾何。後來新婦今爲婆。一休和尚の狂歌に「世の中のよめがしうといはやなれば人も佛になるはほどなし」

婦としようこと中よさは物怪。

「大和女訓」「よめと舅と密通したるもの、事を諷する事といや、姑と媳との事にはあらず、姑と媳とは申しからぬぞ物怪なる。」

嫁と姑猿と犬。

嫁姑の仲あしきないふ。

嫁と名が付けば我子でも憎し。

前に同じ。

嫁と鉄はこせつかひ。

姑が嫁をいぢつてつかふないふ。

夜目遠目笠の中。

醜婦も、美女と見え、悪人も善人と見ゆるをいふ。夜目とて夜見るときと、遠目とて遠方より見るときは、物の眞偽を判然と見分け難し。又人の笠にて蔽へる時は特に美醜を判定しがたきなり。「吾吟我集」「つき山の石燈籠の夜目遠目かさの中こそなくゆかしけれ」歐陽公の詩に「紅粉尤宜燭下看」

夜目遠目の男女は他が来る。

夜目遠目で見たる時は、美なるが如くなれども、其接近して見るに、暇ある所判然見えて、自ら厭氣を生ずとなり。

婦の涙ほど。

少量なりとの義。

婦は来た時にしこめ。

「顔氏家訓」「俗語曰教婦初來。教兒嬰孩。誠哉斯語。」婦を教ふるは初にせよともいふ。

婦は卑い所から貰へ。

婦を迎ふるには自分の家より位置の卑き家よりすべしとの義。

「隨意錄」「嫁女須勝吾家。娶婦必須不若吾家。」  
「各臣言行錄」娶婦必須不若我家。不若吾家。則婦之事。男姑。必執婦道。」

婦は門から娘は乞者へくれる。

嫁と小姑とは圓満に行かぬもの故、よめを貰ふと同時に娘は乞ふ者あらば與へよとなり。

婦を貰へば姑を貰へ。

口喧しき姑なくば、新婦は氣儘になり易き故に姑を貰ふべしといふ其實姑は貰ふこと能はざれども此語の趣意は姑は婦の嫌ふ所たれども家の爲には却つてよしといふほどの義を含むなり。

婦を教ふるは初にせよ。

「婦は来た時にしこめ」の條に出づ。

四方山の話。

いろくの話といふ義。

よらば大木の根。

かいらば大木の根(タの部)に出づ。「傳家寶」「大樹底下好遮陰。」

夜口笛を吹くと蛇が来る。

俗説。

夜室内を箒くと貧乏する。

俗説。

夜雀を捕れば夜めくらとなる。

俗説。

夜爪を取ると親の目に這入る。

俗説。

夜爪を切れば世を詰める。

俗説、語呂の同じきよりいふ。蓋し夜爪を切れば破片飛んで其何れに入るかも知れ難ければかくいふなり。

夜鶏の啼く真似をすると火にたゝる。

俗説。

夜の蜘蛛は親に見えても殺さねば悪し。

俗説。



夜ひめ粘を賣ると火にたゝる。

俗説。夜耳の穴が痒いと翌日貫物があたる。

俗説。夜耳の穴を掘ると貧乏する。

俗説。夜を畫。

「鷲を鷲」といふに同じ。弱い所に風當る。

やせ兒にはすれに同じ。弱い者虐め。

己れより力の弱き者を虐待するをいふ。弱き家に強き勾張。

調和を失して却つて助けにならぬと云ふ意。弱き者を夫に取る。

「和漢故事要言」人或は己が智の人に勝れ、又は力の他に陪り、藝の人に秀でたるを忍みて、他の非力なるを侮輕しめて、吾手下に付る様の心を云也。」

弱身に附込む風の神。

凡人の身の衰弱せる時は、最もよく感冒にかゝり易しとなり、病氣に限らず、物事また弱點に乗ぜられ易きなり。「昔論經」天下鬼神不能活人、不能殺殺人、亦不能令人富貴貧窮。但隨人衰劣而作怪祟。希望祭祀。若求福必定無也。世俗不知、空被誑惑。殺生造惡。「摩維經」衆生曰、天女曰、譬如人長時非人得其便。「搜神記」孔子曰、物老則群精依之。因衰而至。」

弱めの靈怪。

弱點に乗ぜらるゝ義、譬へば旅行などするとき飢に臨み心恍然として目正しかざるとき狐狸其處に乗じて誑かすやうのことをいふ。「應城波」散る花に雨はよわみの靈怪かな。」

弱り目に祟り目。

不運の時に際し又重ねて災危に逢ふをいふ。弱身につけこむ風の神の條参照すべし。

夜を以て日に繼ぐ。

晝より夜にかけて、業務に勉勵するをいふ。「莊子」夫

愚者。以夜繼日。「孟子」仰而思之。夜以繼日。世を捨つれど身を捨てず。出世間者といへども、吾が身を捨つることなしとの義。

ら

電獸は雲へ乗る。

雷獸は想象の動物なり。雷の鳴る時雲に上るといふ。引力によりて立身する如きをいふ。

來年の事言へば鬼笑ふ。

來年の事は姑く置き、明日をも知れぬ無常の世なるに徒に來年の事を云々するは淺猿しとなり。又遠き未來の事は必ずしも當にならぬものとの意なり。「事文類聚」宋劉伯龍歷位九卿郡守。貧窶尤甚。常在家慨然。將營什一之方。一鬼在傍。撫掌大笑。伯龍歎曰。貧窮固有命。乃復爲鬼所笑。遂止。「雞肋編」人作千年調。鬼見拍手笑。」

羅字しかへも職の中。

羅字とは烟管竹のことにて、烟管の火皿と吸口との間を接ぐ竹管をいふ。

羅字しかへの如き職も猶職業たるものなれば決して耻づるに足らず如何なる職業にても就くがよしとの意を含む。勞して功なし。

骨折して爲したる事の其甲斐なきをいふ。「三略」釋近謀遠者。勞而無功。「莊子」天運篇。今漸行周於

魯。是猶推舟於陸也。勞而無功。身必有殃。」老人の子は影なし。

「風俗通」陳留に富翁あり、年九十にして子なし。田夫の母を取り、婦となせるに、一交にして便ち男子を得たりとて一家争起りし時、丞相丙吉思惟稍久しうして曰く、曾て聞く真人影なしと老公の子影なし、又寒に耐えずと、共に之を試むべしとて八月其の子を取り、裸にせしに獨啼きて寒を言ふ、又並んで日中を行かしむるに獨り影なし、人皆感服す。此故事より出でたる俚諺なるべし。

老人の子は寒がる。

前の諺を見るべし。老少不定の世の中。



老少不定は世の習といふ。  
老少不定は世の習

老も少も死期の定まらざるをいふ、老人早く死するに限らず却て少年の夭折することあるをいふ、「白氏文集」浮世都如夢。老少亦何殊。」

老婆心

おもし過したる心添をいふ、婦女子の仁といふ中にも老婆は、殊に姑息の仁あるものなればなり、「傳燈錄」大愚曰黄蘗恁麼老婆心切。」

浪人餓渴

浪人餓渴して善く食ふをいふ。非常に物事に渴したる思のあることなをいふ。

浪人のひがみ

食祿に離れたるものひがみ根性あるをいふ。

老馬却つて駒となる

老人の却て壯者を凌ぐ働きを爲して侮るべからざるをいふ喩なり。

樂あれば苦あり

樂事の後は、必ず苦しきことあり。樂は苦の種苦は樂

の種の條参照すべし。  
落書に名筆なし。

落書の字に能書のなきをいふ。  
樂が身にあまる。

身不相應なる安樂といふことなり。  
落花枝に歸らず。

落花枝に歸らず(フの部)に同じ、過ぎ去りたることの悔むとも及ばざる義。一旦散り落ちたる花の再び枝に上すことの叶はぬに喩ふ。「五燈會元」落花難上枝。破鏡不重照。」俳句に「落花枝に歸ると見れば胡蝶かな」とあり。

落花狼藉の有様

物のいりみだれ、取り散らしたるを、風吹きたる後に花のちりくくになりて、地に打ちみだれたるに喩ふ。「和漢朗詠集」落花狼藉風狂後。啼鳥龍鍾雨打時。」狼藉の字義。蘇鵬が通鑑演義「狼藉草而臥。去則雜亂。故物之縱橫散亂者。謂之狼藉。」藉は踏むなり。狼のものをふみちらしたる如く、みだれがはしき義なり。  
樂人は若く見ゆる。

精神安樂なるものは容観若く見ゆとの義。  
樂は苦の種苦は樂の種

樂しき事が苦の種となり、苦しき事が樂の種となる義。「心山警策」一期趁樂。不知樂是苦因。」  
樂は貧に在り。

富者は愁心強く且つ種々心勞すること多し。貧に安ずる者は、愁心少く、從て其心ゆたかに樂極むべからずとの義。  
樂は身の毒

逸樂に慣るゝものは困厄の際に事に堪ふる能はざるが故にいふなり。「孟子」然後知生於憂患而死於安樂也。」  
洛陽の紙價を貴からしむ。

所著の書籍が盛に行けることをいふ。「晋書」左思三部賦十年而就。張華見而嘆曰。班張之流也。從是豪富之家競相傳寫。洛陽爲之紙價貴。」  
獵虎の皮

不見識にして人の云ふまゝに順ふ人をいふ。「晋吟我集」ひとたに靡きも果てずあだなるは獵虎の皮のな

てつはにして。

蠟燭は身をへらして人を照す。

我一身を犠牲にして人の爲にする喩。  
亂杭齒

齒列の不整頓なるをいふ。

り

流水腐らず戸樞蠹まず。

能く動く者は健康なりとの義。停滞せると水は腐れども、流るゝ水は腐ることなし。戸のくるりは、朝夕となく動く、故に出つかず。「養生訓」華佗が言に、人の身は勞働すべし。勞働すれば氣消えて、血脉流通すといへり。凡人の身愁を少くし、時々身を動かさし、手足を働かし、歩行して久しく一所に安坐せざれば、血氣めぐりて滯らず、養生の要務なり。……呂氏春秋曰。流水不腐。戸樞不蠹。動也。形氣亦然。」云意は流水は腐らず溜り水は腐る。から戸のちくの、下のくるりは、出食はず。此の二のものは、常に動く故禍なし。人の身も亦此の如し、一所に安坐して、動かざれば飲



食滞り、氣血めぐらずして、病を生ず。  
龍馬のつまづき。

能者の失錯ある喩龍馬とは真馬のこと。  
雌縁状は三行半。

去り状といひて三行半に書けるなり。三行半といへば  
雌縁状の事なり。

理が非でも押通す。

無理に事をなすをいふ。  
李下に冠を正さず。

李下に冠を止さず李を取りしつと疑はるべし。故にい

李下の冠瓜田の履

嫌疑を受くる本なりとの義。「文選」「君子防未然。不  
慮嫌疑。瓜田不納履。李下不整冠。」

六親不和なれば三寶の加護なし。

ろく親不和なれば三寶の加護なし(口の部)に出づ。  
利口却て愚痴になる。

「和漢故事要言」「此心は文盲なる人は物ごとくにさし出  
て、我能く知らぬ事をも、聞きはつりたるまゝに口を

たしく、賢き人の文才備りたる人ほど、さのみ利口だ  
くせぬ者といふ心なり。」  
伶俐な子より白痴な子は尙可愛。

利根氣根黄金の三こんなくば學匠に成りが  
たし。

利根は伶俐のこと、氣根は忍耐の事、伶俐にして忍耐の  
氣に富み猶且資産を有するにあらざれば學者になりが  
たしとなり。

利息を取るより利息を拂ふな。

律義者の子澤山。

律義者とは正直にして且つ義を重んずる者といふ、子  
の多きは人の喜ぶ所子の無きは人の悲しむ所なれば、  
律義者には子が多しといひて、人をして正義を守らし  
めんが爲めに感しつけたるが。

立身を願はんよりは御恩を忘るな。

解に及ばず。立身出世を計るよりは、先づ人の恩恵を  
報ゆることに、心を用るが肝要なりとの義。人の恩恵

を忘却せざる位のもの天下の同情を受けて、其立身  
を速にすることあり。然るに立身することを先きにし  
れば、人の恩恵を顧みるに迫らざるが如きことあり、  
されば天下の同情を失ひて却つて立身の妨げとなるな  
り。

理に勝つて非に陥る。

理に於て勝ちたりとも結局我に不利なれば畢竟非に  
陥るなり。

理に勝つ法はあれども法に勝つ理なし。

理を破る法はあり、法を破る理はなしの條参照。  
理のこうじたは非の一倍。

強ちに理に偏するは却つて非なりといふ義。即理窟は  
き者は、理に拘泥して却つて悪しきなり。故に非の一  
倍といふ。

利は向上になかれ。

己が力を忍みて利得を恣にすることなかれとの義。  
離別の後の格氣。

離別したれば最早關係なきに尙格氣すると云ふ義。未  
練深きをいふ。

リに——リのは——リへ——リん

格氣せぬ女ははづまぬ毬。

格氣する方よしとの義。夫が不品行を働きても其の妻  
嫉妬を起さざれば却つて張合なしとの意。

臨機應變てやる。

機に臨み變に應じて適宜の處理をなすとの義。  
格氣は戀の命。

互に格氣せぬやうになれば、戀なきなり。  
格氣は女房の敷銀。

「忠臣青砥刀」「上は王様、下には裏屋小路の隅々まで、  
格氣は女房の敷銀じや。」

格氣は女の七道具

女は能く嫉妬の念を起すといふこと。七道具とは常に  
よく持出して使用する酒落たるなり。

格氣も痴話の種。

格氣女に角が生ゆる。

嫉妬は恐しきものとの義。  
繪言汗の如し。



帝王の旨の荷すべからざる喻。天子の詔勅一び下りし上は、縱令其條項宜しからざる所ありとも、之を取消すこと成らざるは、恰も汗の一び出て、再び本に反らざる如しとなり。「禮記」細衣篇「子曰王言如絲。其出如綸。王言如綸其出如紼」。「漢書」劉向傳「號令如汗汗出而不反者也」。

林中に薪を賣らず湖上に魚を鬻がず。  
物の多き所は珍らしからざるをいふ。

良禽は樹を選んで棲む。

良士の良き主人を擇んで事ふ喻。其依る所を撰ぶ義なり。「三國志」蜀志「良禽相木而棲。賢臣擇主而事」。

兩虎た、かふとき一狗弊にのる。

力の相匹敵したる強者の相争ふときは、何れか亡び何れか傷きて他のものが其弊に乗ずるをいふ。「史記」兩虎相闘而驚犬受其弊」。

兩虎のた、かひ。

力の相敵したる強者の相争ふをいふ。一は亡び一は傷くとの義。「戰國策」今兩虎争而闘小者死大者傷。子待傷虎而刺之則一舉而兼兩虎也。無刺一虎之勞。

而有刺兩虎之名。  
良工は材を擇ばず。

良工は良材ならずとも之を巧に用ふとの義。兩手に花。

一時に雙美を兼ね得たる喻。十分の利得あるをいふ。兩手に旨いもの。

一時に多くの利得あるをいふ。兩手に物もつ如し。

兩手に旨いものといふに同じ。「品氏春秋」庄讓王韓魏相争。子華子見韓侯曰。今使天下爭銘于君之前。曰。左手攫之則右手廢。右手攫之則左手廢。而攫之者必有三天下。龍頭蛇尾。

はじめはよくして、終のよからざるをいふ、首尾つる龍の頷の球を探るやう。

危きを凌ぎて、奇貨を得んとする喻。「莊子」夫千金之珠。必在九重淵而闚龍之頷下。能得珠者。必遭其難也。

兩方聞いて下知を爲せ。

「兩を聞いて下知をなせ」と同じ。

兩方立つれば身がた、ぬ。

あちら立つればこちらが立たぬ(アノ部)に出づ。龍は眠りて本體を現はす。

龍が雲によるときは、際見出沒其形體を端倪すること能はざれども、睡れる時は其の形のまゝを現はすといふことにて、平素其真相を現はさざりし人が一朝の不圖した事より其本性をあらはす喻とす。「活版曾我物語」龍は眠りて本體を現はし人は酔うて本性をあらはす。

良薬口に苦し。

良薬の病に功能あれども、苦くして飲みがたきが如く、諫言は我に利あれども、耳に逆ふものなりとの義。「家語」六本篇「孔子曰良薬苦於口而利於病。忠言逆於耳而利於行」。

兩雄并ひ立たず。

互に力を均しうせる二人の英雄は、同時に共に立つこと能はず。必ず争ありて何れか一方は負くるとなり。

「漢書」兩雄不俱立。兩賢不並世。  
兩を聞いて下知を爲せ。

「諺言」訟を聞是非を糺すに兩方の口を開きて下知せよと也。周官に以兩造一聽民訟」とあり兩造とは争をなす者兩方共に皆至るなり。是諺の意に同じ。史記鄒陽云偏聽生姦是も兩を聞て下知をなせとの意也片口を開て決すれば必あやまるなり。「史記」凡聽訟者必須兩辭。可。以定是非。偏信一言折獄者。乃吏職之短才也。

理を以て非に落ちる。

餘り理を推すときは、却つて非道となるとの義。

理を非には曲げられぬ。

道理あることを非理なりと言ひ曲げがたしとの義。理を非に曲げる。

道理あることを非理なりと言ひ曲ぐるをいふ。理を破る法はあり法を破る理は無し。

法度を重んじて云へるなり。時の將軍に従ふべしと云ふ如し。



# る

留守に陰膳を据ゑると腹が減らぬ。

俗説。留守に疊を疎にすれば旅先に禍あり。

俗説。「帝國文學」萬葉十五に須磨呂伎能、等保能朝延等、可長國爾、和多流和我世波、伊散能等能伊波比麻多爾可、多太未可世、安夜麻知之家牟、安吉佐良波、可散里麻左牟等、多良知福能、波々爾麻子之豆、等伎毛須疑、都奇世倍奴禮婆、(下略)また古事記下巻輕太子の流され給ふ時の歌に「意富伎美奈斯麻爾波夫良波、布那阿麻里、伊賀帶里許牟叙、和我多多彌由米。」とあるも吾が疊をゆめ、過つことなけれやがて再び無事に立歸るべきに成めたるなり。

留守見舞は間遠にせよ。

主人の不在中其留守宅を訪問するは、餘り繁くすべからずとの義。頻繁に訪問すれば却つて嫌疑などの起る基なる故にとの意あり。

留守を使ふ。

宅に居ながら不在なりと稱して來客を拒絶することをいふ。

流人の伏笠。

「和漢故事要言」恐るべき事には、深く恐れ、慎むべき事は、固く慎むべき事といふ戒の心也。本朝孝子傳に伊周公罪を得給ふ事ありて、播磨に左遷ましかける頃、御母宮重く煩はせ玉ふ由聞えしかば、伊周公ものうさの餘り、堪兼たまひて、一日笠を伏せ、御身を隠して、流人の御身ながら忍びて、都に入、母后を見奉らせ給ひけるが、後日に此事露顯して、彌御咎重く成て、國を替て遠く流罪まししくけるとぞ。

流浪して主の有難さ。

主君に事へて其使役の下に在るときは、苟も恩義を感ぜざりしも流浪の身となりては、窮厄に遭ふことに、其恩寵を回想するに至るをいふ。

琉璃は脆し。

形體美なれども、其質の毀れ易きをいふ。「白氏文集」大郡好物不堅牢。綵雲易散。琉璃脆矣。」

琉璃も玻璃も照せば光る。

# れ

禮過ぐれば諂となる。

伊達政宗の語なり。禮は人に大切のものなれども、過ぐるときは、所謂慙慙卑陋となりて、却つて悪しきものなり、其節にかなふがよしとの意。

冷水で玉を洗ふ。

物の實否が顯るゝとの義。禮に始り禮に終る。

始も終も禮儀正しきをいふ。

禮法師の無禮。

禮儀作法を教ふる師匠などの外形には禮法を正すも、内心に敬禮の心なきことを嘲り、虚禮を誡めたる語なり。

伶俐なる頭には緘ぢたる口あり。

賢き者は常に言を慎みて、妄に其口を開くことなしとの義。「家語」觀周篇「孔子、觀周。遂入太祖后稷之廟。廟堂有階之前有二人焉。參緘其口。而銘其背。曰。古之慎言人也。」

琉璃も玻璃も照せば光る。

琉璃も玻璃もよく之れを磨きて照したにすれば、能く光輝を放つ人もまた能く勉勵すれば光輝を發するに至るなりとの義。

琉璃玉も、玻璃も一見相似たるが如しといへども、能く之を見れば、區別判然たりとの義。たとへ同様にして明かに觀察すれば其異なる所、價の有無を知るに足るといふ義。

類は友をよぶ。

類を以て集るに同じ。

類を引き友をよぶ。

類を以て集るに同じ。

類を以て集る。

君子は君子と集り、小人は小人と徒黨を結ぶが如く、善惡各其同類相昵近する義。「史記」伯夷傳。「賈子曰同類相求。雲從龍。風從虎。」歐陽修の明黨論「大凡君子與君子以同道爲朋。小人與小人以同利爲朋。此自然之理也。」「易」繫辭上傳「方以類聚。物以群分。吉凶生矣。」荀子「勸學」「草木疇生。禽獸群形。物各從其類也。」



伶俐貧乏。

器用なるもの、貧乏するといふ俗説。

獵師山を見ず。

鹿を逐ふ獵師山を見ず(シの部)に出づ就て見るべし。

獵する犬は爪を藏す。

能ある犬は爪を藏す(ノの部)といふと同じ。

獵は鳥が教ふる。

獵に拙なる者にて、數回鳥を追うて、熟練するに至れば自ら巧者となるべし、何事も經驗を待つて上達すとの義ならむ。

連木が羽生えて飛ぶ。

榎木が羽生えて飛ぶ(スの部)に出づ。

連木で腹を切る。

榎木で腹を切る(スの部)に出づ。

廉士は遺金を顧みず。

廉潔の人は不義の財を取らずとの義。

連理の契。

連理とは木のもくめ相通するをいひ、夫婦の契深くし

て永久に變らざるを云ふ。天に在つては比翼の契り地に在つては連理の枝(テの部)に出づ。

ろ

籠鳥雲を戀ふ。

束縛を脱して自由を得んと欲する喻、籠鳥雲を眺めて戀々し外に飛び出でんと思ふ心を謂ふ。東坡詩「鳥囚不<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>飛。馬繫<sub>レ</sub>常念<sub>レ</sub>馳。」

隴を得て蜀を望む。

人の慾には際限なく、既に一の事叶へば、又他の事を望むに至るをいふ。「晋志」「曹孫期。人若<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>足。既得<sub>レ</sub>隴望<sub>レ</sub>蜀。」これは司馬懿が曹操に對ひて隴は既に得たれば進んで蜀を取らんと曰ひしにつき曹操がかくいへるなり之より出でたる諺なり。一休和尚の狂歌に「一

つ叶へば又二つ三つ四つ五つ六つかしの世や。」

櫓權のた、ぬ海はなし。

加何なる事にて自ら之れに處する方法ありとの義。「忠臣背砥刀」「拵海ひろしと申せども櫓權のた、ぬ海もなし。」

解に及ばず。

六月虹を見れば麻の價貴し。

六月に虹見はるときは麻の作よろしからずとなり。

六月二日に霽われれば其年五穀みのる。

解に及ばず。

六親不和なれば三寶の加護なし。

父母兄弟妻子を六親といふ此六親互に不和なる家には佛の加護なし。と感して、親和ならしめん爲の方便に

六道能化の地藏尊。

地藏菩薩は人間、天上、地獄、修羅、餓鬼、畜生の六

界へ行き別る、道に迷ふものを化導す。

六道は目の前。

六道は未來の世のみならず現世に於てもある者なりとの義。

碌碌人に因て事を成す。

毛遂が故事より出づ。雖は袋を透す(キの部)参照。毛遂趙の客十九人と楚に使し楚王に迫りて従を約し、十九人を顧みて、公等碌碌人に因て事を爲すのみといへ

櫓權の無いやうなもの。

船に櫓權の無いやうなもの(フの部)の條に出づ。

魯魚の誤。

形の能く似通ひたる者を取り間違ふることなり。魯の字と魚の字とは、日字の加はると、加はらざるとの相

違にて、寫字の時などに能く間違ふなり。

六月蟬の泣別れ。

陰曆六月に蟬の鳴くこと最も多くそれより次第に少く

なりゆくとなり。

六具をまむる。

用意周到にして物事の準備を怠らざるをいふ。「諺草」

「六具とは甲冑、煩當、小手、佩楯、臙當なり。諺の

意は六具のうち一具かけても軍用に利あらず。六具を

まめて後戦場に赴くべし。凡人も思慮を胸中にまめて

事をさばく事、武士の六具をまめて、戦場にのぞむが

如くする時は、事に臨みて缺くる事なく、動する事な

くして堅固なりといふ心にて胸中に六具をまめよとい

ふ事なり。

六月に暑薄ければ五穀よろしからず。



り。碌碌はゴロ／＼したる石塊の事にて、何事を仕出  
來すこと出来ぬ凡人に喩ふ。  
檣三年神八年。

船頭が漕船術を練習するに、檣は三年にして操ること  
を熟達するが、檣は八年を要すとの意。  
盧生の夢。

邯鄲の夢といふと同義。沈既濟が枕中記に曰く、唐の  
開元七年道士呂翁といふ者神仙の術を得、邯鄲の道中  
に行き、邸舎に息ひ蘘によりて坐す。俄に少年盧生を  
見る、短褐を衣、青駒に乗り、亦邸中に止り翁と言笑  
す。盧生其の衣裝の敝弊を顧みて、乃ち嘆じて曰く、  
大丈夫世に生れて謂はず、困すること是の如し、翁曰  
く子賦附方に適して其の困を救するは何ぞや。生曰く  
吾れ常に學に志す、自ら惟ふ青紫拾ふべしと、今日に  
壯を過ぎて猶賦畝に勤む、困に非ずして何ぞ。言訖り  
て目昏み蘘を思ふ、時に主人方に黍を蒸す。翁乃  
ち蘘中の枕を探り、以て之を授けて曰く、子吾が枕を  
枕せば、當に子をして榮適志の如くならしむべしと。  
其枕背磁にして、其の兩端に竅あり、生首を俛して之  
に就く。其の竅を見れば漸く大に明なり、即ち身を舉

げて入る。遂に其の家に至る、數月にして清河の崔氏  
の女を娶る。女の容甚だ麗はしくして生質愈厚し。明  
年進士に舉られ登第す、褐を釋て、涓南の尉に轉ず、  
俄に監察御史に遷り、起居舍人知制誥に轉ず。三載に  
して出て、同州を典り、陝牧に遷り、節を汴州に移し、  
河南道の採訪使を領し、徵されて京兆の尹と爲る。是  
歲神武皇帝方に戎狄に事あり、御史中丞河南道の節度  
に叙せらる。大に戎庭を破り、朝に歸りて勳を冊し、  
恩禮極めて盛なり、吏部侍郎に轉じ、戸部尙書兼御史  
大夫に遷る。時の宰の爲に忌まれ、飛語を以て中てら  
れて、端州の刺史に貶せらる。三年にして徵されて常  
侍と爲る、未だ幾ならず、同中書門下平章事となる。  
同列復た邊將と交結して不軌を圖ると誣ふ。制獄に下  
さる、中官之を保することを爲して、死を減じて驪州  
に投ず、數年にして帝寃を知つて、復た進めて中書令  
と爲す。燕國公に封ぜらる、五子を生む、孫十餘人あ  
り、後年八十を逾ゆるを以て病で薨す。盧生欠伸して  
寤むれば、其身方に邸舎に偃し、呂翁其傍に坐し、主  
人黍を蒸して未だ熱せざるを見る。生慨然として起き  
て曰く、豈に夫れ夢寐ならむや。翁生に謂つて曰く、

人生の適も亦是の如しと。生慨然として良久しうし  
て謝して曰く、夫れ龍唇の道、窮達の運、得喪の理、  
死生の情、盡く之を知る、此れ先生吾が怨を望ぐ所以  
なり、敢て教を受けざらむやと稽首再拜して去る。  
魯女の妾。

直接には我に關係なき事なりとも、遂に影響して我に  
も及ぶことの喩なり。此は魯の漆室邑の女の記事より  
出づ、女嫁期過ぎて未だ適かず、或時機に倚れて何と  
なくわびしげなり。隣婦怪んで曰く、嫁を欲するかと、  
答へていふ、今君(穆公)老い、太子幼なるを憂ふと。  
隣女曰、これ魯の太夫の憂のみ、婦人何ぞあづからん  
と。女いふ然らず、これ淺見なり、昔晋客我家に宿り  
ぬる時、馬を厩中につなぎしが、逸して厩の糞を踐み  
あらず爲に我終歳糞を食ふこと能はざりき。夫れ國に  
亂あれば、禍衆に及ぶ、これ故に我太子の幼なるを憂  
ふ云々。

論語讀の論語知らず。

論語を讀みたりとし、之を身に履み行ふこと能はざる  
をいふ。「論語」序説「程子曰論語有讀了全然無事  
者」徒に知るのみにて行ふ能はざるものを罵りてい

ろちーろんーろもーろれ

ふ。

論ずる者は中から取れ。

甲の説と乙の説との中程を取れとの義。

論も評定もなし。

事理明白にして、論議するまでもなく、評定するにも  
及ばずとの義。

論より證據。

論辯するよりは、事實の上に證據を示すが勝るとなり。  
「法苑珠林」僉約篇述意部「夫説之於空談。不如證據之  
事實。聞之學像不如決之於耳目。故信不如學。言  
不如行。」

櫓も櫓もたゝぬ。

世の事の手を着くる所なきをいふ。江河の深くして櫓  
も權もたゝず、舟を行る能はざるに喩ふ。

呂律がまわらぬ。

酒に酔ひし者の言辭の不明なるをいふ。ろれつはろり  
つの轉。



わ

賄賂には誓紙を忘る。

賄賂は授受者双方共に秘密を守る者故誓紙の要なしとの意なりん。或は曰く賄賂を受けたる爲に他の一方の誓紙を忘れて變心するなふこと。

黄金は毒を消す。

俗説。

王になるも生れから最。

人の貴賤高下あることも、大かた生れ落の小兒の程より、早く其兆はある者なりといふ心にて、萬事に付きて善悪は豫め知らるゝの義なり。最といふ字あつむとも勝るとも要とも優とも馴む、王位にも備はるべき人は天性人に勝れまさる所ある心なり。

黄疽病の人には何物も皆黄色に見ゆ。

俗説。

王良も時としては馬車を覆す。

智者も千慮の一失の如し、王良は馬を御する名人なり。王を擒にせんと欲せば先其馬を射よ。

主公の意に慥はんと欲せば先之に付き隨ふ者の歡心を買ふべしとの義。主たる者を得んには、之に係屬する者より着手すべしとの義。

我頭の蠅を逐へ。

人の事には關せず先づ須らく我身の事を修むべしとの義。「唐語彙要」各人自掃門前雪。休管他人屋上霜。若い時の辛勞は請うてもせよ。

壯年の時は我より請ひ求めてなりとも辛勞を爲さるべからずとの義なり。「居家必用」少不勤勞老必艱辛。少能服勞老必安逸。

若い時は二度なし。

若い時は二度なきもの故、此時を外さず爲すべき事を爲せよとの義。古人の詩に「白日無空過。青年不再來。」「陶淵明集」盛年不重來。一日難再晨。及時當勉勵。歲月不待人。「文選」表歌行「百川東到海。何時復西歸。少壯不努力。老大徒傷悲。」

我家の佛尊し。

廣く世間を見ざる頑固の心より、我まゝを以て人に逆ふ義なり。己が視馴染みし方の人を崇拜する義「砂石

我門に吠えぬ犬なし。

頼みとする所ある場合にのみ、威勢を張るといふほどの意。

若木に腰をかけるな。

若木の下で笠をぬげ。若木の下で笠をぬげといふと同義。

己より弱年の人なりとて、輕蔑するなけれ、今は弱年なれども、後來如何なる大人物となるやも知るべからず必ず相當の禮を爲すべしとの義。若木を弱年の人に喩ふ今は若木なれども後には何許の大木にならんと禮を爲せといふことなり。「論語」後生可畏也。焉知來者之不如今。「文選」後生可畏。來者難誣。參考獨逸の片田舎に小學兒童を教育した一小學教員は、小學生徒の一群に會ふ度に、慇懃に帽を脱して敬禮を行ふを常とし、怪しむものあれば、此兒童の中より他日天下に雄飛する英雄豪傑の出づることあるを思へば、敬禮を爲さざらんと言ふも能はずと答へしが、果して其一群の兒童中よりマーチンルーテルの如き英傑を出だせしは千古の美談とせる所、此の小学校教員こそ若木の下で笠をぬきたる人といふべけれ。

我家樂の釜盃。自分の家にては窮屈を感じることなしとの義。即ち釜も盃も相兼ねるといふやうな、家具の少き不足がちな生活にては我家は樂しきものよとの義。

我上の星は見えぬ。

我が身の事に氣が付かぬことをいふ。

我馬の僵れたやうになり。

人の爲に計ることは、我身の痛痒を感じずる如く切ならずとの義。利己心の深く、同情心の薄き人情の秘奥なり。

我家樂の釜盃の轉。

我刀で首切る。

自分のものにて或は自分の爲したる事の爲に自ら苦しむをいふ。



若きを師弟。

師弟の間柄は徒に年齢の長少に拘るべからず、若き人といへども師とすべく、年長いたりとも弟子とすべしあり。要するに學識徳行の高下に依るものなりとの義。若木をつめるな。

若木は後來如何なる大木と爲らんも知るべからず、妄に其暢茂を妨ぐべからずとの義にて、青年の人の立身を妨ぐなかれとの喩。若木を青年に喩ふ。

我口に甘ければ人の口にも甘し。

己の欲する所は人にも施せとの義。「性靈集」厭梵字并雜文二表、誣云奴口甘。耶舌甜。政因斯義、欲厭久矣。「論語」仁者己欲立而立人。己欲達而達人。能近取之。可謂仁之方也。

我事と下阪に走らぬもの無し。

誰にても皆我身の事ならば奔走せざるなしとの義なり。主我的觀念の強きをいふ。我事を棚に上げて置く。

自分の不都合は、其まゝにさしおきて、人の不都合のみを言ひ立つるをいふ。

若後家のまげき寺参り。

若き後家の亡夫の墓に参るを名とし、寺僧と情を通ずるのありと云ふ意。

我子に名を附けるやう。

勝手にするを云ふ。己の自由に爲し得らるること。

我子の重いのとふぐりは荷にならぬ。

己が子は可愛きものなれば、之を働かす或は貢ふなどするに重しとは感ぜずとの義。ふぐりは罌丸のこと。

我子には目が無い。

我子を無暗に愛するをいふ。我子の惡しき事には氣が

付かずとなり。

若衆と糶味噌の味。

「香庚申」若衆と糶味噌のあぢは屋敷に極まり。

我田に水引く。

自分勝手な事をするをいふ自己の便宜よき事を計る義。(利己主義) 農夫が田に灌溉の水を引くに人の田には引かて皆自家の田に水を引くより出でたる語なり。後京極良經公の歌に「小山田の苗代水のひきく」にわかつや人の心なるらむ。

我手を以て我膝を打つ。

はづることなし。容易なりとの義。

我名付けた子は可愛。

名づけ親といふ事あり。人の子に名を命じたるいふ此の名付親より見れば、均しく人の子なれども、其中にも我名付けたる子は可愛く思ふものなり。即ち多少の關係あればなり。此れより轉じて寶品などに我が買はんとする直段を付けし位の品物は、最も之れを愛惜するをいふ。

我絢ひたる繩にて首縊る。

我刀で首切るといふに同じ。

和歌に師匠なし。

和歌を詠ずるには別に師を以て得べからず要は唯古歌をよみて自得するに在りとの意。「詠歌大概」「和歌に師匠なし、たゞ古歌を以て師とす。心を古風に染め、詞を先達に習ふ者、誰人か之を詠せざらんや。」

我船の順風は人の船の逆風。

我に利ある事は人に不利なる喩。

我身の二尺は見えぬ。

他人の過失は目に付くが、我身の過失は氣がつかぬとの義。「韓非子」「古之人。目短于自見。故以鏡觀面。智短于自知。故以道正己。」

我身の事は人に問へ。

凡そ人皆自己の事に氣がつかずして、他人の事に能く氣付くものなれば、己れが身の事は、他人に問ひ正すべしとの義。「諺草」「韓子曰古之人。目短于自見。故以鏡觀面。智短于自知。故以道正己。」是も諺と言異しく意同じ。

我身不能にして、人の智慧を知らず。

自己の不見識にして他人の智慧心術を知らずといふ義。

我身を立てんとせば先人を立てよ。

「論語」「仁者己欲立而立人。己欲達而達人。能近取之。可謂仁之方也。」

我身を抓つて人の痛さを知れ。

我身を抓つて痛ければ人も亦痛き故に同情の念をもて我身の欲せざることは人に施すなれとの義。「五苦



「夫木集」夏の夜は光すしくさす月を我物顔にうち  
 我物食つて主の力持。  
 己に何の利得もなきことを却て己を損して偏に他人の  
 爲に周旋することはいふ。「和漢故事要言」何の利得も  
 なきことと思ふ事を、ひたと世話やく様の事をいふ。  
 我物故に骨折る。  
 我事わがことの爲故に奔走盡力する義、利己主義の所爲。  
 腋わきの下から冷汗ひやせが出るやう。  
 羞耻はにかのことをいふ。  
 腋わきの下を嗅ぐと腋臭わきがが出る。  
 俗説。

「夫木集」夏の夜は光すしくさす月を我物顔にうち  
 我物食つて主の力持。  
 己に何の利得もなきことを却て己を損して偏に他人の  
 爲に周旋することはいふ。「和漢故事要言」何の利得も  
 なきことと思ふ事を、ひたと世話やく様の事をいふ。  
 我物故に骨折る。  
 我事わがことの爲故に奔走盡力する義、利己主義の所爲。  
 腋わきの下から冷汗ひやせが出るやう。  
 羞耻はにかのことをいふ。  
 腋わきの下を嗅ぐと腋臭わきがが出る。  
 俗説。

「夫木集」夏の夜は光すしくさす月を我物顔にうち  
 我物食つて主の力持。  
 己に何の利得もなきことを却て己を損して偏に他人の  
 爲に周旋することはいふ。「和漢故事要言」何の利得も  
 なきことと思ふ事を、ひたと世話やく様の事をいふ。  
 我物故に骨折る。  
 我事わがことの爲故に奔走盡力する義、利己主義の所爲。  
 腋わきの下から冷汗ひやせが出るやう。  
 羞耻はにかのことをいふ。  
 腋わきの下を嗅ぐと腋臭わきがが出る。  
 俗説。

「夫木集」夏の夜は光すしくさす月を我物顔にうち  
 我物食つて主の力持。  
 己に何の利得もなきことを却て己を損して偏に他人の  
 爲に周旋することはいふ。「和漢故事要言」何の利得も  
 なきことと思ふ事を、ひたと世話やく様の事をいふ。  
 我物故に骨折る。  
 我事わがことの爲故に奔走盡力する義、利己主義の所爲。  
 腋わきの下から冷汗ひやせが出るやう。  
 羞耻はにかのことをいふ。  
 腋わきの下を嗅ぐと腋臭わきがが出る。  
 俗説。

腋わきの下を鳴らすと腋臭わきがが出る。  
 俗説。  
 和光同塵わくわうどうちん。  
 世俗に和して、其風潮にさかればぬこと。「老子」和  
 其光同其塵。我智慧の光をかくして顯さるるを和光  
 と云ひ世に隨ひ塵俗の中に混じて時を知るを同塵とい  
 ふ。  
 禍わざはひの門は口。  
 言を慎まざる爲に奇禍を買ふこと多し、口は實に禍の  
 道入り口故に能く言を慎むべしといふ事。  
 禍わざはひは口よりおこる。  
 言語を慎まざるより禍を起すこと多きをいふ。「報恩  
 經」論議品一切衆生禍從口出。口舌者鑿身之斧。滅  
 身之禍也。傳支が口銜「疾從口入。禍從口出」文中  
 子「禍莫大於多言」  
 禍わざはひも三年置けば福の種。  
 福を受けても其れが却つて福となるをいふ。  
 禍わざはひも三年置けば役に立つ。

腋わきの下を鳴らすと腋臭わきがが出る。  
 俗説。  
 和光同塵わくわうどうちん。  
 世俗に和して、其風潮にさかればぬこと。「老子」和  
 其光同其塵。我智慧の光をかくして顯さるるを和光  
 と云ひ世に隨ひ塵俗の中に混じて時を知るを同塵とい  
 ふ。  
 禍わざはひの門は口。  
 言を慎まざる爲に奇禍を買ふこと多し、口は實に禍の  
 道入り口故に能く言を慎むべしといふ事。  
 禍わざはひは口よりおこる。  
 言語を慎まざるより禍を起すこと多きをいふ。「報恩  
 經」論議品一切衆生禍從口出。口舌者鑿身之斧。滅  
 身之禍也。傳支が口銜「疾從口入。禍從口出」文中  
 子「禍莫大於多言」  
 禍わざはひも三年置けば福の種。  
 福を受けても其れが却つて福となるをいふ。  
 禍わざはひも三年置けば役に立つ。

腋わきの下を鳴らすと腋臭わきがが出る。  
 俗説。  
 和光同塵わくわうどうちん。  
 世俗に和して、其風潮にさかればぬこと。「老子」和  
 其光同其塵。我智慧の光をかくして顯さるるを和光  
 と云ひ世に隨ひ塵俗の中に混じて時を知るを同塵とい  
 ふ。  
 禍わざはひの門は口。  
 言を慎まざる爲に奇禍を買ふこと多し、口は實に禍の  
 道入り口故に能く言を慎むべしといふ事。  
 禍わざはひは口よりおこる。  
 言語を慎まざるより禍を起すこと多きをいふ。「報恩  
 經」論議品一切衆生禍從口出。口舌者鑿身之斧。滅  
 身之禍也。傳支が口銜「疾從口入。禍從口出」文中  
 子「禍莫大於多言」  
 禍わざはひも三年置けば福の種。  
 福を受けても其れが却つて福となるをいふ。  
 禍わざはひも三年置けば役に立つ。

腋わきの下を鳴らすと腋臭わきがが出る。  
 俗説。  
 和光同塵わくわうどうちん。  
 世俗に和して、其風潮にさかればぬこと。「老子」和  
 其光同其塵。我智慧の光をかくして顯さるるを和光  
 と云ひ世に隨ひ塵俗の中に混じて時を知るを同塵とい  
 ふ。  
 禍わざはひの門は口。  
 言を慎まざる爲に奇禍を買ふこと多し、口は實に禍の  
 道入り口故に能く言を慎むべしといふ事。  
 禍わざはひは口よりおこる。  
 言語を慎まざるより禍を起すこと多きをいふ。「報恩  
 經」論議品一切衆生禍從口出。口舌者鑿身之斧。滅  
 身之禍也。傳支が口銜「疾從口入。禍從口出」文中  
 子「禍莫大於多言」  
 禍わざはひも三年置けば福の種。  
 福を受けても其れが却つて福となるをいふ。  
 禍わざはひも三年置けば役に立つ。

何にても川なきものはなしといふ義。不用のものと  
 思ふものにて時へ置けば後に用を爲すとの義。  
 禍わざはひも福の端と爲る。  
 福と思ふものが却つて福となるをいふ。「老子」「禍兮  
 福所倚福兮禍所伏。」「吳越春秋」禍爲德根。憂爲福  
 室。  
 忘具わすれがひを帯ふれば物を忘る。  
 俗説。「萬葉集」六「吾背子爾、戀者苦、暇有者、拾而  
 將去、戀忘具、同七「手取之、柄爾忘跡、磯人之曰師、戀  
 忘具、言仁師有來。」  
 萱草うきくさを帯ふれば物を忘る。  
 俗説。「萬葉集」三「萱草紐二付、香具山乃、故去里乎不  
 忘之爲」同四「萱草、吾下紐爾、著有跡、鬼乃志許草、  
 事仁思安利家理。」  
 綿わたにて頸のどを絞る。  
 柔かにして段々詰りつむるをいふ。  
 綿わたに鍼はりをつつむ。  
 表面柔和を装ひ裏面に姦曲をつつむ義。「神林句集」四  
 首部「綿裏包鍼、正言叮嚀而内心含針義也」「事文類聚」

何にても川なきものはなしといふ義。不用のものと  
 思ふものにて時へ置けば後に用を爲すとの義。  
 禍わざはひも福の端と爲る。  
 福と思ふものが却つて福となるをいふ。「老子」「禍兮  
 福所倚福兮禍所伏。」「吳越春秋」禍爲德根。憂爲福  
 室。  
 忘具わすれがひを帯ふれば物を忘る。  
 俗説。「萬葉集」六「吾背子爾、戀者苦、暇有者、拾而  
 將去、戀忘具、同七「手取之、柄爾忘跡、磯人之曰師、戀  
 忘具、言仁師有來。」  
 萱草うきくさを帯ふれば物を忘る。  
 俗説。「萬葉集」三「萱草紐二付、香具山乃、故去里乎不  
 忘之爲」同四「萱草、吾下紐爾、著有跡、鬼乃志許草、  
 事仁思安利家理。」  
 綿わたにて頸のどを絞る。  
 柔かにして段々詰りつむるをいふ。  
 綿わたに鍼はりをつつむ。  
 表面柔和を装ひ裏面に姦曲をつつむ義。「神林句集」四  
 首部「綿裏包鍼、正言叮嚀而内心含針義也」「事文類聚」

何にても川なきものはなしといふ義。不用のものと  
 思ふものにて時へ置けば後に用を爲すとの義。  
 禍わざはひも福の端と爲る。  
 福と思ふものが却つて福となるをいふ。「老子」「禍兮  
 福所倚福兮禍所伏。」「吳越春秋」禍爲德根。憂爲福  
 室。  
 忘具わすれがひを帯ふれば物を忘る。  
 俗説。「萬葉集」六「吾背子爾、戀者苦、暇有者、拾而  
 將去、戀忘具、同七「手取之、柄爾忘跡、磯人之曰師、戀  
 忘具、言仁師有來。」  
 萱草うきくさを帯ふれば物を忘る。  
 俗説。「萬葉集」三「萱草紐二付、香具山乃、故去里乎不  
 忘之爲」同四「萱草、吾下紐爾、著有跡、鬼乃志許草、  
 事仁思安利家理。」  
 綿わたにて頸のどを絞る。  
 柔かにして段々詰りつむるをいふ。  
 綿わたに鍼はりをつつむ。  
 表面柔和を装ひ裏面に姦曲をつつむ義。「神林句集」四  
 首部「綿裏包鍼、正言叮嚀而内心含針義也」「事文類聚」

何にても川なきものはなしといふ義。不用のものと  
 思ふものにて時へ置けば後に用を爲すとの義。  
 禍わざはひも福の端と爲る。  
 福と思ふものが却つて福となるをいふ。「老子」「禍兮  
 福所倚福兮禍所伏。」「吳越春秋」禍爲德根。憂爲福  
 室。  
 忘具わすれがひを帯ふれば物を忘る。  
 俗説。「萬葉集」六「吾背子爾、戀者苦、暇有者、拾而  
 將去、戀忘具、同七「手取之、柄爾忘跡、磯人之曰師、戀  
 忘具、言仁師有來。」  
 萱草うきくさを帯ふれば物を忘る。  
 俗説。「萬葉集」三「萱草紐二付、香具山乃、故去里乎不  
 忘之爲」同四「萱草、吾下紐爾、著有跡、鬼乃志許草、  
 事仁思安利家理。」  
 綿わたにて頸のどを絞る。  
 柔かにして段々詰りつむるをいふ。  
 綿わたに鍼はりをつつむ。  
 表面柔和を装ひ裏面に姦曲をつつむ義。「神林句集」四  
 首部「綿裏包鍼、正言叮嚀而内心含針義也」「事文類聚」

われ—わす—わた—わに—わら

孟郊「友詩」面結三口頭交。肚裏生荆棘。  
 榮華榮華に過ぎての事なり。ふんどしに綿を入れるな  
 いふ。  
 渡りに船。  
 忽みし所の事を偶然に得たる喻。渡し場に来りて折よ  
 く渡船に乗り移りしが如きこと。  
 盤わたり八目。  
 圍碁の語。わたりは八目の利ありといふこと。  
 饅頭まんどうの口を通る。  
 危き所を避れ得たるをいふ。  
 薬わた千本あつても柱にはならぬ。  
 無能者幾人ありとも用を爲さざるを喻ふ。  
 笑つて損する者なし。  
 何事にても腹を立てず。常に機嫌よくして居れば利す  
 ることあるべしとの義。  
 笑つて損するやう。  
 氣げんよくして而して怒まれたる如し。

孟郊「友詩」面結三口頭交。肚裏生荆棘。  
 榮華榮華に過ぎての事なり。ふんどしに綿を入れるな  
 いふ。  
 渡りに船。  
 忽みし所の事を偶然に得たる喻。渡し場に来りて折よ  
 く渡船に乗り移りしが如きこと。  
 盤わたり八目。  
 圍碁の語。わたりは八目の利ありといふこと。  
 饅頭まんどうの口を通る。  
 危き所を避れ得たるをいふ。  
 薬わた千本あつても柱にはならぬ。  
 無能者幾人ありとも用を爲さざるを喻ふ。  
 笑つて損する者なし。  
 何事にても腹を立てず。常に機嫌よくして居れば利す  
 ることあるべしとの義。  
 笑つて損するやう。  
 氣げんよくして而して怒まれたる如し。

孟郊「友詩」面結三口頭交。肚裏生荆棘。  
 榮華榮華に過ぎての事なり。ふんどしに綿を入れるな  
 いふ。  
 渡りに船。  
 忽みし所の事を偶然に得たる喻。渡し場に来りて折よ  
 く渡船に乗り移りしが如きこと。  
 盤わたり八目。  
 圍碁の語。わたりは八目の利ありといふこと。  
 饅頭まんどうの口を通る。  
 危き所を避れ得たるをいふ。  
 薬わた千本あつても柱にはならぬ。  
 無能者幾人ありとも用を爲さざるを喻ふ。  
 笑つて損する者なし。  
 何事にても腹を立てず。常に機嫌よくして居れば利す  
 ることあるべしとの義。  
 笑つて損するやう。  
 氣げんよくして而して怒まれたる如し。

孟郊「友詩」面結三口頭交。肚裏生荆棘。  
 榮華榮華に過ぎての事なり。ふんどしに綿を入れるな  
 いふ。  
 渡りに船。  
 忽みし所の事を偶然に得たる喻。渡し場に来りて折よ  
 く渡船に乗り移りしが如きこと。  
 盤わたり八目。  
 圍碁の語。わたりは八目の利ありといふこと。  
 饅頭まんどうの口を通る。  
 危き所を避れ得たるをいふ。  
 薬わた千本あつても柱にはならぬ。  
 無能者幾人ありとも用を爲さざるを喻ふ。  
 笑つて損する者なし。  
 何事にても腹を立てず。常に機嫌よくして居れば利す  
 ることあるべしとの義。  
 笑つて損するやう。  
 氣げんよくして而して怒まれたる如し。



薬包に黄金。

外を敵へるもの危末なれども、其内に貴重なるものあり、外儀によるべからずとの義。「狂言記」醉菓、いや知らずばいうて聞かせう薬包に黄金といふ事ある此上蓋などにはいかに系圖の多いものぢやが其方が其の醉なぞには系圖があるまい。

薬で尻ふき、手で手ふら。

全く除き去られざるをいふ。(ぞんざいなること)

薬でたばねても旦那は旦那。

愚なる者なりとも旦那は旦那として之を敬せざるべからずとの義。往時寶永正徳の頃は風俗猶質素にして、卑賤の者は苧繩を以て頭髮を束れ、百姓は髪を結ぶに薬を以てしたり故にいふとぞ。

薬で作つても男は男。

無能なりとも男は男だけの事ありとの義。

薬人形も衣裳がら。

賤人といへども、美服を纏へば立派に見ゆとの義。

薬の上から育つる。

初生の時より小兒を養育するをいふ。

薬の上から貫ふ。

初生の小兒をしらひたるをいふ。

笑ふ門に福来る。

一家和合して團樂の樂ある家即常に平和に相喜笑する家には幸福多しとの義。古語に「氣致祥。乖氣致異。」笑ふ顔に矢たらず。

怒れる拳笑顔にあたらず(イイの部に同じ就きて見るべし)。

童の小刀、猿の勢。

恐るゝに足らずとの義。

薬屋の雨と御法義は出て聞かねば知れぬ。

御法義とは説教など佛典の講義の類をいふ。出て、聽講するもぞとの義。

薬をたかる。

薬をたく如くせらるゝの義か。即ち煽動せらるゝをいふならむ。

薬をたく。

一時元氣の事ならん。

割符を合すが如し。

事の能く都合するをいふ。「孟子」地相去る千里、世の

相後るゝ手有餘載、志を得て中國に行ふは符節を合する如し。符は竹に作り二に割りたるしるしなり。

悪い事は出来ぬもの。

直に報來るといふ義。

悪い聲には味噌の蓋する。

「續博物志傳」雷不蓋。雷、令レ人腹中雷鳴。雷の鳴る時に雷に蓋せざれば其聲を損じ之を食ふに腹痛を生ずとの義にして此蓋とは即味噌の事なり。此諺の本づく所なり。

悪い時は悪いやう。

運勢のよからぬ時に、何を爲しても、よからぬ事の起るをいふ。

悪い道には入り易し。

悪しき事の誘惑には陥り易しとの義。

悪い夢は咄さぬもの。

俗説。

われから食はぬ上人なし。

われからとは蟹の刈る藻に住む蟲の名。上人とは戒律を能く守りて徳の高き僧のことをいふ。殺生戒を守る

上人でもわれから食はざるはなしとのことにてわれからといふより誰れにてもわれから禍を招かざるはなしいふにも用ふ。

破鏡のやう。

大なる聲の形容。

破鍋に緞蓋。

其からぬもの、能く似合つて、何れも相匹敵するをいふ。拙夫醜女相伴ふが如き類なり。

我は爲て人のぼらけを嫌ふ。

己之を爲しながら、人の之を爲すを厭ふ義。昔ある人歌を學びしに、其師之に向ひて、朝ぼらけといふ言は、荷めにはいひがたきなりといへり。其後師朝ぼらけを諷みければ、其男怒みて我はよみ、人にボラケをよませずといひけり。是より出でたる諺なり。

我人を敬へば人亦我を敬ふ。

己れ先づ謙りて人を尊敬すれば人も亦己れに尊敬を拂ふに至るべしとの義。



お

威あつて猛からず。

威嚴ありてあらしくしからざるをいふ。「論語」述而篇「子温而厲威而不猛恭而安。」  
缺唇が慚に見ゆる。

「和漢故事要言」「缺唇が慚に見ゆると云ふは男女の交を結び、夫婦の因を成して恩愛の心切になりぬれば、夫たる者の不仁なるも耻と爲す、婦の身に於て不具なるも厭ふことなし、只淫欲の迷に心眼を落さるれば也と云事を述べて色を慎ましむる世話を云なり。」  
威權を笠にさる。

笠にさるとは頭上にかざす事。自己に權威のあるを待みて人に臨むをいふ。  
るざり三百文。

轉居費のこと。  
鰻蚌の爭漁夫の利。

二者相争ひて、他(第三者)に利せらるるをいふ。「戰國策」「趙且代燕。蘇代爲燕謂惠王曰今日臣來過易

水。蚌方出曝。而鰻啄其肉。蚌合而箝其喙。鰻曰。今日不雨。明日不雨。即有死蚌。蚌亦謂鰻曰。今日不出。明日不出。即有死鰻。兩者不肯相捨。漁者得而并擒之。今趙且代燕。燕趙久相支。以敵大衆。臣恐強秦之爲漁夫。」  
ゐて糞をする。

横着者をいふ。  
居ても立つても居られぬやう。

心中剛絶する所あるにいふ。  
井の端に子を置くやう。

危険にして憂慮に堪へぬことをいふ。「東坡志林」聖人視天下之不治。如赤子在氷天。  
井の中の獨言も三年立てば知れる。

秘密の事の漏れ易きをいふ。  
井の端に茶碗。

危険なること。  
井の端。

狭き所にのみ引籠り居りて、廣き所を知らざるものをいふ。「假名手本忠臣蔵」「そなたい貴様の様なうちに斗

り居るものを井戸の鮎じやといふ將がある。」  
井端會議。

數軒の家一の井戸を使用す、下女、妻君等多人數集りて人の噂世間話などをするをいふ。  
井を埋ると災あり。

俗説。  
田舎に京あり。

田舎に却つて京に耻ぢぬよき所のあるをいふ。「和漢故事要言」日本唐竺何方によらず、其國の都は帝王の御座所故に六藝に長ぜる人といへども皆集り居、大家豪貴の人も同じく爰に住す。寶玉珍貨山海の名物も、君王の徳になづきてひたすら爰に充滿するに依りて、京ほど物自由なる所もなければ、片田舎などには何程の事が有らむと、思ひ悔る心の出で來るも、玉城の住をなすもの、生れ付きたる氣向なり。かく萬に思ひ悔る人の愚昧を驚かして田舎といへども、又富貴の京に耻ぢぬあり、才智博學の鴻儒に恐れぬも有るぞと戒めたる詞也。」

田舎の學問は京の晝寢。

僻陬の地其師友に乏しくして勉學甚た不便なり。故に勉強して怠らざるも猶都會の人の晝寢にだに劣るとなり。  
田舎は口耻し。

「和漢故事要言」「田舎は口耻しと云ふは、邊土に生れて農事を事とし、朝夕田島の中に生長せる者として、悔ることなけれ、心直く淳に育ちて小善をも隠さず微惡なも免さず、賞を明に罰を重くして庸とするは、愚夫頑婦といへども此の如し況んや其中に古を學び、今を窺ひ廣く道を行ひて家に教へ國を化するの器などか無からむの心を述べて普く人を敬すべきの理を示せり。」  
豕を負ふ者其臭を知らず。  
我身の臭は我れ知らずとの義。  
野猪武者。

進むを知つて、退くことを知らず、徒に勇氣にはやりて突進する者をいふ。梶原景時源義經と逆櫓の論を爲し義經をさして野猪武者といへり。「漢書」食貨志「匈奴侵寇甚、莽大募天下囚徒人奴各曰猪突猪勇。」  
井の中の蛙大海を知らず。



見聞狭く志識の小なる者、大事を知ることを能はざるをいふ。「莊子」井蛙不可語海。拘於墟也。「本朝文粹」井蛙淺心。忽迷三千尺之激湍。蛙有曲井不知沿海之寬。歌に「はかなしや筒井の蛙のわればかりは位牌が物を言はぬ。」

死したる人の遺言などを曲げたりとて知るものなきをいふ。死して既に位牌に祀らるゝ人は言ふことなし。守宮の黒焼を振掛ると人が慕ふ。

俗説。守宮の血を女の肌へ塗れば脱ぬ淫すれば脱る。

俗説。

ふ

畫書に手書なし。

畫工に世の巧みなるものなしとの義。儻か敷銀。

「七小町」「五百荷千荷の荷物よりあの笑顔のふくはが敷銀。會者定離。」

「遺教經」分別見世皆無常。會必有離。あふは別の始(アノ部)参照すべし。畫をりごと。

實事にあることよりも誇張したることをいふ。畫工が畫く所すべて實かと相違あり故にかくいふなり。「古今著聞集」いかで實にさは候べき、ありのまゝの寸法に書いて候はば、見所なきものに候ふ故に繪そらごといは申すにて候。「論衡」圖仙人之形體而生毛。臂變爲翼。行雲則年增、千歲不死。此虛圖也。世有虚語亦

有虚圖。穢多と棒振。

相手の剛情なる者と争ふ喻。又勝つて利なく負けて不利なるをいふ。穢多は至て執拗にして強情なるものなり。之れと棒振するは甚だ愚なる事にて勝つて名譽に

あらず負ければ猶不名譽なり。穢多の子は皮剥ぎ。

俗説。穢多村に猪。

穢多より持つた。

穢多は人に卑めらるゝものなるが、たとへ何と卑しめられやうとも金を持つた方がよしとの義。穢多と雖ども金を持てるものは貴び敬はるゝをいふ。穢多として卑むる方よりも、金持として貴ぶ方が勝つなり。

畫にかいた地震のやう。其の現象を知ることを得ても其の本體を知ること能はざるをいふ。又地震は之を圖すること能はず、到底なきことの喻なり。

畫にかいた美人のやう。無情無味無言なることをいふ。又畫にかいた美人を見るやうとて徒に心を動すとも何の甲斐もなしとの義に

畫にかいた美人のやうに出づ。畫にかいた美人のやうに出づ。畫にかいた美人のやうに出づ。

畫にかいた餅のやうに同じ。

畫けるのみにて食ふべからず、之れを得んとして到底達し得ざることをいふ。「魏志」「選舉莫敢取有名。如畫地作餅。不可啖也。」

畫に書いた餅を食ひたがる。到底得べからざるを強いて達せむを望むをいふ。前の

畫に書いたやう。絶景なることを賞むる詞。

畫にもかかれぬやう。形容し盡すべからざることを。

繪の花には香なし。物の眞、即其の極致の所は到底言語文字に盡すべからざるをいふ。畫工が花を描くにも其花瓣の色、艶妍の美は寫すことを得れども、香氣人の衣袂を襲ふ眞に到つては、到底之れを描くこと能はざるなり。「鶴林玉露」「繪雪者不能繪其情。繪月者不能繪其明。繪花者不能繪其聲。繪泉者不能繪其聲。繪人者不



能給其情。然則言語文字。固不足<sub>レ</sub>以盡<sub>レ</sub>道。

醉に十の損あり。

酒に酔へば多くの損失ありといふこと。

笑の中に刀を礪ぐ。

次の諺を見るべし。

笑の中の劍。

表面やさしく深切なるやうに装ひて心中の陰險なるをいふ。「諺草」「唐書云、李義府、貌足<sub>レ</sub>恭、與人言、輒怡微笑而。陰賊福思著<sub>レ</sub>于心。凡忤<sub>レ</sub>其意者、皆中<sub>レ</sub>傷之。時號<sub>レ</sub>義府笑中有<sub>レ</sub>刀。諺<sub>レ</sub>これより出たり。「夫木集」表笠内大臣の歌に「何事をおもひけりとしられしなるみのうちにもかたなやはなき」公朝の歌に「手<sub>レ</sub>取れば人をさすてふいがぐりのふみの中なるかたなをさるし。」「和漢明詠集」言下暗生<sub>レ</sub>消<sub>レ</sub>骨火。笑中偷<sub>レ</sub>劍<sub>レ</sub>人刀。」

猿猴が月をとる。

「諺草」「愚人のおろかなるにまかせて身の分に及ばぬ事を爲して却て己が禍となる喻なり。付祇律云。佛告<sub>レ</sub>諸比丘。過去世時。波羅奈城。有<sub>レ</sub>五百獼猴。見<sub>レ</sub>樹下<sub>レ</sub>有

井。井中見<sub>レ</sub>月。共執<sub>レ</sub>樹枝。手尾相接。入<sub>レ</sub>井取<sub>レ</sub>月。枝折一齊死。この心を歌に「夫木集」月<sub>レ</sub>かけに命をかふる猿よりもしづみはてぬる我身なりけり」土御門院。

遠州濱松は廣いやうで狭い。

遠州濱松は都會のやうで、さほどの都會にもあらずといふほどの意か。但歌に「遠州濱松は廣いやうで狭い横に車が二挺立たぬ」といふが有りて見れば曾て遠州の廓が焼失して再建を見る能はざりしより、遠州濱松は廣いやうで狭い焼けて廓が二度建たぬ」といふ但歌の出でしを、音の相近きと廣いやうで狭いといふ意味をあらはすことによりて、横に車が二挺立たぬと洒落れていふに至りしといふ。是れより出たり但諺ならむ。

遠州濱松は女の夜這。

解に及ばず。

豌豆は日蔭でもばじける。

豌豆の其時期至れば自然に弾ける如くにすべての物の其時期到来すれば自ら發動すとの義。

遠慮ひたるし伊達寒し。

漫に物事に謙退すれば己の不利となり徒に衣裳など外

貌を装ふ者は一方に又身の不利となるべしとの義。人の響應などに往きて遠慮すれば空腹を感じ伊達の薄衣といふ如く伊達者は薄衣する故に寒さを感じるなり。遠慮が無沙汰になる。

日常の社交上遠慮といふことが一つの美事なれども餘りに遠慮過ぐるときは、訪問もせず、次第に無沙汰となるをいふ。

を

岡崎女郎衆は美しい女郎衆。

解に及ばず。

岡目八目。

岡基の語より出でたる諺。岡目とは傍にて見る目即傍観すること。八目とは傍観者は局に對して石を下すものより八目だけ上手なりといふ意。即ち何事にても局に當る者よりは傍観する者、却て能く見分けて詳細を盡すとなり。「西時常言」「對奕者惑而傍觀者審。非<sub>レ</sub>智有<sub>レ</sub>明闇。靜可<sub>レ</sub>以觀<sub>レ</sub>動也。」「東坡集」「奕者勝負之形。雖<sub>レ</sub>國工<sub>レ</sub>有所<sub>レ</sub>不盡。而袖手傍觀者常盡<sub>レ</sub>之。」「唐書」

ふん—たか—なこ—なし—なだ

元濟傳「當局者迷。傍觀者審。」「監鐵論」「從<sub>レ</sub>旁議者易<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>其當局則亂。」

驕る者久しからず。

一時の勢に乗じて驕者を恣にする者は自禍を招きて終に滅亡を免る、能はずとの義。「老子」「自教者不<sub>レ</sub>長」

夫婦相和し外出するとき互に手を携へて同行するほどのものないふ。なしどりは雌雄携睦じく常に相離れざるなり故に喩ふ。

教へるは學ぶが半。

人に教ふる事は半自分の學ぶに同じとの義。「禮記」教學半也。

小田原評議。(小田原評定)

評議相談の優柔不斷にして、何れとも決定する所なきをいふ。是は天正十八年北條氏康相模國足柄下郡小田原城にありて、豊臣徳川の軍に攻められし時、和戦の評定久しくして、終に決せざりしよりいふとぞ。「大行寺聞見」北條氏小田原に居り、評定所を設け、政令を議す。夙夜評定所に集會し、議論決せず、遂に亡滅



に至る。是より大衆の集り評議をなして、久しく決せざるときは、小田原評定と云ふに至れり。」  
夫あれば親忘る。

婦女子夫を持つに至れば自ら父母を忘るとの義。  
夫に對して唾を返すな。

夫の言に抵抗して争ふなどの義。  
夫は外を治め婦は内を治む。

夫は外に出て、働き婦は内に居て家政を治むるを任とすることをいふ。  
男達より小鍋立。

男達をせうより先づ一家の計を立つべしとの義。  
男に似たる女はなければ女に似たる男は多し。

世に男優りの女丈夫といふもの少しくて、女々しき男多しとの義。

男の翠丸女の乳房。

男女各要害部の所なりとの義。

男の心と秋の空。

男子の女子に對して變心し易きことを秋空の變り易きに喩。  
男の心と河の瀬は一夜に變る。

心の定まらざる男子の變心し易きを、女性の嘆じていふなり。

男の心と大黒柱とは太い上にも太いが好。  
男子の心小にして弱ければ何事をも成しがたしとして、強く太きを貴ぶ。大黒柱また家屋を支ふるに大事なるものなれば、太きを貴ぶ。男の心と大黒柱とは太い上にも太かれともいふ。

男の子に女の名を付け、女の子に男の名を付ける健康に育つ。

俗説。  
男の兒は父に従ひ、女の子は母に従ふ。

子のある夫婦離縁する場合に、男子ならば男の方に女兒ならば女の方に屬すとの義。

男の四十は分別盛り。

男子四十歳に至れば所謂不惑の年にして智慮の最も盛んなるをいふ。

男の光は七光

男子は威光ありて貴しとなり。  
男の目は糸を引け女の目は鈴を張れ。

男子の眼は細さがよく女の眼はパツチリと大きいがいよしの義。

男は氣でもつ。

男子は氣いすつぱりしたるをよしとする意。  
男は時宜にあわれ。

「和漢故事要言」男のみならず女とても不義なるは悪かるべけれども男は外を勤め女は内を治むといへば男の交りは別して義を重く禮を厚くせずんば有るべからずの心を云。

男は敷居を跨げば七人の敵あり。

世路人情の險惡なるをいふ。男子のみ言ふは男は外に出て直接に世の風波と戦はざるべからざるが故なり。河中には立てども人中に立たれず(カ)の部参照。

男は松女は藤

松に藤のからまる如く、女は男に頼りすがりて活くいふ義。

男前より容貌より氣前。

男子は容貌の美より氣前のよきを貴しとするの義。  
男鯨に蛆が湧き、女寡に花が咲く。

鯨夫は一旦妻を失ひし後、其縁乏しく、寡婦は一旦夫を失ひし後更に其縁を得るが多しとの義。鯨夫には他の女の方より情を通ずること鮮く、後家には男の方より情を通ずること多き故にいふ。男寡は世話するものなけれど、後家には世話をやくもの多しとの義にも用ふ。

尾に鱗をつける。

事實を誇張して次第に付け加ふる事をいふ。  
尾の長い尻のぼり。

尻があらぬといふ謎なり。紙魚に尾を長くすれば上らぬものなればかくいふなり。

斧を磨いて針に作る。

何ほど成しがたき業にても、耐忍して止むることなければ、其年月を細るに従ひて、いつしか成功を見るとの義なり。「錦繡萬花谷」昔李白讀書於象宜山中。未成棄去過小溪逢老媪方磨鐵杵問之曰欲作何物太



白感「其意。還卒業。」  
尾羽うちかからず。

浪人者などの斐れたるかたち。鷹より出てたる語。建武  
年中八月三條河原落書「尾羽をれゆかむるせ小鷹手こ  
とに誰もすゑたれば鳥とる事は更になし。」  
尾張盗美濃強盗。

尾張美濃の人から悪しといふ義。

終りの初物。

終り初物の轉か「珍書考」世間にてなんどの初物とい  
ふは物の終の初物をいふ此事如何。答曰是は儘なる出  
所あり太平廣記集異卷の二百七十の七十五葉目に江南  
の客を會して謝安が辭に以酒會友初香處。終座如三盃  
之初。とあり此意は初て酒を呑みさめる客もあるに、  
末座にて呑しまふは又端より盃の初るやうなといふ意  
なり。

女氏なくして玉の輿。

女容色勝れたらんには、たとへ卑賤の者といへども、  
貴人の妻に迎へられて貴夫人となるべしとなり。玉の  
輿とは出づるに立派な輿車に乗ることにて、貴人とな

女が雞卵の殻を踏むと瘡になる。

俗説。女が釣鐘の下へ這入ると蛇になる。

俗説(迷信)安珍清姫の故事より出づ。  
女が無けりや夜も日も明けぬ。

好色家のことをいふ。

俗説。女が袋をやぶらずに捨ると袋つ子を生む。

俗説。女が双栗を食ふと双子を生む。

俗説。女が細帯を締めて居ると唇が大きくなる。

俗説。女にしたらなき風をさせざらん爲の方便なるべし。

女懐胎中に袋を縫へば袋子を産む。

俗説。

女賢しうして牛賣り損ふ。

女の智慧は深からずとの意。女が出過ぎて却つて失敗  
するをいふ。「徒然草」牛を賣る者あり買ふ人明日其  
値をやりて牛をとらんといふ夜の間牛死にぬの條

参考すべし。

女と堅魚節固いほどよし。

女の貞操と堅魚節とは執れもかたいほど貴しとの義。

女に家なし。

「諺草」女以夫家爲家。故にみづからの家なし、又老  
ては子に従ふといふ諺と同意なり。女は三界に家なし  
ともいふ。

女の一念岩をも透す、男の一念寢處に盡た  
る。

女は男より執念深きをいふ。

女の賢いのと東の空明とはあてにならぬ。

女子の賢なる者にも猶ど、かに思慮の圓滿ならぬ所  
ありてたのむに足らずとの義、東天の明りたればとて  
晴天なりと定まらざるが如し。

女の腐つたやう。

男子の區々として優柔不断なるをいふ。

女の髪には大象も繫がる。

女色の男子を迷はすをいふ。「徒然草」世の人の心まど  
はすこと、色慾にはしっず(中略)されば。女の髪筋を

をん

女が雞卵の殻を踏むと瘡になる。

俗説。女が釣鐘の下へ這入ると蛇になる。

俗説(迷信)安珍清姫の故事より出づ。  
女が無けりや夜も日も明けぬ。

好色家のことをいふ。

俗説。女が袋をやぶらずに捨ると袋つ子を生む。

俗説。女が双栗を食ふと双子を生む。

俗説。女が細帯を締めて居ると唇が大きくなる。

俗説。女にしたらなき風をさせざらん爲の方便なるべし。

女懐胎中に袋を縫へば袋子を産む。

俗説。

女賢しうして牛賣り損ふ。

女の智慧は深からずとの意。女が出過ぎて却つて失敗  
するをいふ。「徒然草」牛を賣る者あり買ふ人明日其  
値をやりて牛をとらんといふ夜の間牛死にぬの條

よれる綱には、大象もよくつなげれ」

女の腰に火をいけよ。

女の腰は冷却して、あたゝかならざる故にいふ。

女の根性は蛇の下地。

「詩經」斯干篇「維虺維蛇。女子之祥。」

女の寒いと猫のひたるいは手のわざ。

俗説。

女の猿智恵。

女の智の淺はかなるをいふ。「日本武尊昔妻鑑」女の猿  
智恵うたがひそめし初一念。

女の好くもの芝居に蒞弱 薯南瓜。

解を要せず。

女の情に蛇が住む。

女の親切らしく見ゆれど、執念深しとなり。

女の妬忌なきは百の拙さを掩ふ。

嫉妬心なきを賞めていふ。

女の年始は三月まで。

二月一日を二正月といひて遠方より年賀の禮に行くな



り。女は子供杯ありて年禮に行く暇なき故三月一日迄を正月と見なすなり。

女の鼻の前。

女の智の淺はかにして、遠き思慮なきないふ。鼻の前

は見る所の頗る近きないふなり。

女の目には鈴をはれ、男の目には糸を引け。

女子は眼の大きい方を美とし、男子は細いを美とすと

の義。

女の物思ふにはうなだれ、男の物を案ずる

には仰ぐ。

思考するとき男は仰き女は俯すとの義。

女の利發牛の一散。

「當世誰が身の上」諺にも女の利發牛の一散とて鼻の

さきばかりにて底は愚かなること明けし。」

女は三界に家無し。

女に家なしとの條を見るべし。

女はさげて育てよ。

女子を教育するには、傲慢心の無きやうに、卑下温順

ならしむることに注意すべしとの義。

女は會釋のあまれ。

女は禮を厚くすべしとの事。「男は時宜にあまれ」參照。

女早はまよい。

女に振られて云ふ、まげじ言葉なり。至る所に女あり

との意。

女兒の言ふこと用ふべからず。

「史記」陳平世家「鄙語曰兒婦人口。不可用。」

女わらべの知る事ならず。

女兒の與り知る所ならず。「繪本太功記」女わらべの知

る事ならず、すさり居らふ」

尾を振りて憐を乞ふ。

人に媚び諂ひて救助を求むるをいふ。「禪門寶訓」英邵

武曰。末法比丘不修道德。少有節義。往往復其前。搖尾乞憐。追求聲利於權勢之門。」

尾を振る犬はたゝかれず。

犬の尾を振りて人に媚び廻るが如く、善柔なる者に對

しては、苛酷なる取扱ひは爲しがたしとなり。怒れる

拳笑顏に當らずといふが如し。

俚 諺 辭 典 終